039750-000-0

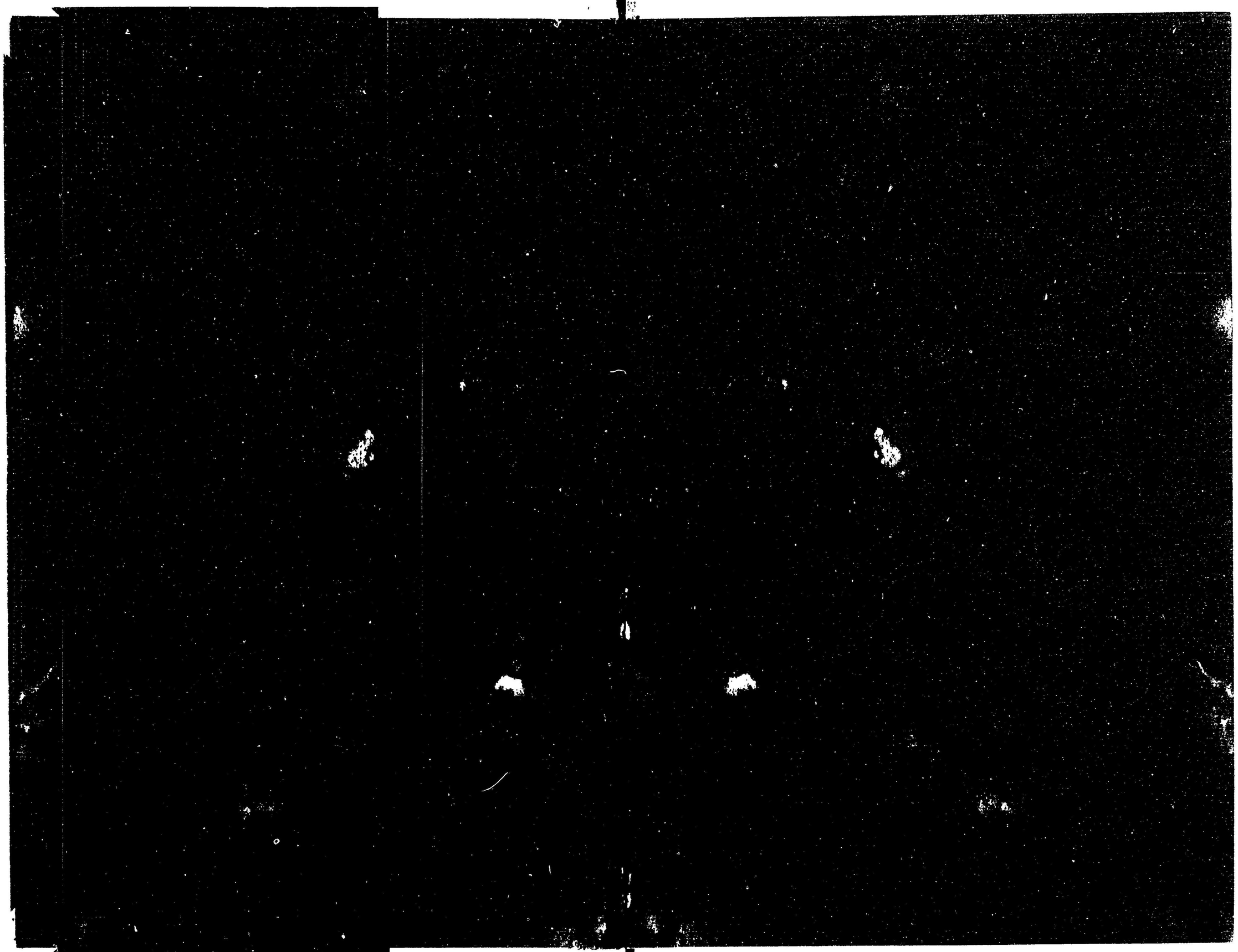
特15-830

海外より見たる社会問題

金子　喜一／著

M40. 5

BDB-0024



特15
830

海外より見たる

社會問題

金子喜一著

東京 平民書房

明治
40 6 21
内交

人夫子金

君一喜子金

「予を教育し賜ひし
両親の膝下にこの
書を献ず」

序

余は日本の讀書社會に向つて、哀心より此書を推薦す
此書の著者金子喜一君は、余が最も敬愛せる親友の一
人也

明治三十四年の交、余が初めて君と交を訂せるの時は、
君既に去つて海外に在りき、故に余等両人は未だ親しく
膝を一堂に把るの機に接せざりしと雖も、而も余は能く
君を知るとを得たりと信ず、君の狀貌風采は君の屢々郵
送し來れる其の修飾なき寫眞に依て、君の言語性情は君
の意到つて筆隨へる懇切なる言文一致体の書簡に依て、
而して君の學問識見は君が「萬朝報」「週刊平民新聞」「直
言」「光」「日刊平民新聞」「家庭雜誌」等に寄せたる言論文
章に依て

日本の諸生學者の海外に在る者、皆な日本政府の謳歌
者ならざるはなし、日本富豪の代辯者ならざるはなし、
帝國主義の主張者ならざるはなし、軍備主義（ミリタリズム）の贊成者な
らざるはなし、愛國者ならざるはなし、外交家ならざる
はなし、彼等の腦中、唯だ日本國家あるのみ、唯だ日本
民族あるのみ、彼等は國家民族の爲めに總ての物を犧牲
とするも省みざるの徒也、彼等の眼光は遂に日本以外、
日本以上に超脫するとを能はざる也、彼等の言論、彼等の
文章、唯だ日本の廣告の爲めのみ、日本の辯護の爲めの
み、而して獨り我金子君に至つては、彼等を少しく其撰を
異にす

金子君は世界主義者也、非軍備主義者也、非愛國者也、

共産主義者也、自由思想家（フリーレンカー）也、君は舊來の固陋なる道徳、偏僻なる習慣、壓制なる法律に反抗して、總ての人類の解放自由を企圖せる人道家也、君の眼中、亦民族の區別、國家の境域なるものなし、日露戰爭正に酣にして、末松謙澄、金子堅太郎の諸氏が海外に在て盛んに日本の文明、日本の富强、日本の正義人道を誇說せるの時に方り、「アレナ」紙上に掲げられし日本本會主義者の日本觀てふ一文……日本社會の貧乏、迷信、腐敗、罪惡を暴露して、歐米の文壇を驚倒せし大文字……は實に君の鋭利なるペンに成る者なりき、君今「シカゴ日刊社會黨」新聞社に在りて、同新聞及び諸種の雜誌に執筆するも、而も君の文章は、一國家一民族の爲めに私するなくして、徹頭徹尾唯眞理の爲めに叫ぶのみ、眞理の前には何物の權威も認められざる也、君は此點に於て在外の日本人中、實に一異彩を放てるの人也

君久しく海外に在りて、其意見は多く英語と英文とに依りて發表せらるゝが故に、未だ多く日本の社會に知られずと雖も、而も從來余等社會主義者、非軍備主義者、世界主義者の事業運動は、實に君が淵博なる學問、高邁なる識見に依て援助され、敎訓さるゝ者、多數なからざりき、今や君が、日本文の論集、初めて一卷として世に公にせらる、日本の一般讀書社會も、亦此書に依て得る所極めて多かるべきを信ず

如此きの友人同志を有し、如此きの書を推薦するを得るは、余の深く光榮とする所也

一千九百〇七年四月廿六日　　幸德秋水

序

金子君は其の所信に忠なるの人なり。君は社會主義を信ず、而も眞理に國籍の別なきを知れり。君は日本人の身を以てシカゴ社會黨新聞の記者となり、米國社會主義運動の爲に日夜其勞を惜まず。

君は又人情に國籍の別なきを知れり。君は其の世界主義（インターナショナリズム）を自己の職業上に實現すると同時に、亦た其の結婚の上に實現せり。君の愛人をジョセフイン、コンガー氏と云ふ。コンガー氏は社會主義の運動者として、又文人詩人として、稍や米國の社會に知られたるの人、而して今現に金子君と共にシカゴ社會黨新聞の記者たり。

嗚呼金子君夫婦の生活は實に欲すべき哉。予は未だ曾て金子君と相見ず、固より又ジョセフイン君と相識らず、然れども君等夫婦は常に、予を以て其の思想の友と爲し、其の運動の友と爲せり。予は常に、君等夫婦の友情に感じ、遙かに其の自由博大の生活を想望す。今や君の著書を日本の社會に推薦するに當り、敢て君の學と人とを言はず、先づ其の爲人（ひととなり）と生活とを紹介す。是れ即ち眞に君を推薦する所以也。

明治四十年五月

堺　利彦

自序

有体に曰へば、此の書は予が過去數年間に書きちらした文集たるに過ぎない、而も是等の文章は、予が今なは現住して居るし、恐らく生涯の居住地たる米國にありて、自分の貧生活に追はれつゝ、苦戰しつゝ、修養しつゝある間、少暇をぬすみつゝ書いたもので、予に取りては一個の忘るべからざる紀念である。

題して「海外より見たる社會問題」としたのは、其の觸れし所多くは所謂廣義に於ける社會問題で、而して予が今后の生涯を献げて、竭さんとして居る題目も、實は是れであるからだ。

今や我日本に於ても、社會問題の聲漸く高まり、蹂躙されたる人道は、其の姿を現はさんとし、一代の風雲正に此の一点に集注されむとしている、予は遠く海外よりこの風潮を觀して、實に愉快の情に耐へない。

予は思ふ、何事に於ても一片誠忠の念より起りし事業は、終に偉大の感化を残さずしてはやまぬと、世には名のために働くものあり、「成功」のために戰ふものあり、而もこれらは皆な私欲の業で、所詮は破れざるを得ぬ。

社會主義の運動は、少くとも常にこの私欲より遠ざからねばならぬ、その同情は海の如く、廣く、深く、而も一面に於ては、何物をも恐れず、何人をも憚からざる戰士の覺悟が必要である。予はこの一小冊子を作りて、日本に於ける同志諸君の前に献けたいと思ふ。

千九百六年四月

米國紐育市に於て

金子喜一識

海外より見たる 社會問題

目次

一、憎乎たる大夫
二、予は如何にして社會主義者となりし乎
三、米國に於ける離婚問題
四、「社會主義神髄」を讀む
五、米國文壇の心理學
六、所謂「美文以外の美文」
七、職業的移民問題
八、トルストイ、クラポトキン
九、家族制度問題
十、買收されたる米國の大學及教會
十一、ラッド博士の日本人觀
十二、學者と社會主義
十三、紐育の新聞について
十四、日本人の英文
十五、社會主義日曜學校

十六、「平民政治」の著者を聞く
十七、哲學館事件が與へし教訓
十八、「ヲサール」を讀む
十九、先生とは何ぞや
二十、ヘンリージョヂが墓にまうづ
二十一、ワシントン所感
二十二、社會的罪惡と婦人勞働者
二十三、吾人は家族を持つの權利ある乎
二十四、學ぶべき亞米利加
二十五、社會學に遊む
二十六、寄附金十萬圓の倫理
二十七、日本人排斥とは何ぞや
二十八、アービインが家のほとりにて
二十九、予は如何なる社會主義者なる乎
三十、言論の不自由なる米國
三十一、告白せる富豪社會主義者
三十二、革命家ゴルキーを訪ふの記
三十三、驅逐されたるゴルキー

【目次終】

憐れむべき火夫。

一

夕日のひかり消えやらぬ、
ハドソン河岸の丘の蔭。
一工場の窓によりて、
起てり一人の淋しげに、
火夫にやあらむ石炭の、
煙にそみし面影の、
蒼ざめはてしその裏に、
意ぞよそれける文明の。

二

ひねもす機械の底ふかく、

浮世のひかり見ぬところ。
あはれなりけり境遇は、
得て生れける腦力も、
ひらかしむべき折なくて。
流れてやまぬ進化てふ、
あやしき淵に沈みゆく、
胸に無言のうらみあり。

三

神を説くらむ哲人は、
發明やせむ科學者は、
嘯笑に腦らむ軍人は、
かの政治家と事業家と、
いづれも私欲にはしる時、

嗚呼悟乎たる火夫のみは、
何を望みて世にや住む、
一杯の酒乎一片のパン乎。

四

歸りゆくべき家もなく、
語りなぐさむ友もなし。
彼も人の兒ひと度は、
父と母とのありつらむ、
今はたうせてわらなくも。
望みなげなる姿もて、
彼今何を夢むらむ、
神のさかゑ乎文明乎。

五

日落ちて光き名去りぬ、
闇は彼をも覆ひたり。
嗚呼悄然たる火夫。
文明てふ名のもとに、
進歩の流はやき間に、
慰もなく望なく、
葬られゆく墓のうへ。
吾にとき得ぬ疑問あり。
「嗚呼成功乎機遇乎、
　嗚呼境遇乎失敗乎」（なはり）

*　*　*

予は如何にして社會主義者となりし乎

半年或水見足下、今より四年前、予がはじめて米國行を思ひたちし當時に於て予が頭脳を支配せし所の者は實に文學にてありし也、一冊の文學者たり、又なりたきを欲して洋行せし也、然れども洋行は予に多くの教訓を供せり、文學を學ぶべく來りしに米國は、予に教ふるに多くの新しき日課を以てせり。一日世界的社會主義」と曰ふ、これ有名なるイリー博士の著にして、素より一小冊子に過ぎずと雖へども、蓋し何も社會問題に志あるの士の知らざるべからざる書なり、而も狹き意義に於ての文學をもて生涯の事業となさむとせし予にとりては、全く新しき題目にてありし也、予は一は偖り代價の安きとによりてこれを購ひぬ、而して予は何の要意もなく讀みはじめたり、一章は了りたり、二章も了りたり、而して三章に至り、終にサン、シモンの章に至り、讀で彼が『予が生涯の事業は文明究竟の事に盡さんため、人心の活動を究むるにありき、爾來予は一切を奉じて献身此

の事に催ほし也」と曰ふに至て、予は彼が如何に誠實なる良心と熱心なる献身的精神を有せしかに服せざるを得ざりし也、本生トルストヰを敬しユーゴーを愛し、イプセンを讀みゾラを隆さいりし予にとりては、實に偶然異郷の朋友に會せしの感なくむばあらざりし、予はフウエーを了りぬ、ルイブランを終へぬ大膽にして、不敬なるブドオーンを喜びぬ、而してロドベルタスに入り、カールマルクスに會し、壯快なるラサールに面し、リーブクネヒトと語りて、終には「王者を離れて汝が手をば人民の上に擴げよ」とまで絶叫せるラメチローに至りて止みぬ、而して予は繰り返したり二度ならず三度までも繰りかへしたり、繰かへす度毎に予は新たなる感興を以て終らざるを得ざりし也、予は實に社會主義者の間に於て普時の使徒等が有したりし如き、立派なる熱誠と献身とインスピレーションとあるを見出したり、否な社會主義者に於てはじめて予は眞個の敬虔的大精神と又その實際的計策のあるを識認したり、然りと雖も予が社會主義に近づきはじめしは、必ずしも此時にあらざりき、獨に足下と安部君と片山、木下、村井の諸君と社會主義研究會を組織せらるゝや予は當時會員の一人たる豊崎君

を通じて、一度を列席を勧告せられたり、當時予は地方の一雑誌に從事せしを以て、かゝる會合に列席するの機會を有せざりし、加之、予が當時に於ける讀書の範圍は多く純文學のみに止まりて、政治や經濟や社會は殆ど顧みるとあらざりき、而も當時予が最も愛讀せる唯だ二ッの書籍は予をして今日の如き傾向あらしむるに至らしめし要素なりしを疑ふべくもあらず、二ッの書物とは即ちベンリージョーヂが「進歩と貧困」とキッドが「社會進化論」となり、予は實にかくの如くにして社會主義を知りはじめ、又近寄はじめたり。

二

秋水兄足下、予が社會主義に接近しはじめしは、全く讀書にはじまりし者なりと雖も而もまた予が思想の根底を動したりし者は抑も他にありて存せし也、予は紐育に來りて幾干もなく、多くの榮えつゝある實業的團体を見たり、トラストの暴横を見たり、勞働者の實狀を目撃せり、同盟罷工の到る所に行はるゝを見たり、醜業婦の白晝街頭を横行するを發見せり、サルーンの傍に悄然として起てる多くの失業者を見たり、あ

はれむべき工女の境遇を耳にせり、予は此自由の鄉に他の小兒の戲むれ遊ぶ間に於て憐れにも泣きさけべる多くの少年勞働者あるを、かのブローニインダ夫人と共に認めたり、予はイースト河岸の河岸通に於て數知れぬほど多くの立ちん坊に會したり、予は猶太人のクオーターに於て、伊太利人の住める町に於て、多くの貧兒が狹くるしき己が家に得耐へずして、悉く街上に群をなして惡しき習慣に早くも染みつゝあるを見たり。而して予は他方に於てフヒイフス街の壯麗なる建物を見たり、滑らかなる街道を心地よき音して走りゆくオートマビイールを見たり、予は一人の主婦が二十人の僕婢を召使ふを以て誇りとせるを耳にせり、下町のビジヂスクオーターの建物の層一層月毎に高くなるを見たり、予は新聞紙を通じて多くの重婚が富める人々の間に流行せるを見たり、所謂ミリイヲヂヤーの多くが女役者に婚するを耳にせり、予は富者が有せる一個の遊艇の一ケ月の費用が數万圓なるを聞けり、名あるビショップが財產ある寡婦と婚するを知れり、予曾てあるべき敎會の椅子が富者の金にて專賣せらるゝを見たり。シヤベルと稱するオペラハウスを越えて社會改良、貧民救助を唱へつゝ

ある社會改良倶樂部あるを發見せり、將來の國民を作るべき小學敎員の給料が、一馬丁のそれよりも乏きことを發見せり。

三

秋水兄足下、かくの如きは予が渡米後に於て、親しく目擊したる社會の概要なり、予は此光景の間に於て多くのコントラストを見たり。予は此二ツの甚しく異れる光景を通じて現社會の兩極端が各々全く異りたる方面に對ひて、進みつゝあることを了解せり同時に多くの疑問は予が胸を衝いて湧き來れり。社會は果して斯くの如く極端に走らざるべからざる乎、極端に進むとはやがて進步の必然の理法なゝ乎、極端なる競爭は果して人類進運の要關なる乎、適者生存は遂にヒユマニテイーを無視するの理法なる乎、予は愈よ疑ひはじめたり予は、書籍を通じて此疑問を晴らすべく、多くの學者に往けり、經濟學者にも往けり、社會學者の門をもたゝけり、然れども彼等の多くは冷然として曰へらく、社會はかくの如きものなり、競爭は進步の必然の道行也、今日極端と見ゆる者も明日はやがて自然進化の常規を走るに至るは必至の理なり、敢て必ず

しも深く憂となすに足らずと。而も予は此冷淡なる解答に滿足し得る者にあらざりき。而して予が平生のヒユマニタリアン的傾向は予を導びきて終に社會主義に往かしめたり、而して幾多の疑問と研究とを通じてはじめて滿足の結論に到達せり、予が知り得たる限りに於て、社會主義は二十世紀の吾人が夢み得る立派なる理想たるに止まらずして、直に社會に應用され得べき事何也、社會主義も人間の智識の不完全なる限り、全く完全なる者にはあらざらむ、而も吾人が進みつゝゆく間に於て、行ひつゝゆく時に於て、愈よ完全に近からしむる豫測の道たるや疑ひなきなり、換言すれば其實際的施設の手段は時と所に依りて、多少變換の必要あるべしと雖、其根底に横はれる大精神に至りては、吾人が生涯の總てを献げて働くの價値あるを信せずんばあらず、こゝに於て乎、予は斷乎として予の全身此立派なる精神に貢献せむと決心せり、予は即ち千九百三年四月二十二日を以て米國社會民主黨の一人に加盟せり。

秋水兄足下、社會主義は已に土臺となせる一大理想也、人道の此世に存續せる限り、人間の辨底一滴の涙の露の宿れる限り、社會主義は到底見捨てらるべき者にあらざる也、時勢は帝國主義を稱ふべく、平民主義者をして、變飾せしむるとありとも、吾人の社會主義は時勢の遷に其根底を破られ得る者にてあらざる也、何となれば人道の土臺は人間其者なれば也、人それ自身也、吾人自らなれば也、予は略ぼ以上に於て、予が如何にして社會主義者となりしやの大体を説明し得たりと信ず、若しそれ予は如何にして社會主義者として、其義務と責任を果すべきやに至りてはこれ予が將來の問題也、思ふにこれ蓋し予が將來の問題なると共に、又等しく足下の問題にては非らざるなき乎、足下願くば吾人をして今後の生涯に於て互に相協同せしめむ乎、予は今自身の新たなる報告を足下及足下の同志に齎らして偏に諸君の協力を仰ぐや切なり、所詮孤獨は力にあらず、協同は遂に勢力なれば也。（完）

米國に於ける離婚問題

離婚問題ほど、米國民の頭腦をなやます問題はないであらふ。近時政治家や宗教家の間に、此問題が頻りと論議せられつゝあつて、既に大統領ルースベルトの如きは、議

會に向つて千八百八十六年以來放棄されてゐた結婚及離婚の統計を集むることを勸告したほどである。統計に從へば一八六七年より一八八六年に至る過去二十年間に於て米國は實に三二八、七一六の離婚數を有してゐる。而して、その增加の比例の如きも驚くべき者で、即ち一八六七年には僅に九、九〇〇の離婚數であつたのが、一八八六年には二五、五三五の多數を示すに至つたことである。一九〇〇年度にありては、米國全體の人口七五、九九四、五七五と曰ふ數よりして、一九八、九一四の離婚者を生じた。即ち全人口の四百分の一は離婚者であつたのだ。

佛國の一記者が曾て米國に來て、離婚數の甚しく多いのを見て、米國は「仁惠の鄕土」であると評したが、成るほどキャソリック敎の如き宗敎に依りて支配されてゐる國からみれば、僅かに一種の仁惠に相違あるまい。一度結婚すれば如何なる事情ありとも離婚のゆるされぬのはキャソリック敎の信仰であつて、近時に至るまでかゝる思想信仰が一般社會の道義の上に及ぼした感化は、惡しき方にも、又善き方にも非常な者であつた。その弊として婦人は結婚の一醜業婦の言語を聞いたことがある。彼女の語る

所に依ると、一家は皆な揃ふなキャソリック信者であつた。然るに一日彼女の夫が病死して了つて、自分は獨り孤獨を守るべく殘された。所が、生活上の雜儀と、自分の獨りの小供を養ふ手段とに、彼女は情けなくも醜業婦となつた。憐むべき彼女は、醜業婦を初めることは再婚するよりも惡しくないと思つてゐたらしいのである。かゝる例は素より一見例外である如く見るも、實はさうではなくて、似たり寄つたりの事實が種々なる形の下に行はれてゐるのである。

それで、米國に離婚の極めて多い事實は、一面社會の墮落を語つてゐるが、他面に於ては人間精神の自由であることを示してゐると思ふ。何故かと曰ふに宗敎や信仰の力で吾人の精神の自由を打ち消して、一度結婚すれば、假令如何なる情狀ありとも、離婚を許さぬと曰ふは、必竟餘りに形式に走りて、眞の愛、平和、幸福と曰ふ點から見れば、何等の價値もないことである。

一言に離婚と曰ふと、何者をも意味してゐぬが、離婚も歷史的に見來れば、種々樣々なる變化をしてゐるのである。昔時野蠻な時代にありては、女子は眞に男子の奴隸

であつて、少しく男子の氣に向かぬ行爲ありし時は、男子は無慘にも女子を殺して了つて、今日、所謂離婚を行ふたのである。かゝる時代と比較すれば、女子の側から見る場合に於て、その著るしき女權の進歩、自由の擴張は驚くべき事實であるまいか。今日の女子は所謂離婚法に依りて、男子の野蠻、獸慾性より救はるゝことが如何に多いことであらふ。

米國各洲の離婚に關する法例は、重に姦通を主題としてある。即ち、五十洲のうち、五十洲までは姦通を以て離婚の最大理由としてある。その他、五十一洲のうちで四十洲に於ては飲酒の惡習慣、四十三洲にては法律上の罪人となりし時、二十四洲にては有意的に妻女を保護せぬ場合等を以て、離婚の理由のうちに數へてある。而して、サウスカロライナ洲には、所謂離婚よは無いやうである。今回政治家間に起り來れる問題は、殊に大統領ルースベルトの主張する所は、此の各洲異れる離婚法を改正して、成るべく各洲を通じて、一致せしめたいと曰ふのである。

他來の離婚法の如く各洲相異れる法規を有するに於ては、一洲にて理由とならぬ理由を、他洲に行ふて離婚理由として堂々離婚を成就する輩が多くなり、從ふて減るの離婚統計は著しく多く、他の洲の統計は甚しく少ないやうな結果も現はれ來るのである。甚しきに至りては、歐洲よりわざ〳〵離婚を遂ぐる爲に米國に來る徒も折々あるやうな始末であるから、是非此離婚法の一致と嚴密とを計らねばならぬと曰ふのである。曰ふまでもなく、かゝる法律の制裁は一面必ず必要であつて、殊に各洲一致せる離婚法を作ることの如きは、目下の急務として忘るべからざる點であらふ。吾人は大統領の此の主張に對しては、何等の異見を挾む要のないことを信ずる者だ。

然しながら滔々たる、離婚の增加を、かくの如くにして果して、ふせぎ得るかと曰ふ疑問が起らざるを得ぬ。抑も離婚とは必しも德義の敗退を意味しない。女德の腐敗を意味しない。離婚は婦人のエマンシペエーション（解放）の一面である。宗教家の如きは口を極めて德義の墮落を唱へてゐるが、彼等は何故に一步を進めて、今日の離婚を舊破せぬのであるか。離婚は結婚あるから起る問題で結婚なくては離婚も何も出來る者でない。然らば、今日の結婚の狀態如何と見來るならば、吾人は離婚問題の轟々た

る詮議も、遂に何等の意味なきことを證せざるを得ぬ。

今日米國に於て、離婚沙汰の最も多く聞かるゝのは、比較的、生活の餘裕ある者の間で、貧者間に起る問題としては、左程の問題ではない樣である。否な貧者にとりては離婚問題の起る前に、離婚が出來るや否やの問題が重大なるのである。されば、離婚問題は富める階級の弊と專有物であると曰ふも不當であるまい。而して此富者の今日の結婚は如何。吾人は憚るまでもなく曰ふ。彼等の結婚は實に肉欲の結合であると彼等は愛なくして結婚し、愛なくして離婚するので、離婚とは唯だに「あきた」の一言に盡してある。彼等は容易く女役者に婚し幾萬の富の所有者でありながら、賣子女（セールス）を嫁り、甚しきに至りては、財產ある後家とセショップとの結合をも見るに至るのである。十七八の妙齡の女子にして、六十の坂を越へんとする老翁に婚するが如きは決してめづらしきことでない。彼等の結婚は肉慾と財慾の結合で、それを結合させる耶蘇坊主の所謂神聖なる儀式も、又財慾のそれである。

吾人は尙一步を進めて女子の側面から、此結合の裏面を見たいのである。何故妙齡

の女子が、愛もなく戀慕も合はぬ六十の老翁を抱いて相眠らんとはするや。何故女ヒデのせぬ米國に於て、好むで右び果てたる後家を撰びて吾妻と呼ばんとはするや。忘れてはならない。米國に於ては、結婚は一個の職業となつたのである、結婚は最早や神聖なる一生の大事でもあらぬ。結婚は女子にとりては、喰ふ口にありつく唯一の方法たるに過ぎぬのである。故に彼等はその愛のなき結婚を敢てして恥と思はぬのである、彼等は一個のタイプライター器械の如く、唯だ男子の色情を滿足せしむれば足りるのである吾人は離婚の一面を稱して女權の擴張と曰ふた。然り、女子は此の解放されたる權利を利用して、自己の衣食を得るの器械に用ひた。而して、彼等は職人が常によりよき雇口にありつきたき如く、常に眼を見張つて、月給の良き口をとさがしゆくのである。而して、昨日は甲に、今日は乙にと轉々として、その雇人を變へてゆくは無理もないことで、離婚はこゝに生じ、再婚は彼處に增加しゆくも、決して驚くには足らないと思ふ。

米國母の會の會長スコフ婦人は嘗て絶叫して曰ふた、「千八百六十七年より一九〇一

に至る、三十五年間に於て、米國は七十萬の人々が家庭を閉ぢ、百四十萬の男女が破鏡の嘆に落ち、而して少なくとも百四十萬の小兒は此等破壞された家庭の犧牲となつた。而も彼等は孤兒となつたよりも不幸である。彼等の父母は此無邪氣なる小兒等の心中より、早くも結婚、親心、家庭等の觀念を取り去つて了つたからである」と、吾人は必ずしも自ら勝手になした破鏡に對しては、同情の一點をも寄するの勇なき者であるが、かくの如くして暗黑と不幸とに殘された幾萬の兒女に對しては、泣かざらむと欲するも得ぬではないか。

彼等は早くも家庭を呪ふべく、兩親を憎むべく、結婚を厭ふべく、養はれつゝある社會道德上の敵として恐れざるべからざる者である。米國の離婚問題の裏面に橫はれるのである、こは眞に社會の平和を根底より破壞する分子で、吾人は來るべき時代の大問題はかくの如くである。一面に於ては婦女の職業敎育の發達よりして、女子の獨立心を增加せしめたこと、容易く男子の奴隸となつて甘せぬこと。他面に於ては、生存競爭の恐るべき結果として、生活の不安、黃金の勢力がはびこり來りて、女子は

結婚を以て職業を恵惟するに至りしこと、富める男子は黃金で買へぬ者はないと思ふに至りしこと等で、詮じ來れば經濟上の事情が如何ほどまで、社會道德を支配し、作爲し、變化せしめつゝあるかを明白に語つてゐると思ふ。

然らば、此問題に對する眞個の解釋は、從つて明々白々であらねばならぬ。卽ち、婦人の經濟的獨立を益々計ること、恐るべき生存競爭の社會組織を根底より改造すること等であると思ふ。かくせば、離婚法の如きは無用の長物で、黃金の力を崇拜せし男子も、金で買へぬ者が世に澤山あることを見出すことであらふ。而して一面に於ては敎育、文學、美術等の力をかりて、趣味の高く、品性の貴く、心のあたゝかきことを修養しゆくならば、吾人は此の恐るべき離婚の流行を去ることが出來るであらふ。操り返して言ふ。愛なき結婚は滔々たる離婚の原因で、而して愛なき結婚は經濟上の原因に寄る所多くあると曰ふことである。吾人は限りなき離婚の害毒を止めんとする前に、先づ限りなき無愛の結婚をふせぐの道を講せねばならぬ。

幸德秋水君著　社會主義神髓を讀む

勿論眞理に忠實なる公平の學者の著書ならば有益であるが平生キリスト敎でもモルモンでもキヤソリックでも金にさへなれば辯護の勞を取り批評とは上げ足とりと心得てゐるやうな學者の多い當今の世に誠實にして公平な批評の述作を見ることは望まれぬのである。

秋水君の著はペーヂ數から曰ふと片々たる小冊子である、また內容から曰ふも必ずしも悉く新奇ではない、然しながら著者の目的たる「勉めて枝葉を去り細節に拘せず一見明白に大綱を了解せしむる」點からみると實に立派な著述であると曰はねばならぬ。

先づ著者は貧困の原因をあげて今の社會組織の如何なるものであるかを說明し更に進むで近世產業の進化に至り器械の發明より端なく資本家てふクラスの發生を語り而して社會主義の主張、効果、運動と順を追ふて說き去つた所は實に序事整然として一絲も亂れてゐぬことを認められる。

他の何事は措いても予は著者が「產業の進化」に於て說いた所に最も重きを重かざる

社會主義ほど書き易く又書き難い題目はあるまい、世に社會主義を說くの書は蓋し澤山である、日本語にてはまだ少ないが獨、佛、英、伊の諸語には殆ど數へきれぬ程ある。

然るに若し玆に人ありて何れの書を讀まば社會主義を一番能く解され得る乎を問ふ者あらば、何人も一寸返答に苦むのである。何故なれば此に至つて難い題目を悉く明快に而も簡短に書き盡してゐる者がないからだ。

レーなりカーカップなりイリーなりシャフレーなり隨分能く公平に說いてゐるが而も此等の一つを讀みて社會主義を了せりとは曰はれない、日本語で從來かゝれた者は田島錦治、村井知至、島田三郎、矢野文雄、高橋五郎の諸君であつた、然し一つとしてまた簡明に大体を盡してゐる者を見出さなんだ、且つや多くは自己の胸中既に他の所信を以てゐて書くのであるから、初の頁より反對の意が現はれてゐて、社會主義を社會主義として發揮することが出來ぬのである。で社會主義の眞の主張を聞かむと思ふ人は是非共斯主義を奉ずる人の手になつた著述に行かねばならぬ。

を得る者である、何故かなれば今の社會主義を難ずる者は何時も資本家てふ者が進化の結果であり、自由競爭の賜物である、而して競爭は產業發達の一大原因である如く說くからである、而も彼等は進化の原則に付て未だ深く考へてゐぬと思ふ。

進化なる者が單に競爭で成り「優勝劣敗」であると說いた時代は過ぎ去つて了つた、今日に於てダアウヰンの進化論が何處まで發達せし乎、進化說と曰へばダアウヰンと思ふ人は早や時勢おくれの一人である、今の進歩せる科學の進化は競爭のみで成り立たぬことを吾人に敎へてゐる。

競爭は進化のファクターの一つであるが決して總てゐあらぬ、生物進化は更らに他のファクターを要する、それは即ち協同である、競爭と協同と兩々相待たねば生物でも動物でも人間社會でも進化する者でない、進歩する者ではあらぬ、地質學者として有名なプリンス、クラポトキンも近時「相互扶助」と曰ふ書を著して此の事實の研究の結果を委しく說明してゐる。

倉派の經濟學が個人主義の土臺に立つて所謂ラゼ、フエヤー主義を鼓吹したのも最早歷史の上に葬り去られむとしてゐる、競爭のみで社會進化が出來ぬてふことは今や產業社界にも認められんとしてゐるではないか乎、社會主義は即ち此協同を說く者である、吾人が社會主義の精神を鼓吹せんとする所以は必竟此のうちもすてられたる道理を明にするためである。

佛のフウリエーが全力を注いで說た所も此の協同の理であつた、ミルも其經濟學原理に於て「社會主義の種々の形式のうちで最も巧に組みたてられて、そして一大先見を以て居るものはフウリエリズムである」と批評してゐる、「弱肉强食の哲學」や「强者の權利の倫理」や「英雄の道德」が到る所敎へられつゝある今日、吾人は「協同の哲學」と「相互扶助の倫理」と「平民の道德」とを鼓吹するの必要を感せざるを得ない。

社會主義は實に此點に於て當代を風靡するに足る所の一大精神である、宗敎である。哲學である、「社會的」なる言語は今後の社會進化の性質法則を說明し盡してゐる、思ふに社會學の進步は將來幾多の社會改良說を提出することであらう、而も今日の社會に對する今日の改良策の最もよき一つは社會主義的精神の普通と實現とであると思ふ。

予は秋水君の新著に於てシャーフレーが僅に百ページ内外に於てなしたと等しく、如何にも明確にさうして力づよく社會主義のアルファ、オメガを説明し得て餘せりと感じた、「社會主義神髄」は一面からみると實に朗々として誦し得べき一篇の詩である文章の巧妙なると一語の無用句のなき點に於ては、吾人は著者の美術的手腕の非凡なるを認めずには居られない、吾人は社會主義者として日本語の文學にかくの如き良好なる著述の加へられたことを著者に對つて深く感謝する者である。予が「社會主義神髄」を讀むで感じた所の總てのありのまゝはこれだけである、予は批評したのではない、感實の所感を忠實に記したのみだ。

米國文壇の心理學

米國文壇の心理學なぞと曰ふと、少しく奇を好むが如き題目であるが、實は必ずしもさうでない、佛のレボンと曰ふ學者は、何事にも心理學をつけたがる人で、「人民の心理學」、「社會主義の心理學」なぞと曰ふ書物を著して、所謂ヲルガニズムの心理を研

究してゐる、爭の「ン」に用ゆる心理學の意も等しく此の意味で、聊か自分の經驗と、見聞と觀察とを、土臺として、米國文壇の内容を語つてみたいと思ふ。

自分が米國の新聞雜誌に、初めて關係しはじめたのは、今より四五年前で、勿論片手間の仕事をしてやつたので、全力をいれてやつたことは未だ嘗てない。で自分の經驗は至つて狹く、唯だ筆一本でからくも生活しつゝあつたのは、實際、一年足らずであつた、然しながら、予の最も長く住つてゐたのは、北米中で新聞、雜誌、出版事業の、第一位を占めている、紐育であつたから、幸にして幾多の便利を持つてゐたのは曰ふまでもない。

日本の文壇も近頃は、余程タイムリーヌスと曰ふことを貴ぶやうになつて來て、自然と時好物でなくば、掲載を見合はすと曰ふ工合の傾向があらはれてゐる、殊に日露戰爭後の諸新聞雜誌は、殆ど戰爭物で充ちてゐる、米國の新聞雜誌は、此時好物を最も貴ぶので、これが殆ど米國文壇の生命である、一と口に曰へば高橋五郎流義の、一層はげしい奴なんだ、戰爭がはじまると早速「戰爭哲學」でも、一夜で書きあげると曰

ふのが肝要で、その内容の何であらふと、素より關する所でない、一例をあげて曰はふなら、日露戰爭のまだはじまらぬ前、日本と云へば何でも時好であつたので、「評論の評論」記者は、早速スタンホープ、サムスと云ふ、つまり偽日本通に依頼して、日本字改良論を書かしめた、所が此の改良論の要旨はともかくとして、日本は惣々羅馬字を採用することにしたなどと書いたので、横濱のジヤパンメールの如きは、當時冷笑して曰くサ、日本語のアルファベットすら、知らぬ者が日本字改良論はあきれる、「評論の評論」記者とも曰はるべき人がかゝる暴論を平氣で紙上にのせるとは何事ぞ、と。

かやうな例はいくらもある、少しく眞面目の雜誌たる「評論の評論」ですら、時好を追ふに急にして、やゝともすれば、かゝる不始末を演ずるのである、已に時好物が主とせらるる世との交渉に起つ文士なる者の運命は知れてゐるであらふ。

日露戰爭が初まつてから間もなく、予は一日「インデペンデント」主筆ホルト君から、一個の電報を受けとつた、曰く少しく書いて貰ひたい者があるから、至急予の宅まで來てくれとの意であつた、自分は從來インデペンデント雜誌の東洋雜報を時々書いてゐたのでホルト君とは折々出逢ふのであつた、然るに此の電報の、用向は、全く違つた者で、戰爭が初つたから、日本の現時の花役者連を書いてくれとの依頼であつた。

打ち明けて云へば、予は今日まで不幸にして、日本現時の所謂政治家連や、軍人の立派なる傳記を書かねばならぬ、位地に出逢ふたことがなかつた。インデペンデント社の此依頼に接せし時の、予の驚きは如何なりしぞ。予は自問した、予は遂に桂太郎、伊藤博文を傳せざるべからざる乎、予がペンは彼等をほめあげるべく、予に與へられたる乎と、予はホルト君に別れて後一日、更に電報を受とつた、曰く彼の依頼は暫く見合せくれよと、自分は實に喜ばさるを得なかつたのである。

勿論、桂や伊藤を描くにしても、若し自分の見たるまゝを書くのならば、予と雖も決して厭ふ所であらぬ、去りながら、米國の文壇には一種の憲法がある、それは「批評無用」と曰ふことである、米國文壇には批評と曰ふことが、殆ど無用視されてゐる、

日本や佛國や英國の新聞でみるごとき皮肉な評論は夢にも見られない、若し伊藤が時好物であるならば、文士はそれをほめねばならぬ、假令彼が何であらふとも、成るべく多く見能はざる所の、善所までもとりたてゝ、見ゆる所の惡所は、知らぬふりをせねばならぬのだ、附加して云ふて置く、予が所謂批評とは皮肉でもほめまつるの意でもない。

元來米國民は概して理屈がきらひだ、議論をさける、批評を好まぬ、批評と云ふことは紹介と云ふことに解せられてゐて、書籍批評の如きは殆ど紹介で、長々しく書物の大意を記述するのが所謂批評であるのだ、紐育タイムスは毎土曜日附錄として、「書籍批評」を發行してゐるが予はいまだ嘗て批評らしい批評をみたことがない。タイムスの批評記者が、予の著書をかくはめてくれたなぞと、うぬぼれる著述家がありとすれば、そは米國批評の眞相を解せざる愚物である。

北米の雜誌中で批評の最も鋭どくて、而も信賴するに耐ゆるは、紐育の「國民」と曰ふ週刊雜誌であると予は思ふ、此の週刊はイビニイングポースト、……嘗てハームス

ウオース氏が評して、世界一の良く編輯されたる夕刊とも曰はれた、新聞社員の發行するもので、つまりポーストの週刊と曰ふ方が適當である、此の社の評論は惡しく云はゞ、消極的に失し過ぐるの點もあるが、概して、英國的に落ち着いて、何所となく深い所がある、極く最近の例をあぐれば、山縣五十雄氏及一外人の合著たる日本歷史の英語と、朝河貫一君の博士論文の英語と、岡倉覺三君の「日本の覺醒」の內容とは、此のヂーションの手にかゝつて、聊か手きづを負ふた所の連中である。

然しながらこれは例外で、米國では賣れぬ雜誌の一つである、少しくやかましく、議論をしたり批評しりたする雜誌はどうも賣れない、「アウトルック」の「インデペンデント」より賣れるのは此理由である、見られよ、堂々たる唯一の議論雜誌たる「北米評論」も論文ばかりでは賣れゆきがまづく、一年許り前より遂に小說をも載せることにして、ヘンリヂエームスは、その最初の小說を受け持つたのである、「フオーラム」も議論雜誌であつたがこれも賣れぬので、到頭月刊より四季刊になつて了つた。

此他に純粹な議論雜誌で今存在してゐるのは、「評論の評論」と「アトランチックモ

ンネリー」位のものである、最近シカゴ市に出版されてゐる「ウオールド、トウデエ」、それから紐育の「ツオーツ、ツオーク」も性質は議論雜誌であるが、これは寧ろ書の方に多く力をいれてあるので、文章は書の說明みたやうな者である。

これに就ては面白い實例がある、自分が紐育にゐた時分、一日「ウオーツ、ウオーク」の主筆カンニッフ君から手紙が來た、何か少し話しがあるから社まで來てくれまいかとのことであつた、自分は早速行つてみると、カンニッフ君曰くヤ、「君時にあの有名なグリフヒス君から、日本に關する論文が私の所に來てゐるが、何か君の所に良い寫眞はあるまいか、寫眞がなくちやや論文もしやうがない。」

余はあきれざるを得なかつた、寫眞がなければグリフヒス君の論文も使ひ所なしとはひどいではないか、所が能く能く聞いてみれば、「ウオーツツオーク」の編輯主義は書だ、寫眞だ、論文ぢやない、讀むのではない。見るのであると云ふことだつた、いや見るのではない、客間の飾りとなるのだと云ふことだつた。米國雜誌の重なる特色は無論書である、ボストンで發行してゐる最も議論ずきの、而して進歩主義の雜誌「アトランチック、マンスリー」位のものである、最近シカゴ市に出版されてゐる「ウオールド、トウデエ」、それから紐育の「ツオーツ、ツオーク」も性質は議論雜誌であるが、これは寧ろ書の方に多く力をいれてあるので、文章は書の說明みたやうな者である。

これに就ては面白い實例がある、自分が紐育にゐた時分、一日「ウオーツ、ウオーク」の主筆カンニッフ君から手紙が來た、何か少し話しがあるから社まで來てくれまいかとのことであつた、自分は早速行つてみると、カンニッフ君曰くヤ、「君時にあの有名なグリフヒス君から、日本に關する論文が私の所に來てゐるが、何か君の所に良い寫眞はあるまいか、寫眞がなくちやや論文もしやうがない。」

余はあきれざるを得なかつた、寫眞がなければグリフヒス君の論文も使ひ所なしとはひどいではないか、所が能く能く聞いてみれば、「ウオーツツオーク」の編輯主義は書だ、寫眞だ、論文ぢやない、讀むのではない。見るのであると云ふことだつた、いや見るのではない、客間の飾りとなるのだと云ふことだつた。米國雜誌の重なる特色は無論書である、ボストンで發行してゐる最も議論ずきの、而して進歩主義の雜誌「アトランチック、マンスリー」位のものである、最近シカゴ市に出版されてゐる「ウオールド、トウデエ」、それから紐育の「ツオーツ、ツオーク」も性質は議論雜誌であるが、これは寧ろ書の方に多く力をいれてあるので、文章は書の說明みたやうな者である。

リーナ」までが此頃は矢鱈に書をいれつゝある、書がなくば賣れぬとは、讀む人よりも見る人の方が多いのであらふか、それとも見ながら讀むと云ふのであるか、予は苦だしく返答に惑ふものである。

米國新聞雜誌に書の重せらるゝのはかくの如くであるが、その結果として、新聞書の發達には驚くべきである、これは慥に米國新聞の誇りであるに相違ない、「紐育ジョナル」のデーベンポート君と「ボストンヘラルド」のウワーレン君なぞは、その最も名高いカーツーニストである、彼等は多くは社說をイラストレートするのであつて、殊に日曜日の書のついた社說の如きは、慥に一種の偉觀である、されば米國の新聞社では、編輯長の他に一番澤山の給料を拂はれてゐる者は、此のカーツーンかきである。

論說書きは、書家よりも輕んぜられてゐると云ふのが事實なのだ。

「ピヂネス、イズ、ピヂネス」てふことは、米國の何れの社會にも行はるゝ精神で、山陽の所謂文士筆を取るなぼ英雄劍を取るが如しなぞと云ふことは、實に米國では無意義である、筆をとるのはピヂネスだ、金のためだ、衣食のためだ、主義とか、精神と

か、良心とか、それは馬鹿々々しい、文士は人ぢやない、機械だ、そこで日本からか
支那からか、一個のプリンスが來れば、早速たわいもなく、はめたてる、オヨーペンハウエルぢやないが、恰も小犬の如く、はへるわ、はへるわ、而も意地
惡く食ひかゝるなどは夢にもしない、プリンスの影が見へなくなると、續いてきた政
治家をあがめまつるのである、政治家が見へなくなると、輕業師と云ふたやうに。!!

日本では江見水蔭が時好小説を綴るのでやかましく批評する人もあるが、米國では
當然のことだ、論より證據、日本唯一の英語詩人野口米次郎君は如何だ、彼が近頃日
本からはるばる送つてくる通信や、文章は何であるか、あるひは讃者を歌つたり、あ
るひは大隈伯をかついだり、あるひは旅順口の戰場に日本軍人の勇を稱へたり、ある
ひはおぼつかない畫の知識で日本畫の紹介をしたり、あるひは何伯、何侯夫人の忠勇
なる働きをほめまつりたりしてゐるではないか、若し日本の眞面目なる批評家をして
評はしめば、野口は八方美人だ、高貴なる理想を欠く、詩人に理想なきは花に香のな
きが如し、余り多くの世俗的調和主義は到底偉大なる詩人の資にあらずと云ふであら

ふ。

然り、野口米次郎は日本の批評家の理想する如き詩人ではない、彼は米國物質主義をそのまゝにアクセプトした詩人である。否な機械である、然りと雖も人若し米國に住みて筆を以て生活せんとすれば、勢ひ何人も野口たらざるを得まい、若しそれ非常な天才にして眞に美術に忠に、眞理を愛し、理想を奉じ、能く人生の戰を戰ふ所の勇士であるならば、勿論物質主義を容易くアクセプトはしない、否な決してせぬ、けれどもそれは眞の人材に期すべくして、滔々たる世の所謂才子に待つことは出來ないのである。

白狀すれば、自分も戰爭の初まりし三四ケ月は「紐育タイムス」や「ウォールド」やに折々筆を取つて、例の時好物を書いたのであるが、如何うも面白くない、自ら思はざること、好まざることを書くほど苦痛なことはない、で何時やめるともなく全く止めて了つた。足立金之助君は純然たるライティングメシインで、今でも頻りと、將軍やプリンスやの傳記物を「インデペンデント、」「評論の評論」等に書いてゐる。憐むべし妻あり

子ある彼は、書かねばならぬ、書かねばならぬ。

原稿料を拂ふ點に於ては、米國新聞雜誌は隨一であらふ、「評論の評論」「ウォーゾウォーク」等が一頁約十弗、「インデペンデント、」「アウトルック」が一頁約七八弗の割で、日刊新聞は一段「タイムス、」「サス」等では約七八弗、少しく賣れぬ新聞は四五弗內外、社會主義及基督敎の新聞となると一段二弗位しか拂はぬ、最も社會主義新聞でも、「アッピールツーリーゾン」の如き非常な讀者を以てる者は、一段五弗の割で拂ふ、此の社會主義新聞は、日本で最も多く賣れると云ふ、朝日万朝とを合併したよりも、まだ多くの紙數を發行してゐる、社會主義もかうなれば一個の勢力である。ハーパース週刊の如きサイヅの大なる雜誌は、一頁二十弗位の割で拂ふてくれる。兎もかく「太陽」の一圓五十錢、あるひは二圓に比して何等の差であらふ。

つゞめて云ふならば、米國の文壇生活は、實に無趣味である、主義や、精神や、巧みを樂むよりは、寧ろ機械にならねばならぬ、學問は無用である、主義は無用である、巧みは不必用である、批評はチンプンカンである、唯だ書けよ、ほめよ、かつげよ、寫眞を

添へよの四者で足りるのである。

予は米國と英國とを比較し來る時に、智識の安價、精神的修養の安價、主義の安價を認めては、米國の文明のまだまだ淺く、皮相であると云ふことを悲まざるを得ぬ、米國が唯一の「北米評論」を維持し乘ぬる間に、英國は「十九世紀」あり、コンテムポラリー、フォートナイトあり。ウエストミニスター評論、エヂンボロウ評論、國民評論、インデペンデント評論等の有力なる月刊雜誌を有せるを見て、潛かに羨望の情に耐へぬのである、予は日本現時の文壇の心理學が果して米國のそれと相似たりや否や、あるひは正に相似むとしつゝありや否や、切に批評家諸君の研究を煩はしたいと思ふ。

所謂美文以外の美文

黑岩涙香君の「美文以外の美文」と云ふ題は有益で趣味ある講演を讀むで、今さらながら學者の文章と云ふことに思ひ至つた、黑岩君は如何にも適切な仕方で、今の所謂學者の文章の乾燥にして讀みづらいと云ふ點を擧られて、吾國の學者を警醒せられた。

そして其理由の一として日本の學者に誠實の處がない、即ち一は著述者として書物を成るべく讀るべくすると云ふ誠實がないこと。二は眞理や學問に對する誠實のないことの二大要點を擧げられたが、これは吾國の現狀よりみると甚だ有力な理由であると思ふ。

國家や國体や忠君を善い言ひ草にして進歩思想を否定して、心にもない説を説いて、自分の地位や權勢を保つに汲々たる學者輩に名文のあるべき筈がないのだ。黒岩君は此反證として内村鑑三君をひかれた。正直に白狀すれば平生予は内村君の思想と一致の出來る者でない、然し内村君の文章の現も角人を引きつける事實は掩ふべからざるとである、かく言へば内村君はヲスキンと等しく、世人は吾を稱するに思想を以てせずして文學を以てする、吾は寧ろ自ら文章家たるを恥づと言はるゝであらうも知れぬが、そこは黒岩君の言はれた通り文章ではない、誠實である、予は内村君の誠實をアドマイヤーせぬ譯にはゆかぬのである。

誠實と文章とはある點まで、離るべからざる關係を以てゐる、唯一つ誠實の缺けて

ゐるために立派な文章を作り得る新聞記者でありながら、その文章が何處となく臭氣紛々として讀み得ぬ例が澤山ある、これは世人が能く知つてゐることで一々例證をあげる必要もある筈い。

然しながら予は吾國の學者の文章の拙なる理由の一つとして、今一つ忘れてはならぬことがあると思ふ、それは吾國在來の文學にダアウイン、ワアレス、ハックスレー、スペンサー等の學者の文章家を産むに至つた所の、沙翁やミルトンやベーコンの文學がなかつたと曰ふことである、日本文學の極めて貧乏で、異つた語法に富んで居ぬ事實は、如何に和文を崇拜する人でも否定することは出來ないであらう。

徒然草や源語や式部日記の文學で、今日の人類學や社會學や言語學や生物學を記することは出來ない、抑も概して和文と云ふ者の性質を考へてみると如何にも單調で、何れも同調子の感情的、悲歌的語法で、一体の調子がどうしてもプリミテイーブであつて今日の樣なディハーシフハイした思想を記述するに適せぬのは明白なことだ。然るに一歩を進めて從來の國語教育を見渡して見ると、一層悲むべき保守的狀態に居た

のである、今日までの小學であり中學にしても其國語敎科は如何であつた乎。

予は今に記憶してゐる少時小學で學んだ讀本の如何に乾燥無味な文であつた乎、そして中學敎育に移りては例の徒然や源語の類、さもなくば粗大極まる白髮三千丈的の漢文であつた、かやうなプリミティーブの文學に養成されて端なくも歐文に入つた時の心地は甚だ異樣な者であつたのである。

全体今の國文敎育に依て、眞の文章に趣味を持たせる樣になるのは甚だ困難である。勿論前に言ふた粗大な所謂古典的和漢文に趣味をもたせたり、三十一文字や韻則的漢詩を作る位の手引とはなるであらう、予もその文章や詩歌は餘りに原始的で他日近世的法律をやり科學を修めてそれを言ひ現はさうとする時、彼等はその言語の餘りに遠ざかつてゐるのを感するのである、丁度これは今日の科學をグリーキやラテン語で書うとすると一般で所詮行はれる者でない、此點に於ては予は寧ろ今の學者の文章の拙を責むるの少しく酷なるを思ふ者だ。

今の國語敎育はかくの如く全く誤つてゐる、何故敎育の當局者は、比較的近世的で

ある、またそれに近づかむとしてゐる時文を敎へぬのである乎、さしあたり小說で曰へば黑岩涙香君の實なり內田不知庵君のなり德富蘆花君のなり、時文で曰へば福澤翁の文なり內村鑑三君のなり幸德秋水君のなり、何れも徒然草や丈方記のやうな原始的ではなくて今日の思想を兎もかく言ひ現はし得る文章である。

予は信じてゐる、若し此樣な文章が小學時代から敎科書にいれられて澤山敎へられてあつたなら、學者の文章の讀みづらいことが今の如くでなかつたであらうと、けれども舊式の學者敎育者輩は今の文章と云ふと直ぐ馬鹿にする惡癖がある、彼等は唯だ古いもの、名のあるものに感心するので、正味の如何を以て公平に感心する者でない。そこで源語と云へば何となく難有くなり、さては古文古典を註解するを以て一生の大事業と心得てゐるのである、寧ろあはれむべきことである乎と云ふ。

世には文典學者と云ふ道樂者があつて、今の時文は文典にかなはぬから駄目であるとか、國語の法則を破つてゐるとか、敎科書にはいれられぬとか、種々な議論をして時文を非難する一種の學者がある、文典と云ふ者は一定不變の黃金律であるかのやう

に考へるのが抑も間違の種である、沙翁に沙翁の文典のあるのを知らない乎、カーライルに彼自身の文典のあるのを知らない乎。

西洋の開けた文典學者は、言語と云ふ者は流行と同じ様な者であると言ふてゐる、なるほど實際流行みた様な者である、一人の目立つた人が使へばそれでよいとなるのだ、衣服の流行でも婦人の帽子の流行でもつまりは同一理である、日本の英學者の間に一時は知られた、文典學者のアダムス、ヒルは今より十數年も前に「吾等の英語」と云ふ書物を書いて、矢張り英語の時文の墮落を嘆じてゐたが、然し所詮言語が活物である限りは進歩する者である、吾等は文典的であるために言語の進歩を妨止するわけにはゆかぬと斷言してゐる。

日本語は今過渡の時代にあるので、わけても此言葉に耳傾けねばならぬ時である、文であるよりも理解し得る的でなければならぬのだ、否な理解し得るよりも言ひ現はし得ねばならぬ、組織的事實でも、科學的研究でも。

こゝまで來ると自然、言文一致の問題に移らねばならぬ、今日多くの人は言文一致

を以て唯だ平易にすると云ふ一點から、即ち文を言に近づけ言を文に近よせるとの點からのみ主張して居る様であるが、これは少々物足らぬ心地がする、何故となれば予は此他に一大理由があると考へてゐるからである。

言文一致でなければならぬ理由の最も大なる一つは單に平易主義のみでなくて、言文一致は實に科學的語法、換言すれば組織的に物を言ひ現はし得ると云ふ點にあるのである、組織的と云ふことは必ずしも退屈を意味しない、緩漫を云ふのでない、思想の順序は論理的であらねばならぬ如く語法も科學的でなければならぬ。

藝術の奥義は露のトルストイが「藝術とは何ぞや」を著して反復繰り返した如く人と人とを結びつくる手段である通り、言語もその如くである、そしてこれより他に出でぬのである、してみれば今の所謂漢文くづしは全く此目的を遂し得ぬと云ふて差支はあるまい、何故となれば漢文くづしは近代思想のありのまゝすらも、綴り得ぬ不都合なのである、少なくとも非常な困難を經ねばならぬ始末である、況や文の生命をまち受けたり、チャームを期することは殆ど無理な注文と言はねばなるまい。

漢文くづしの文章の一大缺點は總体に於て餘りにスウキーピイングで粗大な所にある、日本の「思想史」を繰りかへしてみると此粗大な語法の形式がどれほど日本人を非科學的にした乎、幾何位日本人の思想の發達を妨害してゐる乎、事實を離れて空想に走り「針小棒大」に流れてゐる漢學的感化の恐ろしいのは此一點である。

そこで漢學思想の最も多くの感化を蒙て居る多數の日本人は英語の生活に到底入り難い、論より證據には今日英語や獨、佛語の學者は澤山あるが何れも其語の生活にはいつて、眞に其言語の含めゐる空氣を吸ひ得て居る者は、果して幾人あるであらう、勿論これには他に理由がないでもないであらう、而も漢學思想の感化はその重なる者と曰はねばならぬ。

非組織的漢學思想の感化の一適例としては日本人の學者の著述が一番よいであらう見られよ日本人の著述がどの位非組織的である乎、多くはセンチイメンタルでなければ忙しい概括で、西洋人の眼から見たら誠に粗大な者と評すであらう、予は一々例を擧げてゆくの必要を認めぬ、そこらにありふれた著述を手にして見れば直ぐ分ることである。

今一つの例を云へば日本に就て書いた日本人の著述と西洋人のそれとを比較して見られよ、維新以後日本人の書いた著述のうちにランソムの「過渡時代に於ける日本」ボーリユーの「極東の覺醒」カアーゾンの「極東の問題」ノルマンの「ありのまゝの日本」の樣な著述がある乎、或はあるであらう、予は不幸にしてまだ見ない、これは如何なる理由である乎、日本人とても此位の能力のないではない、唯だ悲しいことには思想する仕方が所詮漢學的である、物を見るの眼が粗大で組織的でないからだ、これを委しく論ずるには論理法と思想發達の關係、即ち考へることの術と、言ひ現はすことの術との相關的生命を語らねばならぬが餘り長くなるから茲には略すとしやう。

言文一致は此點に於て漢文くづしの缺を補ふてゐる、又益す補ひ得る望を持てゐる、何故かなれば言文一致は從來日本文漢文の有して居つたレトリックの外に西洋の修辭法を自由自在に用ひ得る便利がある、再び內村君を引出すのであるが同君の文章は西洋のレトリックで日本語を書いた好適例である、文章の妙は言葉でなくて語法に

あるのだ、日本語を改善すると云ふことは西洋の科學的語法を成るべく澤山輸入するにある、そして粗大な非科學的漢學流を成るべく多く取り去るやうにせねばならぬ。

予は前述の理由のみに依ても言文一致を主張せざるを得ぬ一人である「言文一致と詩歌の將來」なぞに關しても多少の異見はあるが、別問題であるから又他日を待つて論じて見たい、予は學者の文章を論じて端なくこゝに至つたのは、其原因が遠く當今の國語教育の制度に存してゐると思ふたからである。

米國なぞでも比較的保守と曰はれてゐるエール大學ですら、今日カレーヂ教育からグリーキ語を除てしまはうとしてゐるのに日本の教育家は何を苦んで中學教育に古典的和漢文の必要を說てゐるのである乎。

移民問題＝職業的移民

米國移民と言ふことは屢ば我國人の口にする所であるが、今日迄米國移民が如何程まで成功しやうとある乎、未太平洋岸に在る農民や鐵道人夫や最近のテキサス地方に於ける米作者は、勿論多少の成績を有して居る、而も其爲して居る所を概括すれば下等勞働のそれである、米國が最も厭ふ所の人足的勞働者である。

米國が支那人の移民を拒む所以は、主として彼等の米國化せぬのと廉なる勞働の點に在る、廉なる勞働は直ちに生活の欲求の程度の低いことを意味して居る、であるから米國勞働者の如く、高い日給を取て高く生活する者と比べると、種々な點に於て差異を生じて來る。

米國移民で甚だ困るのは無教育てふ一事である、例へば同じ歐洲から來る者にも、北歐洲からと南歐洲からとは異同がある、獨、英、瑞典、和蘭等から來る移民は米國市民と殆ど異ならぬまでの教育が有るから、自然米國化することも早く、又米國市民と同等の職業生活をすることが出來る。

之に反して羅甸人種即ち伊太利、土耳其、葡萄牙等は多くは全く文字が無い、彼等は下等勞働に從事して滿足して居る、從つて罪人も多く疾病もあり死亡も多い、此等

が米國の社會上、道德上、政治上に及ぼす感化は爲政者の默過されべきものであるまい。

千九百年に日本から送られた移民の數は一萬二千六百二十八人であつたが、文字のある程度は百に對する八、九の割合で、餘り惡い方では無かつた、而も玆に考へねばならぬことは、技能的職業なき移民の多數を占めて居るといふ事實だ。

統計を見ると明治三十三年の日本移民の中で、手に職なき者は實に六千五十五人で、職ある者は僅かに千七百九十三名であつた、歐洲からのも露國人、伊太利人、希臘人、葡萄牙人は手に職なき者多く、キューバ人は煙草製造を以て、猶太人は裁縫師を以て孰れも職業移民である。

職業移民でない移民は直接衣食の問題に窮することになる、夫で致し方なしに給仕人をしたり、少し聞かじりて料理人をしたりする、勿論桑港の支那町には靴師、烟草製造、シャツ製造等をして居る、支那人の數ばかりも二千五百名餘ある、其他菓物の荷賣や雜業に從事して居る者も少くはない。

紐育の樣な大都會となると、一層職業的移民の必要を感ずる、歐洲の移民は此點に於て一步進んで居る、けれども事實は、人は多いが眞に使へる職業的移民がないから、都會は事業に於て每年膨脹しつゝ行く間に、職業の門戶は何人に向ても開かれて居る間に、無職業者の數は非常の比例を以つて增加しつゝあるのである。

機械工であり、製本師であり、工場職工であり、タイプライターであり、製圖家であり、印刷工であり、寫眞師であり苟くも實力あるものは此の廣大なる紐育インダストリーに餘地のないことはない、唯だ夫れ一つの困難は組合の組織の固く行はれて居て、ユニオンの人でなくば雇ひ入れぬ事實もある、併し夫は先づ自から進んで米國市民となり組合に入り、彼等と同業の給料を取て行くことにすれば必しも難關ではない、現に左樣して居る人もあるのだ。

時事新報であつたかと思ふ、「中等移民」と曰ふことを說て居たが其意味が少し漠然として居た、思ふに所謂中等移民とはクーリーの夫れに對してのことであらう、而も實際は慈善の敎育ばかりではいけぬ、職業のない移民は米國には適せぬと思ふ、米國の

やうに何事も或點までバライキユライズして居る所では、普通敎育の有無は最早第一のコンシダレーシヨンの中に入らぬ、否それは既にあるものとして、其上に職業敎育が加へられてあらねばならぬ、「職業的移民」といふことは、米國移民と考へる時、第一に考へねばならぬ要件と思ふ。

日本が從來の如く、米國市民の一般と、道德に於ても敎育に於ても、非常にかけ離れた無職業のクーリーのみを送ることをして居たなら、日本人は早晩支那人と同樣な運命に遭遇するは必然の順序である、クーリーの要さるべき土地は米國ではない、北海道でなり、支那でなり、朝鮮でなり、西比利でなり、到る所あるではない乎、日本の米國移民に志ある者は遠き將來の計をなして、米國てふ廣大なる我等の顧客を全く失はぬやう務めねばなるまい。

トルストイとクラポトキン

（原文略す）

I
Two great Soldiers of Justice,
Appeared at the front of Czar's throne,
Bravely and boldly they arouse,
Lifting up the flag of revolution.

II
In sympathy with helpless poor,
They have fought against the countless proud,
Never discouraged by Continuous failure,
Believing the last triumph of honest deed,

III
The one was born to be an artist,
And the other to be a scientist,
But both gave them up all,
Finding another way for the noble call.

IV
Among fig hters, whom the world ever had,
They stand with no Comparision at either side,
Thank Russia! for the great contribution,
The Count Tolstoi and Prince Kropotkin.

此の極めて拙い無韻の英詩は、予が初めて米國に來た年、即ち今より凡そ七年前、露國の二偉人を尊敬のあまり作つた者で、當時シカゴ市から發行してゐた、露國革命黨の機關新聞たる「フリー、ソサエティ」紙に掲げたのである。當時の予は無論社會主義者でなく、唯だ平生露國文學を愛讀せし結果として、此二偉人の、社會的思想とその行動とを觀察し來りて、自ら兩個相いれざる的相異を見出した。

トルストイも、クラポトキンも、等しく露國の貴族で、而も時代の欠點をみて、兩個等

しく一身の地位幸福を犧牲として、社會民人のために起つた所の偉人である。彼等の胸中にひそめる思想は、實に社會民衆の幸福であつた。彼等兩個が露國を愛し、露人を思ふの情は、恐らく他の何人にも劣らなかつたであらふ。然に彼等兩個は露國政府のために苦られた。トルストイは國敎より見はなされた。クラポトキンは外國に放逐された。

一夜、自分のために戸外に待つてゐた馬丁がこゝへ仆れたのを見て、はじめて眞面目の生涯に目醒めたのはトルストイであつた。多くの科學的發明が常に少數人士の手にのみ樂まれて、民衆の多くに及ばざるを慨し、科學者の生涯を捨てゝ社會改善のために盡さんと決心したのはクラポトキンである。前者は個人的に醒め、後者は社會的に醒めたのである。

トルストイは小說家、宗敎家として、クラポトキンは地質學者、科學者として、前者は預言者、後者は科學者。トルストイは夢み、理想しクラポトキンは觀察し、研究す。トルストイの策する所は突飛的、非實際的で、何處までも理想家である。彼の眼中には近世進化論の所謂進化は遲々たる者であるてふ單純なる道理も無い、彼はキリスト敎一點ばかりである彼は常に過去を夢みてゐる、原始キリスト敎にかへれとは彼の絶叫である。

クラポトキンは長く言論自由の英國に住み、北米レパブリックの空氣も吸ひ、世界を漫遊して世間は廣い者である、人間社會の進化は一足飛びではゆかぬ、空想では駄目、實地に行へることとよりせねばならぬと曰ふ常識の上から來てゐる。彼は無神論者で、從つてその思想はフハンタスチックでない、彼は數字を重んじ、事實の上に起つて議論をする。

「レザレクシヨン」を書いたのはトルストイである、「フヒールズ、フハクトリー」を著したのはクラポトキンである。前者は空想、後者は數字。前者は小說、後者は社會經濟學である。トルストイは「余の宗敎」を著してゐる時分に、クラポトキンは「相互扶助」の斷片を英國の一雜誌に出しはじめた。

トルストイは益々個人主義に傾いて、殆ど極端にせんとしてゐる今日、クラポトキンは社會の進化は相互扶助の結果であると論ずるに至つた。一は遂にアナーキー（無政府）の哲學者、他は漸く社會主義に近いて來る。前者は飽くまで二千年前の夢を夢みてゐる間に、後者は二十世紀の科學を目標として居る、一は反動的一は進步的。

今回露國に於けるゼムストボウ（地方議會）運動に對して、兩個の抱ける思想は、一番よく二者の相違を語つて居る。トルストイは今回の改革運動に對して曰く「憲法政

治は露國を改革するの理想でない、憲法政治の弊は、世界歴史の教ゆる所ではないか、英國であれ、佛國であれ、北米であれ、彼等は露國が夢みてゐる理想政治ではない、露國の疾病は遂に憲法政治のいやし得る所でない、新自由の曙光として、ゼムストボウ運動を見るが如きは大なる誤りで、こは寧ろ又新たなる障礙物を迎ふる者と同一である、露國を政治的に救はんとするは所詮空である、露國の眞の救濟は宗教である、基督教の眞の光を吹きいれるより外はない。

クラポトキンは謂へらく「ゼムストボウ運動は、露國の新曙光である、自由はこれより生れん、かの惡むべき壓迫はこれより其影をかくさん、進歩はこれよりはじまらん、人道はこれより笑みそめん、社會民人はこれに依りて、其發展を遂げ得べく、泣く者はこれより笑む者となり、失望せる者は、これより希望の光に其眼を開かん」

兩者の思想の如何に異れるかは、これに依りて充分であらふ、トルストイは何處までも政府てふ者を排して、極端なる個人主義、無政府主義を主張し、新約聖書一卷を以て總ての社會問題を解釋せんとする者である。トルストイの眼中には國家なく、社會なく、社會組織なく、政府なく、集合團なく、唯だ單獨なる個人あるのみである。

彼の腦裏にはキリストの時代と二十世紀に至るまでの二千年間の歴史なく、遺傳なく、畢竟ずれば第二十世紀の社會と二十世紀の社會とは同一物であるかの如く思ふてゐる。されば原始キリスト教を唯一の眞導者として、空想の天國を指しつゝ「人よ彼處にのぼれ」と呼ぶ者である。

クラポトキンに至りては極めて非宗教的であるだけそれだけ科學的で、歴史を讀み、人類進化の足跡をたどり、事實の社會はかくある者である、人間の不完全なる間は政府も必要である、より良き政治組織は理想に一歩を進めたもので、決して理想の障礙物ではない、吾人の理想に近よるは漸次を以てするより他はないと將來を忍耐強く待たんとする者である。

予は今こゝに二偉人の可否を委しく論ずるの時間を持たぬ。蓋し世間に多く見る所の社會改良家なる者も畢竟此二人のタイプに過ぎない。一は餘りに急激で、過去を忘れ將來を見ぬ所の空想家となり、一は自然進化の理法を了し、進化は漸次たるべく、急激たる可らざる者と念じて、實行の出來る所より、手を出してゆくと曰ふ實際家で

ある。トルストイの理想はトルストイのみに可で、社會一般には不可である。吾人のトルストイに學ぶべき所は彼の理想でなくて、寧ろ彼の理想を行ふ勇氣であるのだ。概して曰ふならば、吾人はトルストイ的たるよりも、クラポトキン的たるの實際的で、而て又眞の改良家の態度を備へた者かと思ふ

家族數制限問題

家族數の制限問題などゝ曰ふと、恐く一般社會の人々はその問題の極めて新奇なるに驚くであらふ。而も事實に於てはこは極めて切要なる問題であつて、苟も社會問題に興味を持てる人は研究せねばならぬ題目である。家族數制限問題とはその字の語る如く、家族數を制限することで、今日まで世の識者が餘り此問題を議せなかつたのは一は社會思想の勃興せぬのと、一は問題その者が餘りデリケートで、道德上から幾分かひかへ目にした點もあつたであらふ。何れにしても、今日の如く生存競爭がはげしくなるにつけ、吾人は人道の上から此の重大なる問題を論じてみたいと思ふ。

此新奇なる問題は、いまだ米國の如き新奇を好む國民に依りても公然論ぜられてはゐぬが、事實に於て、家族數の制限は漸々行はれつゝあるやふである。而して如何曰ふ風に此の實行がその歩を進めてゐるかと曰ふに、これは一は道德上の問題として米國民の大に考ふべき點があるらしい。何故かとなれば、此の家族數制限の要せらるゝは、寧ろ下層社會のことであつて、上層若しくは富家のためには比較的不必要の如くは見ゆるにも係はらず、今日行はれつゝある家族數制限は、所謂富家に依りてのみ實行されて居るからで。

元來此問題の問題として切要なる所以は、斷して富家には少なくて、寧ろ貧家に多いのである。今日生存競爭の愈々激烈となり、人は唯だ衣食を得ることにのみ汲々せねばならぬ時代にあつて、一番強く下層勞働者の頭上に、かゝる所の重荷は何であるか。答ふるまでもあるまい。それは家族數の少數多數である。彼等にとりては、一人家族の多いことは、それだけ重荷の增加を意味してゐる。昔時は小兒の出產は一家の祝福であつたのに、今日は實に一家の重荷である。否な呪咀であるのだ。

然るに不幸にも所謂貧家には、世人が稀して不道徳となす所の家族制限法が行はれてゐるので、これを富家に比較すれば家族數は多いのである。米國に於ける富家の狀態は今や實に恐るべき危期にせまつてゐる。彼等が家族數制限を行ふ所以は、決して經濟上若くは敎育上の精神を土臺とせるよりも、寧ろ肉欲上の土臺の上に立つてゐるのである、況一歩を進めて貧民の狀態をみれば、吾人は家族數制限の必要を論せざるを得ぬのである。

吾が日本に於ては年々五十萬の人口が增加しつゝあるので、これは一方から曰べば賀すべきであるが、他方から見れば又悲むべき事實である、世人は此の增加を稱して國民の膨脹であらふ。而も此の膨脹は決して喜ぶべき者でない。見よ多くの無職業者は年々增加しつゝあるではないか。貧民は日增しに多數となりつゝあるではないか。始末に窮せる移民を何處に送るべきか。是は、恰も貧家の經濟が限られたる所に多く出來た小兒と同じで、充分なる衣食も得られず、敎育も保育も與へられぬと同然である。吾人はかくの如き狀態にある人口增加を指して國家の祝福と曰はれやふか。

佛國にありては、年々人口の減少を憂ひて、數年然と思ふた、一種の法律を作りて家族數增加の奬勵をしてゐる。その法律とはつまり財產分配法のことで、例令ばこゝに三人の子を持てる父があるとする。而してその父が財產を分配するの方法は、長、次三男と曰ふ順序でなくて、一番多く小供を持てる者に一番多く分配すると曰ふ方法である。又ゾラの如きも「子孫繁盛」と曰ふ小說を作つて、頻りと人口增加を主張してゐた。かくの如き主張は、佛國に於て果して必要であるか、又不必要であるか。これは充分に佛國の社會生活を研究した上でなくば決せられべきでない。徒らに人口增加を以て一國の繁榮、衰枯を曰ふは、必竟皮相の觀察たるに過ぎない。

一國の上より見るも、勿論唯だ人口增加の故を以て、その國の祝福となし得ぬ如く一家にしても同じことで、若しその家の經濟上の狀情が充分でなく、多數の家族を支ふることの出來ぬ場合に於ては、家族の增加は決して祝福であるまい。唯だに祝福で

ないのみか、實に悲慘の種である。その父母は、多數の家族を支ふるために過度な勞働をせねばならぬ。而してからくして衣食は支へ得るとも、彼等を正當に敎育することは出來ず、世界の戰場に出でゝ戰ふまでの準備も敎育も成し得ぬ中に、早くも追ひ立てゝ世界になげ出してしまふのである。その結果としては、即ち小兒勞働となり、不良少年となり、婦人勞働となり、はては賣淫婦となるのである。

かくの如き人口は假令一年五十萬なり百萬なり增加しても、一國は却りてその負擔に苦むばかりである。敎育のゆき屆かぬ、體育の發達の充分ならぬ人口は一家にも一國にも呪咀である。今日の死亡統計は何を示してゐるか、小兒死亡の多數ではないか小兒死亡の多數は何故であるか。つまり保育の不充分からである。されば增加せしめて短く敎すよりも、增加せずして長く活すの勝れるに如かずではないか。且つや弱くして不完全なる、無敎育なる人口を增加せしむるよりは、强く、健全にして、敎育せられたる小數の人口を持つが、却りて一國及一家の祝福であり、進步であり、而して眞個の膨脹であると思ふ。

抑も、一日一圓內外の收入の家に四人五人の家族は多過ぎるのである。彼等は如何にして此の收入より四人五人を正當に養育し、敎育を與へ得べきか。犬の食料に一ケ月百圓以上を支出し得る富豪にありては、人間の家族が十人あるも二十人あるも何等の重荷であるまい。彼等は三十の家族を持てることを他人に誇り得るであらふ。而も勞働者の狀態はこれに反してゐる。彼等は犬どころでない、先づ自分の衣食すらも充分給せられぬのであれば、彼等にとりては非常な問題であらねばならぬ。

予は今おぼろげながらに記憶してゐる。幼時予が隣家の貧しい家に出產があつた時兩親は生れるや、直に其兒を殺して了つて、世間へは死んで產れたと吹聽してゐた。當時その隣家は非常に困難中で、出產は實に呪咀であつたのだ。吾人はかゝる實例を日々の新聞紙で見出すに難くない。又昔時岡山縣のある田舍には一種の家族制限法の習慣があつたそうだ。それは、多くの出產がある毎に山の奧に捨てにゆくのであつたかゝる習慣は諸國到る所に多少宛存してゐたらしい。

然しながら吾人が所謂家族數制限はかゝる無慘なる殺人を曰ふのでない。吾人は近

世醫學の原理を應用して、所謂姙娠を避くるの法に出づるより他ないと思ふ。世人あるひは吾人を指して、プリナタル、マーダー奬勵者と曰ふであらふとも、吾人は人道のため敢て此問題を口にするのである。吾人は政府が公然かゝる方法を或制限の本に實行せしめて、殊に多數勞働者の無遠慮にして、餘りに自然なる家族の繁殖を制限せしめたら可からふと思ふ。若し文明とは人智を以て自然を制服し利用してゆくの上にありとすれば、人間繁殖の上にも此人智を適當に應用するが當然と思ふのである。

吾人は米國に於て、既に中等以上の家族に所謂制限法が内に多く行はれてゐて、家族數の減少が年々著るしくなつてくるのを見る。一八五〇年にありて、米國全體の平均家族數は一家五人五十五の割であつたが、一八六〇年には五人〇九とまで減じてゐる。即ち四十年間に十一割十七分の減少である。紐育市の如き、又シカゴ市の如きは、其最も著しき減少の度を示してゐる。唯だ西部諸州及モルモン宗の行はれつゝあるユダヤの如きは増加を示してゐる。これは社會生活の狀態から説明し得られると思ふ。

統計に從へば多數家族の現象は主に外國移民に多い。而して米國產れの母には出產數が少ないと曰ふのである。これは抑も如何なる理由に依りてゝあらふか。恐らく無智なる下層階級を、最も多く此移民が代表してゐるからでもあらふ。紐育市の伊太利町の如きに行つてみると、家族數の多いことは甚しいのである。彼等は自然のまゝに出產をするので、從ふて制限なぞ行はれてゐぬ。而して彼等はその小兒の歩み得るや否や、直に町に追ひやりて、新聞賣りをさせる。靴みがきをやらせる。紙屑ひろひをさせる。成さしめると云ふ工合ひで、更らに小兒保育の面倒はないのである。否なその面倒を成し得ぬのである。

かくの如くにして增加し來る人口は、一國若しくば一都市の生活上に如何なる影響を與ふるであらふか。彼等が政治上、道徳上、經濟上に及ぼし來る感化は非常な者である。罪人の多いのもこれよりである。無敎育者の多いのもこれよりである。無職勞働者の多數もこれよりである。而して、ありとあらゆる社會問題の源泉は皆な此の貧民が自然のまゝに產み出したる人口よりであると曰

はねばならぬ。吾人はこれを思ふて實に慄然として恐れざるを得ぬではないか。

然りと雖も、吾人は貧民の結婚を禁止する如き慘酷なる能はざる者である。彼等も吾人同胞である。吾人は何の權利を以てかゝる人道違反が行へるであろふ。されば、吾人の前に殘されたる唯一の方法は家族制限のそれである。吾人は此制限法を以て決して人道に反した者とは認めない。苟も吾人の義務が正當に自然理法を了解し、而して、それと調和してゆくが人間の目的であるならば、吾人は何處までも自然法を善用せねばならぬと思ふ。吾人は世の識者に向つて此制限法を以て人口問題解決の一つとして、又慈多社會問題の根本的解釋の一つとして、而して吾人人類が意識的自然制思者たる正當の義務として、此の放任されたる大問題を少しく考へて貰ひたいと思ふ。

買收されたる米國の大學及教會

何者よりも金錢が最も勢力ある米國に於て政治家、新聞記者、議員、學者等の買收されつゝあるは、何人も目前に見得る事實であつて、敢て怪しとなすに足らぬのである。

る、而も大學と教會とは名を教育道德に借りているだけ、それだけ人の眼をくらまし易いので、往々にして、此等の壯麗なる建築物にだまされるのである、何ぞ知らむや米國幾萬の大學と教會とは何れも皆な富豪に依りて買收されたる憐むべき奴隸である。

世の金滿家があり餘る金を利用せんとして、彼處の教會、此處の大學に寄附金を投ずるのは、一面立派であつて、その慈善心と利他心とは稱すべきである、又一面より見來れば醜の醜である、彼等は自己の金錢の寄附者たるとに依りて、總ての教會、總ての大學を自己階級の奴隸となし、機關となさんとしてゐるのである、而して大學と教會とは又甘じてその慾望に添ふを以て榮譽と考へてゐるらしい。

今日米國に於て、最もゑらき教育家とは、最も上手に寄附金を集める者を指して曰ふので、その人の人物の氣品の高下は必ずしも問ふ所でない、彼等は如何に富豪に泣きつくべきかを知ればよいのである、されば大學總長なぞと曰ふも、必竟うまくたちまわり、如才なく出入する的人物が一番成功するので、平生大胆を以て誇りとせるシ

カゴ大學のハーパースの如きも、嘗て教授ベミスをその學說のために免じたではないか、スタンフォード大學のロース教授事件の際の如きも、日頃自說を憚りなく發表し得るジョーダンは、自家大學の唯一の御最員たる、スタンフォード夫人の感情のために、學者と教育家にとりて最貴い學問の獨立、主義の抱持を容易になげ捨てたではないか、吾人は如何にジョーダンを辯護せんとしても、彼が一夫人の感情のために學者の精神を無い者にした點は許すことが出來ぬ、彼は何故自ら其地位と名譽を投げ出して、學問の獨立と嚴嚴とのために戰さなかつたであらふ。

ハーバアード大學なり、エール、コロンビヤ、プリンストンなり、何れも少數富豪の醫附金に依りて維持されてゐるのであるから、その教授たる者には、一人も自由にして大胆なる言論學說を發表し得る者がない、殊に社會問題、勞働問題に關しては、皆な口を結んで敢て曰はぬのである、偶ま曰ふ所あれば、徒らに不得要領の意見か、さなくば富豪辯護に全力をそゝぐの徒である、此點に於ては日本の帝國大學が政府の奴隷たると敢て譯塩所はあるまい。

過般ジアック、ロンドンがカリフォルニヤ大學で社會主義に就て講演して、米國の大學生は眠つてゐる、諸君は今や足下に推よせてゐる革命の浪に氣附かぬ、諸君は明日何事の起るべしとも知らずして、太平無事を歌つてゐると曰ふたが、これは當然のことである、買收されたる米國の大學は社會主義を敎ゆるにも公平な批評を下すとをせずして、社會主義を無視せんとするからである、ハーバード大學で社會主義、共産主義を講じてゐるカーバー教授は、其講義の第一回に於て既に自ら辯じて曰く「ミルが自ら社會主義者だと告白せしを以て、社會主義者は直にミルを以て彼等の徒と同一視してゐるのは大なる間違である、自分はミルの曰ひし意味に於ては社會主義者である、否な如何なる經濟學者も社會主義者であらねばならぬ、然れども自分は遂に社會主義者では御ざらぬ」と

予は思ふた、社會主義を學ぶべく集つて來た書生に向ふて、初より何の必要あつて自らの非社會主義を辯ずるのであるか、社會主義の何者たるをも知らぬ書生に向ふて已に一種の厭社會主義を吹きこむのは甚だ公平を失ふた者であると、曰ふこと勿れ、

彼等は買收敎授である、大學一般の信用は悉く富豪の寄附金に置かれてあらねばならぬ、物には總て表裏あり、米國大學の此裏面を能く見來れば實にあきれざるを得ない。

敎會もそれと同じ筆法で、悉く富豪の買收する所となり、勞働者は自然に遠ざけられて、牧師とは實に一種の對間である、彼等の買收されたる說敎に何の感化もないのは怪むに足るまい、人情は弱い者である、自分の世話になつた恩人に向つて及び向ることの出來ない如く、彼等の寄附者に向つては、唯々諾々唯命これ從ふの他ないのである、富豪はかくの如くにして、大學を買收し、敎會を買收し、新聞を買收し、而して何れも自家階級の辯護人となし、唯だあはれむべき勞働階級を助けなく見殘し去るのである。

然るに近時快心の一事は、ロックヘラーに依りて申しこまれたる寄附金を承諾するや否やの議論がアメリカンボード傳道會社に於て起つてゐる、グラッデン博士の如きはその反對者の一人で、ボストンアメリカン新聞の如きも頻りとその議論を助けてゐる、吾人は敎會買收の盛なる時に於てかくの如き議論のひき起されたのを喜ぶ者である。

る、如何に金錢萬能なればとて自家の主張を無にしてまでも黃金に頭をさげるの必要はあるまい。

日本のキリスト敎會は如何である、彼等は等しく政府者の意向に合せんことをこれつとめ、徒らに國家を笠にきて軍國主義に謳歌し、甚しきは一種の神政主義をすら主張せんとしてゐるではないか、吾人は今の所謂基督敎に對して終に輕蔑の念を起さゞるを得ぬ者である、嗚呼大學は買收さるべし、敎會も買收さるべし、學者も、新聞も買收さるべし、然れども世間一人たりとも黃金に依りて買收されぬ義人のある間は、吾人は遂に失望すべきでない吾人の主張は、他年一日、衆愚を排し廢然として世をなびかす時が來るのである、彼れ大學と、敎會と、政府者と、やがて如何せんとはするぞ。

ラッド博士の日本人觀

エール大學の哲學敎授として日本人の同情者として幾多の日本人の門弟を有して居

らるゝラッド博士の日本人に對する意見は今より七八年前日本漫遊より歸られた當時當地の一雜誌に載せられたのであるが、不幸にして餘り注意をひかれずに今日まで只少數者のわづかに知る所であつた。

予はラッド博士が日頃日本人の朋友として知られてゐたにも係はらず此の有益なる學者の日本人評が世間に知れずにゐたことを甚だしく悲む者である。

ラッド博士は先づ如何なる着眼點が最も能く日本人を理解し得るやと自問されて思へらく、唯だ一つの人種心理學の上より見ることそれのみと、即ち今日の新境遇に處して一種不思議な發達をなした日本人の心理的生活を歴史的に考へねばならぬといふ點である。

博士の研究法に三つある、一は日本人獨得の人種上の性質、二は過去幾百年間の歴史的境遇、三は最近西洋文明の浸潤に依りて作られたる感化、かう云ふ風に博士は日本人の人種的起原から、また其人種の特性を改めた歴史を見來り、なかには德川家康の様な一大天才を日本が所有してゐたことを認めて、深く日本の歴史的發達の順序を

說いた。

因て博士は概しての外人が驚きあきれた最近四十年間の日本の進歩、即ち鐵道の布設、學校の興起、郵便電信の設置、電氣の應用等を見て、日本をあらい驚くべき世界史上の一偉觀としてあきれてゐる者があるが、これは果して驚くべきである乎、ラッド博士は答へて曰く、

「然れども事實に於て日本の想界を流れてゐる一大潮流は依然變つた證を以て居らぬ人民一般を通じて潜むでゐる感情即ち自然に對し、帝室に對し、人生に對する所の見方態度は、幾數百年持ちくされて來た所謂「古き日本」に屬する所の同じそれである、此意味に於ては新日本も古き日本もあつたものでない」

心理學者たるラッド博士は斯くの如く大胆にそして明晰に、日本人の心的生活は外面の變化に依りて少しも變つてをらぬことを見た、勿論博士と雖も古來曰ふてゐる「國民は一日にして產れず」てふ諺を過去四十年の日本ほど上手に說明した者はないと認めて且つ思へらく、

「心理學上の着眼點から見ると、これら外形上の變化は偉大なりと言ふよりは寧ろ皮相と曰ふべきである、彼等は旅人の眼を驚かし迷はしめることがあるであらう、而も彼等外形の開化は國民の心理的生活の研究者にとりては殆ど何物をも説明する者でない」

西洋文明の皮相である所の物質的文明は續々として日本に輸入せられた、軍事であれ、應用物理學であれ醫學であれ、度量であれ、法律であれ、何れも不思議なる程の手腕を以て日本に應用された、で日本人の應用の才は世界一般の認むるまでになつた。然し皮相とは所詮皮のことである、內部に奥ふかく隱れてある者が却つて實相であるのだ、日本人の此實相は如何博士は曰く、

「所謂西洋文明の源泉が政治、宗教、社會、倫理の原則の上に起てゐる限りに於て、そうして人民の科學的なる性質が今日の應用科學の勝利を占むるに至つた理由である限りに於て、日本人はいまだ全く西洋文明を了解して居ない」

予はなは一歩を進めて博士が如何に日本人を解釋するかを語らねばならぬ。

ラッド博士は更に疑問を發せられた、さらば日本人の特質は何であらう、日本人の性質の最も特得な點は何物である乎外國から輸入した文明の薄き皮の下に流れてゐる血は如何なる者であらうかと、カントは人間社會の活動は智、情、意の發顯であると說いた、近世心理學は人間の性質を四種に分ち得ると說いてゐる、で一個人が此の四分法で說ける如く一人種の特色も此四種の一つ若しくは二三者に出でぬのである、博士は日本人の性質はロッツェが所謂「感情的性質」であると斷じた。博士曰く「感情的性質」は如何なる人種にも青年には一般であるが獨り日本人は何れの時代を撰ばず青年でも婦人でも男性でも又如何なる階級の人にでも普通一般の性質である……而して此は一面に於ては美術的天性の要素で、氣がきいて面白い美術的天才を產み出すことが出來る、

而も博士は言を進めて曰へらく、かくの如き天性は實際的に物を計策する政治とか勞働に於ける確實の永續とか、科學や哲學の細條目を仕上げる人としては全く不足せる人格である、此の感情的性質はありとあらゆる生活の上に多くの例證を殘してゐる

例へば日本人の自然に對する態度を見ると能く分るのである。

日本人は天上の月を見て先づ何と曰ふであらう『月見れば千々に物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど』と言ふのである、西洋人は之と全く反對で『月とは全體何である乎　月と地球との相關如何と』曰ふた樣なことを考へる、日本人は感ずる時、西洋人は手に取つて見る。

かくて神道と佛敎とは相携へて日本人の此性情を益々養成した、それで神道の要素たる祖先と自然の崇拜は起り、佛も同じく美なるもの、大なる者、悲しき者恐しき者に對する崇拜嘆美の特色を以てゐる、佛閣や神宮の設置せられてある所が多くは大山とか瀑布とか物凄い場所にある者此意義を說明してゐるのである、今日の敎育を受けて懷疑的傾向ある者でも、双見ヶ浦とか富士とかに對して思はず帽子をぬぐのを予は度々目擊した、

政治上に於ても日本人は驚くべきほど感情的である、博士は說明して曰く、「何よりも深く日本人の血脈に染みこんでゐる者は天皇に對する敬意と忠義心である此感情は

人民の心にきざまれて殆んど宗敎とならぬばかりに何の理屈もなく、疑問も起らぬまでに至つてゐる。

此の感情の性質と歷史とは推理されべき者でないと言ふ程に達してゐる……予が友人で政府の學校に敎へてゐる者が曰ふたことがある、若し敎場で生徒が命をきかぬ時は唯だ天皇の一語を發すれば忽ち靜まりかへるとのことである。

日本人はまだ明白に又根本的に「權利と義務」の念を有してゐない、英米の少年が極平易に了解してゐる政治上の權利義務は日本人にとりては解されてない、彼は生れながら盲從的義務と曰ふ者を以てゐるらしい、所謂愛國心とか忠君とかは一面から見れば感情的の表現である。

多くの日本人は英雄崇拜者であるとラッド博士は言ふてゐる、「彼等は英雄でもあつて治めねば甚だ治めにくい國民だ英雄の手にかゝれば至つて容易な人民だ彼は一英雄の感激的所說に唯々として動されゆく人民である、そして個人てふ者が一向に無い、彼等の弱點はその英雄の上にむくりわがることの出來ぬことだ、若し彼英雄が誤れば

彼等も同じことをやる、彼が仆るれば矢張仆れて了ふ」とは日本人を能く知つてゐる日本の一記者が博士に語つた所であるさうだ。

博士の觀察はまだ之に盡きぬのであるが要點は之に過ぎぬ、日本人は宜敎師輩の日ふ如く基督敎的でないために西洋文明を味へぬのでなく、頭腦が科學的でないために歸してゐるのである、極端の感情、感情のみの感情では所詮科學的時代に勝利を得ることは出來ぬ、藤村操の如きは憐むべき感情國民の犧牲である、僕は日本の敎育家が今少しく科學的敎育、科學的精神事實を貴ぶ所の敎育を勵まして貰ひたいと思ふ、ハックスレーの所謂自然と調和するを以て敎育の終局目的として貰ひたいと思ふ（完）

學者と社會主義

世に社會主義を以て、勞働者の專有物の如く見做し、而して學者はこれと遠かるを以て、正當なるが如く考ふる者あるは、これ甚しき謬見と曰はざるべからず社會主義は決して勞働者のみの注意を値する現象にあらざる也、所謂吾國の學者なる者は、多くは本生世上の活問題に不注意にして而も自ら得意然たるに至りては、吾人は其迂と怯とに驚かざるを得ず。

今日歐米にありて、所謂學者なる者が如何に熱心なる社會主義研究者であるかを知らば、吾國の學者は正に自らはぢて死すべき也、吾人は堂々たる帝國大學の歷史敎授にして、社會主義の歷史的研究だもとげざる者あるを聞けり、而して專門學校、慶應義塾等の經濟學敎授にして社會主義に對して何等の組織的智識を有せざる者、甚だ多きを耳にせり、此事若し果して眞なりとせば、吾人は實に日本の學者及學術界の如何にも眞理に不忠實にして、唯だ彼等はパンを得るためにのみ、學問を業とせるを悲しまずむばあらざる也。

英國『當代の最も明晰なる頭腦』と稱せらるゝシドニー、ウエツブ氏は嘗て曰へらく「今日に於て社會主義の何者たるかを知らざる者は、取りもなほさず、智識的怠慢を表白する者也」と吾人は此言の吾が日本に最も適應せらるべきを信せんとする者也。

試みに日本の學者が社會主義に對する態度を見られよ、彼等の多くは至つて沈默を

守り、何等の意見だも發表せざる也偶ま發表する者あれば、極めて淺薄にしてプリタニカ位をオソリティとせる譯にあらずや、吾人は敢て彼等の胸中にたちいりて其心理を解剖せんとはせざるべし然れども其の餘りに眞理に冷淡にして、時代の問題に迂なるを責めざらんと欲するも得ず。

殊に經濟學を講ずるの學者にして、此題目に一片の注意だも拂はざるは、抑も何等の痴態ぞ、歐米にありて今日著はさるゝ經濟學書にして、社會主義に注意を拂はざるは殆どまれなり、否な今日最新なる經濟學者は、多くは彼等自ら社會主義家也。

英國舊派の先驅たりしミルですらも、其自傳に於て、自分等夫妻は一般社會主義者と稱せらるゝを甘ずる者なりと、自白せしにあらずや、又英國現今第一流の經濟家として信用せらるゝ、マーシャルは其「經濟學原理」に於て、近世經濟の一進化は、實に社會主義者の感化に歸せざるべからずと認容せしを見ずや。

唯だにミル、マーシャル兩氏に止まらざる也、英國に於てブリタニカに社會主義史を書きしガーカップなり、「八時間勞働」問題の著者として有名なる、レー氏なり、「資

本制度の進化」、「社會問題」の著者ダョン、ホブソン、氏の如き、「トレードユ、ニオニズム史」著者たるウエッブ氏夫妻の如き、ケムブリッヂ大學教授たりしシヂウイック氏の如き、又哲學者としてグラスゴウ大學教授として知られたるケヤードの如きは、何れも熱心なる社會主義者若しくは研究者にてある也。

米國にありても、故ツオーカーの如きジョーヂの如き、今のアダムスの如き、パーソンスの如き、イリーの如き、セリグマンの如き、クラークの如き、何れも熱心なる社會主義研究者にあらずとせんや、獨乙にありては所謂講壇社會主義者の代表者シュモーレルを初めとして、ションベルグ。ヒルデブランド。ブレンター等の如き、又「社會主義神髓」を著して、世人をして彼は社會主義者にあらずやとまで思はしめたる、ヲーストリアの大藏大臣たりしシャフレー博士の如きもあるにあらずや。

その他佛國にありてはレロイ、ボーリユー兄弟の如き、ウルバン、ゴイエの如き、ヂッドの如きヂャンヤの如き、伊太利に於けるロリヤの如き、過般死去せるローム大學教授たりし社會主義學者ラブリヲラの如き、又は犯罪學者として有名なるロムブロ

ゾ及其令嬢の如き、共に甚だ熱心なる社會主義運動家にてありと知らずや、かくの如く數へ來れば、なほ天文學者として、または地質學者として、詩人として、殆と屈指に暇あらざる也。

彼等は或は自身の專門として、研究せるものあらむ、或は自個の專門以外、人生問題、人道問題として、研　せるもあるべし、而も等しく眞理のため、自らその代辯者となり、若しくば説明者となり將た又攻撃家となりし也、吾人は其の何れの者たるを問はず、彼等の熱心にして而も忠實なる研究心を尊敬せずんばあらず。

然るに吾國に於て、かの所謂經濟學者にして能く社會主義を、忠實に、公平に研究したる者幾人ありや、或は隱れて研究せる者あらむ、吾人は不幸にしてそれらを聞かざりし也、吾人の知れる限りに於て指摘すれば、わづかに先づ法科大學の一教授とゾムバートを譯したる一法學士と、國家社會主義を主張せる一博士と一學士ありしのみ而も彼等や、常に沈默勝ちにして、いまだ目醒しき著述若しくば行動ありしを聞かず。平生篤學にして好んで經濟學を論ずる田口卯吉氏は今何處にありや、早稻田の經濟

先生として、經濟新報の紙上、時に預言をなし賜ふ老博士天野氏は今何處にありや、吾人は當今第一流の雜誌を以て誇りつゝある雜誌「太陽」の所謂特別寄書家たる學者先生より、社會主義に關する論文ありしとをいまだ嘗て知らざる也。

吾人は最後に一言し置くべし、如何に學者は沈默を守りても、如何に資本家は壓迫を試みても、人間の精神にしみ渡りて、今や正に世界を覆はむとする此の大思潮は、遂に覆ひかくすこと能はざる也彼等は却りて自らの時代をくれを悔ひざるべからざるの時に近づかんとしつゝあり、彼等は憐むべくも此の潮に洗ひ去らるべき運命に近よりつゝある也、日本の學者諸君、予はウェッブ氏と共に繰りかへして曰ふ、今日に於て社會主義の何者たるかを知らざるは取りもなほさず、自らの智識的怠慢を表白する者也と。

紐育の新聞について

昨日はじめて公然發表された當市ウォールド新聞社長パリッツアー君の寄附と創意

とに依つて新たにコロムビヤ大學校の一部として設立さるべき新聞記者大學は實に近時になき快絶なニユースである、パリツツアー君は自ら新聞記者として多年の經驗から此必要を感じて遂に獨力二百万弗を投じて新聞學部を設けやうとしたのである。

抑も同君が此擧あるは實に多年の宿志で決して突然の思ひつきではない、で愈よ財政の準備の出來るまで待ち今春はじめてハーバード大學長エリオツト君に相談し、はては今回の發表となつたのである、從來新聞學術なる者は獨乙にはツウリツヒをはじめとして米國にはペンシルベニヤ、ミンチソタ、オブラスカ、ノートルダムの諸大學には何れも形ばかりの者が存在してゐた。

然し多くは政法學部と混同してゐて而もエール、ハーバード大學の如きは一學年に一回若しくは二回新聞社會の名士を招じて新聞經營上の講話をなすに過ぎぬので決して新聞學部なぞと稱し得る者ではない。

パリツツアー君の計畫は最初から堂々として既に八名の相談委員を擇び校堂の如きも五十万弗を費して建築する豫定でそれも已に建築會學に依賴して多分來秋の學年は

じめまでには開校の運に至る事であらう。

一体新聞記者と謂ふ者は法律家や醫師や牧師や機械工の如く一定の學科を修めて出來る者であるかてふ批評が當地の新聞界に現はれた殊にポーストの如きは今夕の社說に於て唯だ一ツのパリツツアー君の名をかくことなく冷評がましき口調で例の保守的論鉢を示してゐる、而も暗々裡に黄色新聞で成功して二十年間も社會を害毒した結果の金で申し譯的の學校を設立したとて何もなるまいと言ふ意を諷評してゐる。

併しながらこれはジヨーナル新聞が一言も此の新聞大學設立發表に付て記さなかつたと同じく同業的僻見と疾視との結果である、一番公平に評論したのはタイタス新聞とコムマーシヤル、アドバタイザーである、日本にもポーストの樣な保守的考を以てゐる人が少なくない「新聞記者は生れる者で作られる者でない」なぞと愚にもつかぬことを言ふてゐる人がある。

松本君引君がシユマンやリユースの書をやきなほして「新聞學」を作つた時。例の名家先生達が書かれた序文もその樣な思想であつた。新聞記者は勿論機械製品の如く同

形に作れる者でない、又一冊の「新聞學」を讀でなれる者でもない、而も今日總ての職業にトレーニングを要する如く記者も近世の教育主義に依て準備されねばならぬ。

新聞大學は商業大學のやうな者である、商業大學を卒業すれば必ずしも大商人になれる者でないが當今の商海にいりて兎もかく役にたちつゝある者は彼等である、モーガンでもカーネエギーでも矢張り言ふてゐる、米國の銀行や會社の長ともなつてゐる者には大學的トレイニングを受けた人は少ないが實際仕事をしてゐる長以下の人々は何れも大學出身者である、大學教育は一般普通の才能の人には是非共受けねばならぬ要件であると。

新聞記者が新聞大學から學ぶ所は新聞通信や探訪や雜報の書き方や廣告の取り様ではなくて、新聞記者となる第一の要素たる頭腦である、眼である、社會の出來事を總体から見て明晰にさうして順序正しくこの連續せる意味を事々物々の間に見出す所の觀察なのである。

今の新聞を書いてゐる人々は多くは偶然此の職業に落ちてきた者かさもなくば流れ

こんだ者で彼等は招かれた者ではない、殊に吾國の新聞記者は腰かけ者のみ多く眞にその職を愛してやつてゐる人は少ないやうである、吾人は嘗てロンドン、タイムス記者たりしウヲドナルド君の自傳をみて如何に　が自己の職を愛し樂しむだかを知つた時タイムスの聲價の今日ある遠き原因を見出すことが出來た。

米國「評論の評論」主筆アーバート、ショウ君は一二ヶ月前のコスモポリタン雜誌に新聞記者の職業を論じて矢張り新聞記者も他の職業と等しく一つのピヂネスである。「書き編輯するピヂネス」である、已に道樂でない職業であるならば適當な修養を經べき者として、先づカレーヂ教育と大學的修養との必要を說いた。

政治を以て政治のみを語る新聞記者の多い今日、新聞大學の設立は確に新聞を改善する原因となることゝ思ふ、經濟を語り得る記者は宗教を少しも解せず、科學を語り得る人は社會や文學を語ることの出來ぬ樣では新聞は讀まれぬのである、吾人は遠からず早稻田大學や帝國大學に新聞科の設置される日のあることを希望する者である。

紐育の新聞で一番目立つて見えるのは例の黃色新聞として名ある「ウオールド」と

「ジョーナル」であらう、近時「ジョーナル」が頻りと賣れ出したのは全く主幹ハースト君の憤げもなく金を掃ふて良記者と良事務員とを集めたからである、世の近眼者流は此傾向を見てハースト君はえらい人ぢや新聞界のナポレオンだなぞと吹聽してゐるがこれは少しく事實を能く見わけぬ人の批評である。

抑も紐育の黄色新聞なる者がはじめて新聞歴史に書きそめられたのは誰れに依つてである乎、言ふまでもない現時のウオールド社長パリッツアー君である、彼がハンガリー國から十七歳の少年で、無一文で一字の英語も知らないで、はじめて米國にわたつた時は紐育市は所謂黄色新聞を有してゐなかつた。

當時彼は非常な苦心を經てゐるひは軍人となり火夫となり船頭となり、丁稚番頭となり、ありとあらゆる社會をくゞりて遂には新聞探訪記者となでこぎつけた、彼が一片の學校教育を受くることなく猶太人の一子として今日の成効を奏したのは實に何人も驚くところである、彼の歴史はフアイターの歴史である忍耐の歴史である、ハードウオークの歴史であつた。

今は退隠せる新聞記者で先きにはポースト新聞主筆として何人も知らぬことなき猶太人カール、シユーツ君は實にパリッツアー君をはじめて認識した人で、シユーツ君が地方の一個字新聞をやつてゐた時彼は探訪記者であつた、此時分の彼は非常なる急進主義で「わかき米國の社會主義者」として知られたのであつた。

間もなく聖ルイ市に「郵便報知」と曰ふ小新聞を起したのをはじめとして、勞働者の相手として不義不正の打撃家としてその精神をどこまでも應用したものであるから、幾千もたゝぬ間に勞働者や貧乏人や弱い者に同情を得て非常な成功を見るに至つた、彼が紐育に「ウオールド新聞」を買つた時も此流義を應用したので四五年も經ぬうちに數万の收入を得るほどになつたのである。

今日の彼は實にミリオチヤーの一人でその生活は四十年前の彼が夢にもみることの出來ぬ位である。僕の知人で彼を知つてゐる者の話に依るとパリッツアー君は恐るべき記憶力を有してゐて、何事を見るも必ずその原因、由來、現狀、將來までをすつかり知りぬかねば承知せぬと云ふ氣性であるさうだ、丁度警察探偵の様な眼で世と人と

をみるのである、此一點を以てしても彼は新聞記者として有力なる一人である。

ウォールド新聞の成功は彼の此性情の權化である、人は黄色新聞とけなし去るが黄色新聞が新聞發達に與へた敎訓を考へてみねばならぬ、黄色新聞が新聞歷史に寄與した者は二つある、一は世をありのまゝに書くてふこと、二は新聞を一人の說や一政黨の機關として用ひられた舊風を脫して全く一個のビヂネスとしてマネーヂするに至つたことである。

元來「說を持てる人の新聞」時代は過ぎ去つた過去のことである、今日は「新聞インダストリー」の時代である、過去に於ては少しく說を異にした者があると新聞を起すと云ふ風で彼も新聞吾も新聞と實に新聞は「新聞紙」でなくて「說聞紙」の姿であつた、見なさい、日本の十四五年前は盛に「說聞紙」の行はれた時代で板垣君でも中江君でも西園寺君でも島田三郎君でも皆なこの潮流にのつてあらはれた說聞記者であつたのだ。

現時に於てもまだ此「說聞紙」は日本に澤山ある「說聞記者」も澤山ある、彼の二十七

八年戰爭は日本新聞界に一大旗幟を與へたそれは新聞は書く者ではない讀る者である說を連載する者のみではない、事實を陳列する者ぢやと云ふことがわかつた、それから大新聞と自稱した連中も所謂小新聞と呼びなされた當時の吾が「萬朝報」等を眞似て三面記事を載せることになつた。

新聞は道德ではない、宗敎でもない、敎育でもない、新聞は新聞である、紐育タイムスの所謂「總ての新聞は印刷するに足る」と標榜せねばならぬのだ、ある人は新聞を評して料理屋の目錄の樣なものぢやと曰ふたがこれは至極うまい評だ、喰ふ喰はぬは御客樣のことで記者はあづかり知らぬでよい面も事實は悉くかゝねばならぬのである。

然るに世には新聞を一家の食膳の樣に考へて一主人の好みのみをそろへては得意がつて大新聞とか國民の輿論を代表するとか吹聽してゐる迂者がある、これでは新聞記者とは云へぬ、矢張り僕の所謂「說聞記者」なのである。

數日前であつた、ジョナル新聞の讀者が同新聞に宛てゝ何故御前の新聞は社說では

立派な倫理的說敎をしてゐながら、他の場所へは汚れた近時流行の馬や何かのばくちの記事を載せるかと尋問した、それから記者はわざ〳〵社說を以て答へて曰く吾等の新聞は一個の新聞である、凡そ事實として社會に起り來る所は何事でも先づ報道せねばならぬ、それに感服すると感服せないとに論なく、好くとすかぬとに關係なく。

然し吾人は社說に於てその新聞を說明するの義務を以てゐる、即ち此事實と此社會と如何なる意味に於てある乎、此人と彼出來事と如何にして成立つてゐる乎等を說明する、これ吾人に社說を有してゐる所以でまた無くてはならぬ理由である。

「社說的解釋」てふことは日本人の新聞には充分に了解されてゐぬと云ふ、吾が國の新聞の社說をみると註釋的と曰ふよりは論議的である、でその日のニュースに一向關係のない議論が多い、さうして政治と經濟の他何者も見出し得ないのである「時事新報」は此點に於て一番發達してゐる吾人は日本の社說で先づ嚴める社說は時事のだと思ふ、唯だ文章の句切りのない德川時代的の筆法は少しく閉口である、これを改良するならば時事は文字の平易の點から曰ふも、ニュースを集める點から曰ふも、社說のか

き方から曰ふも讀める新聞と曰ふを吾人はためらはぬ。

由來社說と曰ふ者は日本とか佛國とか曰ふ議論ずきの國民には培養されてゆくが米國の樣に議論ぎらひの人民間では甚だ成功しにくいのである、であるからヘラルドの如き警眼な新聞は殆ど社說をかゝぬ、かくも重きを置かぬ、勿論これはヘラルドの讀者が多くは富家の細君で曰はゞ奉公人探しの廣告新聞とでも曰ふのが適當なのだ。

可笑しなことには此の廣告專門新聞を引用し來つて「ヘラルド曰く」なぞと滿州問題の批評を通信としてのせてゐる大坂の一新聞があつた、社說で聽くべき議論をする當地新聞はポーストとタイムスとコンセーシャル、ブレテインとサンとアドバータイザーとイーグルとツリビューンとさうして黃色新聞のジヨーナルである。

なかでタイムスは實に有力な議論をして且つ種類に富んでゐる、ポーストは餘りに學者的で少しダアルの弊があるが如何にも堂々乎としてゐる、ジヨーナルに至りては實に一特色を以て最も多く讀まるゝ社說であるさうだ、近時成功した「社說」は實にジヨーナルのそれである。

先づ英語の點から曰ふと單簡で、コンマトとヒイオッドを用ひて書いて居る英語だ、此の英語が實に有力な文章である、誰にでも分り易く而も力つよく、さうして警句に富むで居る、此記者はプリスベエイン君と云ふて宵てはウオールド新聞に居たのをハースト君が金で橫取したのである。

題目は夕刊は重に倫理的の者で朝刊は時事を題として居る、而もその裏面を通して居る精神は、社會主義的精神で曰はゞ「人道の福音」である、日々起り來る出來事の裏に必ず倫理的意味を見出しては說明してゆく點はジヨーナル獨歩の舞臺であるのだ。

日本の如き議論すきの國民の間に起つて「社說」で成効せぬ筈はないと思ふ、何時までも「漢文くづし」の文體を用ひないで文章の點からも人を引つける樣にしてジヨーナル流の書き方をしたなら社會は靡然としてこれに從ふのだ、社說は一ツときまつた者ときめ一段半より必ず長からず短からずときめないで現に紙數のある時事の如きは少くとも一ページを社會的性質の記事にあてたなら隨分腕がふるへるではあるまい乎。

三宅雄次郎君が紐育に來られた時談話の序に米國の「評論の評論」と英國のステッド

のそれとに關して話した所が同君は英國の方が上手であると曰はれた、僕はステッド自身が既に「世界の米國化」と曰ふ自著に自分の雜誌は元祖であるが米國のにかなはぬと曰ふてゐることから種々主張したが三宅君はステッドには預言がある、ジヨウヂはそれがないのみか唯だ事實の臚列であると否定された。

然し此一事例が能く日本の新聞と社說を語つて居る、預言がある、獨斷がある、而も公平な事實をならべてない、三宅君は今の科學的時代に預言てふ者が無くなりつゝあつて、さうして解釋なる者が代つて起つたことを忘れておらるゝと思ふ、今日の時代は預言者の時代で御ざらぬ、解釋者の時代である、事實を意味ある樣に並べてみせねばならぬ、自分の推斷的所說に似よつた事實のみを集め來つて社會はこれぞと曰ふは預言者流儀である。

ステッド君の「世界の米國化」「歐洲に於ける合衆國」を取り、ジヨウ君の「歐洲に於ける市政」「大英國に於ける市政」と比較して見ると三宅君の仰の通り前者は預言者的であるが悲しいことには誤りの預言が澤山ある、科學的頭腦でない彼は到る處こぢつ

けをしてゐる、後者に到つては實に堂々として近世主義の精神に依つてインターブレーションの風である。事實の上に起つて而も「法則」を説いてゐる。

僕の考では新聞もこれでなくばいけぬ、事實を忠實に報ずると同時に、預言でない解釋をせねばならぬ、預言流儀は說開流儀だ、新聞流儀ではないのである、餘り横道にはいつて了つて、ハースト君の批評をする時間がなくなつた、又折をみて紐育の新聞全体に付て他日語る時一緒に僕の觀察をしるすことにしやう、僕が此前に書いたりンチング問題は目下愈よ激しく大統領ルーズベルト君は遂にインデイヤナの知事に書を送りてリンチングは無政府說の權化みたやうな者と曰ふに到つた、今日の紐育タイムスは黒人問題の光明と題して統計上黒人の增殖の比較的少ないのを以て聊か此問題の解決をかろくする者と論じた。

一言にして曰へば黒人問題は、黒人の側からは無政府的行爲の問題である、知らず米國は如何にして解決を遂ぐべき乎、僕はくりかへして曰ふ唯だ敎育あるのみと。(完)

日本人の英文

先般帝國大學英文科に齋藤秀三郎氏を敎師として採用したことを聞いたが大學の從來のやり方としては實に出色である、吾人は齋藤氏の英語及英文學に關する學殖の如何を充分に批評し得るの材料を持たぬが、氏がなされたる一二の著述に依りてみればそこらにありふれたる博士やドクトル、オブ、フヒロソフヒーよりも勝つてゐることを認めることが出來る、而して帝國大學が博士號や博士號にのみ目をつけて、實力と曰ふ點に注意を怠れるが如きは從來の一大欠點であつた、今や此の惡習慣が坪井博士を學長とせる時代に於て破られ得たのは吾人の意を得た者である。

北米の大學で敎授たる者には、カレーヂ卒業以後の學位を持たぬ人が澤山ある、そうして尋常の博士が却りてその人の助手として働いてゐる例がコロンビヤにもハーバートにもその他の大學にも現に見らるゝのである。社會學者として世界に知られたるギッヂンダス氏の如きはマスターの學位の他持たぬのであるが彼はコロンビヤ大學の

重要なる一人である、吾人は帝國大學が此の飛躍を初めとして、今後多く民間の學者や新聞記者や文學者や財政家にその特別な方面に於ける講演を依頼する樣な習慣を取ることをすゝめたい。

かゝる講演は唯に學問界のデモクラシーと云ふ上からのみでなく、大學の學生をして實世間と近づかしめ、如何にその學ぶ所を現社會に應用すべきかを知らしむる最良法である、今日の大學生は餘りに現社會と遠ざかりて學校を出るや茫々爲としてその行く所を知らない、如何にして活社會と戰ふべきやを知らぬからして、直ぐ先輩の下に泣きつくか、左なくば富家の新郎たらんとするのである、ある米國の教育家が歐洲の大學生と北米の大學生とを比較して、後者は前者よりも實際的で夏期休業の如きは大底社會にもぐりこみて生存競爭をやつてゐるので四年の學業が終へて正に社會に身を處せんとする時も決してまごつくことをせぬ、彼等は如何にして社會にいるべきやを充分實驗してゐるからであると論じたのも、同じ精神よりである。

文典學者たる齋藤氏の如きが英文學研究の大學に何の要があると曰ふ非難もあるらしい、而してこれを辯護して端書一つも一人前にかけぬ今の大學生が英文學が如何うして分るものかとは万朝の山縣悟郎君の批評であるが然しこれは少々極端の言ではあるまいか、勿論通常の端書すらも書けぬ大學生の多いのは、吾人も現に知つてゐるがそれは齋藤氏を講師とした點をディスティフヘイし得る證ではあるまい。

抑も英語の端書位をかくことは、これを大學で學ぶ者ではなく、寧ろ中學でやるが至當である、而して若し此點を非難するならば、予は中學校に於ける英語科教育を非難すべきであらうと思ふ、吾人を以てみれば日本の大學生は文典の研究の不足よりして端書一本正則にかけぬと曰ふよりは、寧ろ彼等はその中學時代に於て文典研究の餘りに過重なりし爲であると曰ふをはばからぬ、概して日本の英學者は文典學者である所謂レトリシャンである、而も下手な文章家である、手紙一つ西洋人に理解出來るやうには書けぬ。

此一例としてあげるなら、日本人の手になれるある英字新聞の文章をある人が米國で米人に示した所、彼は評して曰ふたそうだ、この文章は文典には少しも誤りがあり

ませぬが、英語國民にはかやうな英語は分りませぬ、又私共はかやうには書きませぬと、その理由は何故であるか、答ふるまでもない、日本の英學生は余りに文典狂であるからである、文典を知らねば英語學者でない如く敎ゆるからである。

金牀英語なる者は紐育の文典學者ホワイト氏も其の著「英語の文字及その用法」に說いてゐる如く、文典で學び得らるゝ言語でない、英語位非文典的言語は世界に少ないであらうと曰ふてゐる、所謂「英語國民が書くやうな英語」は文典によりて學ぶよりも寧ろ現時の英語英文を實習するの勝れるに如かずである、されば吾人は今日の大學生に向ふのその欠點を補ふ策としては、唯だ成るべく文典を去れよ、汝の文典書をやきすてよとすゝめたいのである。

昔し漢學先生が學むだ漢學も矢張り文典漢學で、時文の研究に重きを置かなかつた彼等は支那音を學ばずして漢學をやつてゐた、これは僕の所謂文典漢學であるから彼等の漢學は益々實用と離れて、何の實用をもなさなかつたではないか、今の英語學者も等しく此弊に落ちている、いまだ實用英語も出來ぬうちから十八世紀や二十世紀英

語を學むでゐる。

日本の有數な英學者と曰はるゝ人で、今時十七八世紀英語を書いて予は英學者で御座いと得意がつてゐる人もあるやうである、昔はハンガリーの偉人コッスートが其牢獄にある沙翁を頻りと勉強し、後北米に來りて到所英語の演說せしが、聽者は何れも彼の美麗なる英語に感服したが、能くその意を了解した者は至つて少なかつたと曰ふことである、所謂日本の英學大家にして若し北米に來り、同じことをなしたとすれば北米人は何と批評するであらふ。

帝國大學に於て齋藤氏の如き文典學者を要する所以はかゝる消極的理由でない、端書の書き方に必要な文典を敎へよと曰ふのではない、即ち英語の組立の發達史を研究するは大學的研究の好題目であるまいか、當地ハーバード大學に於ても大學院研究として今學年に設けられあるうち、ロビンソン敎授の「英文法の歷史的研究」ブリッグス敎授の「英詩の作法及理論」、ヒル敎授の「英作文」等の科目がある、此等は何れもカレージ部ではなく、博士の學位要求者のみに課せられたる科目である、吾人は日本の大

學生が文科大學に文學研究の必要を見ずと、曰ふ所の言であるかを知りたいと思ふのである。

社會主義日曜學校

社會主義日曜學校とは、その名の示す如く、小兒や青年を集めて社會主義の福音を說き聞かすのである、ボストン書籍館の端で電車を降りて、二十歩もひきかへすと、大きなハンチングトン館と曰ふ建物がある、社會主義日曜學校は此館の四階目の音樂堂の一室を又借して、日曜日だけ集ることにしてゐるのである。

予が戸を排して入つた時は、既に集會の開かれんとしてゐる時で、年若き婦人が四人、男が四人、十二三を頭の生徒が男女合せて十三人ばかりゐた、予は唯だ主任者らしき人に參觀に來た由を告げて座に着いた、先生は先づチカゴ市のカアル會社出版の社會主義唱歌集を予に一部渡した後、開會の順序として、會衆に歌を唱ふべく命じた、ピヤノの音と共に可愛らしき少年男女の聲はあがつた、歌の題は「勞働者の歌」と曰ふので、歌會で聞く厭味ある讃美歌の如きものとは少しく異つて、實に人間の歌である、ヒユマニテイの聲である、「闇には默し、勞苦に耐へて」の節に歌ひ及んだ時、予の心は苦だしく動かされた、嗚呼此れら無邪氣の少年男女は、此の微妙なる音樂の間に早くも人道の聲を聞き始むるのである、將來彼等の中より幾多のリーブクネヒト、ブルーノ、シモンが出て來るであらふと思へば、予は實に感謝に耐へない。

歌が了ると先生は話をはじめた、それは「談話」と曰ふとに付て分り易く話をせられた、大意を曰はふなら、談話と曰ふとは自分の思ふとを曰ひあらはすので人間の進歩にこれほど貴い者はない、と曰ふとから、終には私どもは自分の思ふ事を悉く曰ひ現はし得るやと尋ね、あるひは社會主義の殉死者の生涯をあげ、あるひは露國の例をあげ、あるひは社會主義の殉死者の生涯をつまみ來りて、如何に多くの人民が自分の思ふとを言ひ現はさうとして苦み、又は殉死したかをのべ、轉じて人間の自由を事實の上に說きあかした、それから生徒の諳誦あり、感話ありて、又唱歌を以て終りを告げた。

予は終始生徒の心理的活動に注意してゐたが、不思議にも、多くの日曜學校に見る

如く形式的の弊がなくて、彼等の神經は自ら働いてゐるらしいのであつた、一人の女の先生が「同情とは何ですか」と質問したら、多くの生徒は一樣に手をあげて答へ得る由を示すと、先生は其中の一人に指命した、すると生徒は起立して、同情とは他人を氣附けるとの事ですと答へた、何故私共は他人を氣附けるのですかと再問されて、それは私どもより困難してゐるからですと生徒は返へした、予は是等の談話の間に生徒の心理を見ることが出來たのである。

集會が終るや、余は露國の婦人カニコウ夫人に紹介された、余は夫人に曰ふた「私ども同胞は東洋で御互に昨今殺し合ふてゐるのに、私と君とはかうして握手してゐるのですね、人間と曰ふ者は思想次第で敵ともなり味方ともなるかと思へば誠に不思議な者ですね」カニコウ夫人は醫師カニコウ氏の細君で、氏の家はボストン婦人社會主義者の集會所になつてゐる位で、非常な熱心家である。

日曜學校の校長は電氣技師で、自身の語らるゝ所に依れば、氏の社會主義は全く唯物論の根底より出で、今の宗教や精神的人生觀は無視してゐるとのよだ、氏は傍なる

一人を指して「彼の人は私と連つて全く精神宗教に深き興味を以ておらるゝが、矢張同主義者です、何と妙な交際ではありませぬか」と、なほ氏は語をつぎて此學校は婦人社會主義倶樂部の附屬で、重に寄附金に依りて維持してゐる由を話された、予等が室を出た時、雪は益々重く降りつゝあつた。

「平民政治」の著者を聞く

昨夜は紐育の、ターパーユニヲン協會とでも曰はるべき、ボストン市のロウエル協會つまり一般人民の智識を開拓すべき目的で設けられたもので「平民政治」の著者として、英國議會の花の一つとして知られたる、ゼームスブライスの講演があつたので、一人の學友と打ち連れて出掛けた。

講演の題目は「過去五十年間に於ける思想感情の變化」と曰ふ頗る面白い、日頃現代史研究に興味を以た予の如きにとりては、此上もない好題目であつたのだブライス氏の講演は、予は前週ハーバード大學で一度聞いたので、彼のやせぎすの眼の深くくぼ

みて、眉毛の長い、つゝめて曰はゞ一見學者風の風采に接するのは、これで二回目である、プライス氏の聲は寧ろ明晰で、余りおそくない口調で、何れも目立つほど英國風のアクセントのある方で、予等紐育人には少しく耳ざわりがする。

昨夕集つた聽衆は、白髪の老人か若しくは婦人で、所謂一般市民のそれであつた、プライス氏は劈頭かやうな題目の頗る困難なことを說き、自分が果してその人であるやなしやは知らぬが、唯だ過去五十年間、自分が最も能く知つてゐる英國で觀察し、見聞し、接近した事實より語らふと曰ふ、極く謙遜な態度ではじめられた。

聽衆の種類を能く見ぬいてゐるプライス氏は、例を頗る卑近な婦人の名りまきや帽子に取り、五十年前はかゝる者が流行してゐたのに五十年後の今日は夢にも見ることが出來ぬと曰ふ樣な、至極解り易い事實に取りて「變化」と曰ふ者を具體的に說明した。

それから、彼は暫をつぎて婦人の地位の變化、政治的地位、快樂としての種類などが驚くべきほど變化したことをのべ、更に今日の學校敎育に於て、所謂體育的遊戲の發達して寧ろ肝要な學課より重せらるゝことを說いて曰く「今日私はハーバード對ペ

ンシルベニヤ大學のフートボールを見ました、私は實に驚かざるを得ない、私はかゝる遊戲は英國に於て盛であると思ひしに、米國は更に一層盛である、諸君乞ふ一考せよ、何故かゝる遊戲が盛であるか、何故學校の先生は彼の生徒の學問を監督するよりも、却つてゲームの周旋に熱中しつゝあるかと、思ふに諸君は今の時代に於て余りに多くの甘い者を喰い、體力が健全で、畢竟遊戲的競爭でもせねば余りに無聊に苦まるのであらふ、さらずば諸君の信仰が所謂「此世を樂め」との說法に聞きほれてゐるからであらふ」と。

聽衆は此のするどき針にさゝれたと見へて、ぽつりぽつりと出ていつた者もある、米人は恐ろしく狹くて自分を惡口されると直ぐ出てゆくのである、プライス氏は進んでなほ重大な變化を觀察した「予は更に著しき變化を見た、それは實に實業風である、今日の英國に於て、到る所の紳士に依りて語らるゝ所の者は、五十年前に於けるが如く、文學や美術や宗敎や哲學や人生問題ではなくて、實に實業(ビシヂツス)である、今や實業は猫もしやくしも語る、實業を曰はねば紳士でないかの如く見ゆる、諸君彼

の獨乙を御らんなさい、五十年前に於ては獨乙は歐洲の學術思想の源泉であつた、當時にありては獨乙人は多くは空想的哲學的で、好むでむづかしいことを曰ひ文藝を喋々し、美術をはぐゝしたのであつた、然るに五十年後の今日は如何であるか、彼は等しく此の實業風に吹かれて、今や事實を語り、實際、實際と曰ひ、所謂ビヂネスを愛し、帝國主義を語り、戰爭を夢みてゐる」

「然しながら諸君、予は此變化に向つて、何等の批評を下し得るの權力を持てゐぬ、否なそは予の職分ではあらぬ、予は唯だ事實上の變化を語れば足りるのである」と曰ふて批評的態度はとられなかつたが、語はその語るの際、時々するどき針を示しては、彼が感慨の火の手を見せた、勿論此講談は前後三回の講義で、昨夜のは僅にその發端に過ぎぬのである、彼は必ず普通歷史家の態度をはなれて、文明史家の態度を取るに相違ないと思ふ。

予は此講演に接して深く思はざるを得ぬ、現代思潮の潮流が歐洲に於て、英國に於て、殊に此米國に於て益々物質的に流れて、人間の修養（カルチユア）と曰ふことが重せられず、人は唯だ喰ひ飮みて而して死にゆく動物であるならば、吾人が文明の理想は詮りに單純ではあるまいかと予は一面に於てホイエルバッハの所謂「人は喰ふ所の者それのみ」との說に一致する者であるが、「人は喰ふ所の者にあらず」も認識せざるを得ぬ者である。

今や日本に於ても等しく此の實業風は吹きすさんでゐる、勿論カライルもその「過去及現在」に於て絕叫した如く、拜金宗（マモニズム）は貴族宗（アリストクラシー）よりは進歩してゐる、何故ならば貴族宗は血の問題であるけれども、拜金宗は實力の問題てある、而かも予は尙は一步を進めて曰ひたい、拜金宗は實力の問題であるか知らねども所謂實業宗は私欲の問題であると、今の實業宗は私欲宗である、實力の問題と曰ふよりも寧ろ獸力の問題である、ひつばり取るのである盜み集めるのであると思ふ。

予は予が理想してゐる社會に於てあり得る如く、人間が御互に同じ競爭の立場に於て出發せぬ限りに於ては、吾人は實力問題を議するの餘りに早計であることを信ずる、今日の時代に敎育の平等なる機會があるか予は今自分が止り居るハーバード大學に於

て手近くその證を示し得るのである、今日此の大學にある四千の學生は多くは金持の子で月謝も自由に納め得、悠々として勉強され得る間に、貧乏に生れついた子は、一日少なくとも五時間の勞働は決して容易でない、而もこれをせねば衣食すらも出來ぬことになる、況や勉強をやである、月謝をやである。

予は「自ら働きて自ら活くる」の主義を平生信ずる者であるから、子の境遇を嘆ちつつあるのではない、唯だ識者に向つて此間の哲學を考へて貰ひたいのだ、即ち實力でもない所の遺傳的に與へられた利益（インヘリテッドアドバンテージ）は、吾らの競爭を極めて不公平にすると曰ふ一點である、社會主義は實に之れに對して明確な解答を與へてゐるではないか、曰く「生產の手段を公有にせよ」と。

哲學館事件が與へし教訓

數ヶ月前以來、新聞雜誌界の好題目であつた哲學館事件は忘れ易き國民の記憶より今しも忘れられむとしてゐるから、吾輩は遠く大平洋と北米大陸とをへだて、晩播き

ながら、こゝに今一度國民の注意をひいてみたいのである、哲學館事件の概要はもはや繰り返すまでの必要もないほど幾度かくりかへされてゐる通り、小さく曰ふてしまへば、素より一私立學校の出來事にすぎない、然しながら此事件は一私立學校の一問題として見過すわけにはゆかぬ、また一文部省の頑迷沙汰として非難し去つて、事終れりとなすわけにもゆかぬ、何故かとなれば、此の問題は實に國民の大に考究せねばならぬ一大問題である、語をかへて言へば、これは唯に政府の側のみの問題でなくて却つて吾等國民自らの問題であるのである、吾輩のみる所を以てすれば文部省がその職分として、現存の政躰に有害と見とめた帝王弒虐說を排して、その敎育政策の統一を計つたのは形式的順序として見れば寧ろ正當のことであつたと思ふ。吾輩は政府のなした所爲に就ては、國民として充分の同情を以て政府の精神に同感を表したのである然しながら事實の上に於て、今回の如き政府の所爲は、果して有效であるかと曰ふ問題になると、吾輩は容易に然りと答ふことが出來ぬ。言ふまでもなく壓制政策とか除外政策とか曰ふ者は、多くの場合に於て有効のものでないてふことは、少しく歷史を繙い

た者の知る所である、古き宗教上の異端征伐は言ふまでもないとして、先年大統領マッキンレーが殺された當時、米國は頻りと無政府黨禁壓策を講じて、現任大統領ルーズベルトもその教書のうちに、堂々とその方針を宣言した而も事實に於ては無政府黨は依然として運動を續けてゐるのみか、却つて益々彼等を激動せしめて、一層熱心とならしめたのである、露國は殆どあらゆる手段を盡して、無政府黨や異端を說く者を壓迫したけれども危險なる劒の手は往々にして、露帝の身邊にとゞかゝとした、而してかくの如き事情は端なくも遂に露帝をして「予は危險と知りつゝも自由を擇ばねばならぬ」と曰ふて今回の如く世界を一驚せしめた、信敎自由の宣言を發せしむるに至つたのである、吾輩は露帝が這般の大勇斷に於て、世界平和を主張した點に於て、獨乙のウイリアム、カイザーと共に一見識ある世界の二モナークとして數ふるに躊躇せぬ者である、吾等の隣國たる露國に於ては、曾て豫期せなかつた方向に對つて突如として今しも一大進化を試みんとする時、吾國民は不幸にも哲學館事件てふ名に依りて國民的迷信の一大事實は演ぜられたのである。

「哲學館事件」の要點でもつた所の、動機善なる時は弘虛も惡にあらずてふとは、何故國民敎育の基礎を破るものである乎、若し哲學館が專門の學術を敎ゆる所でなかつたならば、止むを得ないとしても、苟も哲學、倫理を專門に敎ゆる學校に於て敢へたからとて、必ずしも異端呼はりをする必要はないであらう。吾輩は今一步を進めて直に此問題をひき起した、通有的原因とも云ふべき點を見出さねばならぬ、それは別物でない即ち國躰宗と曰ふ一種の迷信である、國民大多數の上から言ふときに於て、吾輩は何時も此種の事件をかもした原因を此迷信に見ることを難しとせぬ者である、少しく進步的思想を鼓吹せんとすると、必ず此國躰宗が現はれて來て妨害を試みんとする、そしてその連中と問へば曰く田舍の小學先生、曰く頑迷なる國學者先生曰く官吏、曰く國民の多數然り、時としては社會の覺醒者を以て任じ、進步のチャムピヨン杯と自負する所の新聞記者すら、不敬てふ言を亂用して國民をまどはさんとするのである、勿論彼等は堂々たる理性の土臺の上に起つではなく、唯だ一片感情的迷信の上に立つてゐるのである、少しく冷靜に考へ來つたならば、國民としてこれは御互に甚だ馬鹿

げたとではあるまい乎。

こゝろみに、動機說の著者たる、ミユアヘッドの著述が如何に英米兩國に於て、待遇されつゝあるかを見ねばならぬ、ミユアヘッドは何人も知れる通り、英國の學者でその著述はもとユニヴアーシティ、エキステンション事業のため、講義したのを刊行したもので、言はゞ極く平易に、一般公衆に讀ませんとしたものである、で英國では此著述は何人も讀み、何處にも敎へられてゐて、いまだ嘗て危險として怪まれたとはない、米國なぞではマックンジーやパウルゼンの著述と一緒に到る所のカレーヂに用ひられてゐるのである、然るに不思議なるとには同じ政躰を有して同じく帝王を戴ける日本に此書の敎ゆる所が國躰に害ありとして退けられた、それを敎科書として敎へた哲學館は、從來の特權を奪はれた、實に不思議千萬ではあるまい乎、歷史家が忠實なる研究を過去に於ける皇室の上につけんとした時、彼は國躰を亂す者であると曰ふて一大學敎授の職を奪ひ去つたのは日本國民である、政事家が少しく共和的思想を鼓吹したと曰ふのを以て、一大臣の地位を奪ひ去つたもの等しく日本國民である。

抑も國躰とは何である乎、二千五百年來皇統の連綿として、絕へたことのないのを指して言ふのである乎、成ほど連綿と續いた皇系は珍しいことにちがひない。而も珍しい者は必ずしも尊い者とのみ云へない。

唯だ珍しいとの一事を以て貴いとするならば、それは恰も好事家が千年も古びた唐器の一片を大事がつて、黃金で作つた臺の上に飾つて置くと一般で、識者から見ればその愚や憐まざるを得ぬのである、否なかくの如きは却つて國躰の眞價を無視するものと曰はねばならぬ、國躰の貴い所以は恐れ多くも、天皇陛下が海の如き御同情を以て吾等臣民にのぞませ賜ふ所以である、君は父の如く民は兒の如くてふ語は實に吾が國民獨特の特有性であつて、これが抑も吾が國躰の天下に無比なる所以である、然しながら世人が所謂國躰なるものは、多くは無意義の言語で、決して此の精神を含めてゐるとは思はれない、因て國體と不敬の二字の下に眞理を無視したり、學問の自由を脚下に踏みつけたり、妄りに人權を奪ふたりして、はては民衆の進步と福運とを全く度外視去るとが甚だ多い。

二國の誇るべき理由は必ずしも皇系の長く續いたと曰ふ一事でなくて、寧ろその如何に國民が健全で、如何に君民相一致して居るかと曰ふ點にあるのである、無意義の服從の歴史よりも國民意志の活動の歴史を誇らねばならぬ、國民全体の發達と進歩とを誇るべくして、單に字句上の所謂國體とか國威とかは必ずしも問ふべき事でない、然らざれば忠實なる學者は段々その姿をかくして、日本の天地は勢ひ曲學阿世の僞善者のみが横行する樣になるのである。

教科書事件の起るのも、國民を責る教育家の輩出するのも、決して怪むに足らぬのである、極言すれば國民は自ら手を下して、かゝる人物を養成しつゝあるのではない乎。

飜つて英國民の寛量をみたならば如何である、獨乙にある事の出來なかつた社會黨の名士カール、マルクスを喜んで迎へた國は英國である、隣國より追ひ出された無政府黨の首領プリンス、クラポトキンをいれた國民は英國民である、レバプリックの佛國がいれきれなんだエミール、ゾラを滿腔の同情を以て歡迎したのは同じくロンドン市民であつた。吾輩は此等の人物をいれ盡もして、而も餘裕綽々たる英國民の度量に服さざるを得ぬのである、一個のミュアヘッドすら恐れていれきれぬ日本國民の狹量と迷信とは慥に同盟國たる英國民の冷笑を免れるわけにはゆくまい。

骨董をはこるに等しき所謂形式的無意義の國體論が貴重である乎。日本全體の眞個の進歩と發達と國民全體の眞個の幸福が貴重である乎、博士シイレーは曰ふた「惡政府とは最も多く神聖視されて仰がれてある政府の謂のみ」と思想の自由と行爲の自由のエキスティンクションは直ちに國民的存在の不可能を意味してゐる宗教的迷信も國體宗の迷信も、迷信たるに於ては同一である、吾輩は正直にして公平なる同胞識者に向つて此「哲學館事件」が與へた教訓の眞意義を深く深く考へて貰いたいと思ふ。

「ラサール」を讀む

今朝は待ちに待つてゐた萬朝報と、思ひもかけぬ幸德君の新著「ラサール」とが着いたので、讀みかけていたウイル、コックスの「米國都市論」もそっちのけにして、兩方とも十時の學校のレクチユアに出る前に卒業して了つた、唯だ一遍讀んだばかりで、

他人の著述を批評するのは甚だ失禮であるから批評と曰はず一寸所感をつまんでみやう。

秋水君の前著は、嘗て萬朝報紙上で批評してみたが今度の著述は前と違ふて、文章の點から曰ふも一層平易で、言文一致は殊に氣に入つたのである、獨乙社會主義運動の祖にして、戰士たるラサールの面目は、秋水君の活氣ある文を借りて日本の社會に現はれた、充分の同情を以て書かれた爲か活如としてその風采を想望することが出來る、レスリー、スチーブンが「ジョーヂ、エリオット」を書いた時ある批評家はそれを評して、スチーブンの筆の下にエリオットが再生したと曰ふたが、僕は秋水君の此著にも於ても同じことを曰ひたいのである。

ラサールに關しては種々の說がある、ラサールと同故鄉のそしてラサールの嘗て學んだことのあるブレスロウ大學敎授ゾムバートは、彼を餘りよく曰はない、「ラサールの熱は高尙な熱でない、唯だ政治的野心と俗名を得たいばかりの熱心で、そして時勢がそれを甘く取り持つてくれたのだ」とかう曰ふ冷酷な批評をしている、かくの如きは

唯にゾムバートのみでなく、多くの彼の批評家が曰ふてゐる、然しながらラサールの全生涯を通觀すれば決して此等の評論の正しからぬを知ることが出來る。

秋水君は何處までも同情ある筆で、學者としての彼、辯士としての彼、熱血男兒としての彼、交際家としての彼を殘りなく描かれた、殊にその比較を吾が國の吉田松陰に求めたのは頗る當を得てゐる、然し予をして曰はしめば、その比較に類似せる人物は必ずしも遠く吉田松陰までさかのぼらずともよいこと、思ふ、予は今日の日本社會主義者間にその人を見出すを決して難からずとなす者である、唯その人の果して誰なるやは、今は沈默して置くことにしやふ。

「ラサール」は單に一個の傳記でない、實は秋水君のもゆる如き熱誠の血は此の書を通じて流れてゐる、ラサールが若し獨逸社會運動の祖であるならば、此書は日本のラサールを呼び起す曉鐘であらねばならぬ、予は獨逸と曰はず、世界の社會主義家を列觀し來つて最も氣にいつた人物が二人ある、その二人は實にラサールとプルードンとである、プールドンの思想は必ずしも予の崇拜する所でない、而も彼の大膽にして不

敢言はんと欲する所を敢て曰ふの勇氣に至りては敬服せざるを得ぬ者である、彼の所謂「財産とは盜める者也」の一語は如何に破天荒なるプルードンの「財産とは何ぞや」の緒論を讀みし人は知るであらう、彼が如何に基督教を排して遂に「神學とは必竟不道理の科學也」と曰ふに至つては、罵倒是に至つて極れりと曰はねばならぬ、ラサールも或點に於てプルードンの半身である、セリーグマン教授も曰ふ通り彼の學問は組織的でない、マルクスの如く精細なる思想ではなかつた而も其の戰鬪力に於ては到底マルクスの及ぶ所でない。

セリーグマンは亦曰く「インタナショナル萬國合同はマルクスの手を經ては失敗なりしと雖も實際的社會主義はラサールの手を借りて政治的社會的勢力たるを得たり」と、ラサールは實に當時の社會主義が實際的に戰ふべき戰を總て戰ふた、ラサールの一生は花々しかつた、面白い而して壯烈なるドラマであつた、彼の生涯を單に期會のたあと說く者は未だ彼を知る者ではない、世間は曰ふ彼にして若し政治的地步を有せしめば、彼は決して社會改革の鼓吹家とはならなかつたと、然れども見よ、彼は決して

唯だ凡俗の政治的野心家の如くそれほど凡俗ではなかつたらしい、彼が大學にあるや熱心なるヘーゲル哲學の崇拜家であつた、當時のラサールをレーは評して「ゼ、イムプレツショチーブル、ラサール」と曰ふてゐる、予は此一語がラサールの全生涯を通じて評され得る言葉と思ふ。

秋水君の「ラサール」を讀んで了つて起り來る感慨は實に一にして足らない、予はその文章の間に躍れる精神と活氣とを以ても此の一小著の必ず深く人を動す者あるを信じて疑はぬ、予はラサールの「幸德秋水」であるかを少しく惑ふた位である、終りに一言して置きたいことは、平民文庫の體裁である、「ラサール」の體裁は余程よく出來てゐる、唯だ著者の名を記するに眼ざわりのする字體を以てしたのは予の取らざる所である、何故平易に見易い普通の活字を以てされざりしかである、サイズは至極ハンデーで平民文庫たる名にそむかぬ、それからかゝる著述にあつてはしいのは著者の序文とラサール研究に關する一通りの書目とである、今後の著述には必ず附して貰いたいと思ふ、これは讀者のために非常な有益な者で、研

究心を起さしむる唯一の方法だと予は信ずるから。

先生とは何ぞや

日本人が御互に自分の地位以上にある人を呼ぶに先輩とか先生とか曰ふのは一種の習慣であるが、之れは能く考へてみると實に馬鹿なことではある、單に習慣とすれば甚だ悪い習慣であると思ふ、單に敬語とすれば頗る無意味の敬語であると思ふ。

如何に地位が自分より上なればとて先生を呼稱するは謂れないとである、職業とか地位とか曰ふ者は決して吾人を區別して先生となし弟子となさしむる所以ではあるまい、人間として吾らが考へる時、吾らはその大工たると帝王たると官吏たると大臣たると畢者たると少しも差等はないのである。

然るに今日の世の中をみるに多くの沿々者流は名聲ある者を呼ぶ時には先生を以てするのである、彼等は勿論必ずしも心から敬して先生と思ふてゐるのではあるまい、あるひは單に自分の出世とか成効とかを思ふて厭々ながら曰ふのであらう、あるひは單に心づかずして習慣的に口にするのであらう。

何れにしてもこれは御互に自分のインデイビヂユアリティーを重せぬ結果であるのだ、少しく當今の教育を有してゐながら、甚だしきは多少デモクラシーの思想を味ふてゐる人ですら、猶々として此の悪習慣に襲はれつゝあるとは如何にも口惜しき沙汰ではあるまい乎。

殊に文人社會にありては此弊害が甚しい樣に思ふ、己より少しく前に名を成した人に對しては何れも何々先生を以て呼ぶのである、見られよ今日の新聞雜誌社會、著述學界に於ては如何に多くの先生に依りて滿されつゝあるぞ、一日の出世を先にすれば彼は先生であり一日の成効を後にすればこれは弟子である。

然しながら予は必ずしも文人社會にのみ曰ふのではない、かくの如きは日本今日の何れの社會にも應用し得る理屈である、必竟するにかゝる習慣、用語は全く漢學思想の結果で所謂忠孝の倫理、盲從の哲學が產みなした產物であると思ふ。

人間が人間として御互に自分の立場、權利、覺悟を知つた時にはかゝる無意義の形

式主義は行はれぬのである、先輩だから何事も從はねばならぬ理が何處にある、先生の曰ふことだから、悉く眞理なりてふ理が何處にある、一日吾よりも成効を先にしたがため、吾は彼を呼ぶに先生と曰はねばならぬ理が何處にある乎。

予は代して徒に過激の言を吐いて自ら快とする者ではない、つら〳〵今日の社會をみると多くの有爲の青年男女は此の舊思想のため此舊式に從はねばならぬために世に出づるの際多くの困難を感ずるのである。

先生主義の行はれてゐる國は紹介の必要ある國である、先輩主義の盛なる社會は依頼主義の社會である、人は自分の實力を以て世に出ることが出來ぬ、「手づる」は唯一の成功の要素であるのだ、そこで青年は何れも此の見易き事實を學むで、妄りに先生主義をふりまくのである、下手に組みかゝるのである、せけたふりをするのである、自分の品格主張を拡げてまでも。

大岡育造君でおつたと思ふ、近頃政治學校の卒業式にのぞむで、頻りに此弟子いりの秘法を説いてゐた。一圓二十仙の者を七十五錢に賣れば、成るほど賣れゆきのよいに相違ない、然し自己の實力を犠牲にする必要はあるまい、吾が人間としての品格を七十五錢にする必要はないのだ。

米國なぞで青年が職業を得んとする時は、多くは新聞に廣告するか若しくは自ら自談にゆくのである、而して又雇ふ者も怪まぬのである、彼等がかゝる青年に向ふて發し得る總ての問は唯だ「君は何をやれる乎」である、日本では「君は誰の子だ、誰れの親戚だ」である、こゝに日本の社會と米國との相違を明かに語つてゐるではない乎。

尾崎行雄君が一面識なかりし島田俊雄君を過般教育課長に任用したので珍らしいことのやうに日本の新聞紙はかいてゐたが米國なぞにはありふれた事實である、實力の重せらるゝ國にはかゝる事は當前の事であるのだ。

予は日本語がかゝる多くの無意義の敬語を有してゐたことを悲む者である、英語に於ては何人にも君と吾を適用し得るの自由を喜ぶ者である、所詮階級制度の産み出した、先生でも先輩でも閣下でも今日の如き社會に於ては一日も早くとり去らねばならぬ、少なくとも平生進歩思想を精神として世に起つ者は自ら着々として實行せねば

らぬことゝ思ふ。

デモクラシーは人間を人間として見る所の土臺の上に起つ時最も健全であるのだ、職業の高下、技倆の大小、學問の有無は吾人をして先生たらしめ門弟たらしむる所以ではあるまい、吾等は人間として御互に相等の尊敬を拂へばそれで足れりである、君と吾とは何人に對しても如何なる場合にも適用し得る樣に吾人は務めねばならぬ、子は君と吾ほど平易で簡明でさうして立派なる自然らしき呼稱はないと信ずる、親がつけてくれたそのまゝの名のやうに。

今や學位や爵位や雅號の時代は過ぎ去らむとしてゐる、吾が國の文人の惡癖として用もなき雅號を用ゐて、親が與へたそのまゝの名を書くことを却つていみきらふに至りては沙汰の限りである、文壇に於ける吾と社會に於ける吾とを別にせむとするは、必竟道樂として文學をリガアードした結果である、自分の責任を以て世に起つ時は筆を以てするも、十六銘を以てするも同じ道理である、文人が雅號にかくれてゐる間は到底筆にする所と實際行ふ所と一致せぬ文士のみの橫行する時代である、所謂戲作者的文士の多き所以も此職業に對する覺悟如何から割り出されてくるのである。

自分の職業に對して眞卒な覺悟を有し、正直なる態度を以てこれにのぞむとすれば何人も雅號の如き無意義極まる者を用ゐて平然としてゐるべきでない、如何なる職業でも皆な社會と相關して倫理的意味ある者でそれを自覺すると否とは即ち此の問題の定るや否やである。

グリフヒス君の言ふ如く日本人は尋究的精神に欠けた國民であるから何事にも「何故」を適用しないのである、唯やり來りのまゝを襲踏して敢て怪まぬのである、であるから支那文明を眞似ることや西洋文明を眞似る他何事も能くなし得ぬではない乎、吾人は此の欠點を人種的欠點の一としてあきらむべきでない、何事にも「何故」を適用して無意義の形式主義の繰り回しは出來るだけ早く取り去らねばならぬのである、先生の呼稱でも、大家かつぎでも、盲目的の人物崇拜でも、國体の自慢でも。

旅窓雜吟

（ヘンリージョオヂが墓にまうづ）

（一）

もゆるばかりのなさけもて
君男々しくも叫びてし、
華はなは野にひゞけども、
貧富のけじめいまだしも、
ときがたくしてのこるなり。

（二）

世はいや闇とならむとし
人はたともにはまん時、
義人の跡をわれは今、

忍びながらにはからずも
墓詣よむ眼涙みつ。

ワシントン所感

紐育に來てから四年ぶりで、初めて米國の首都ワシントンに遊ぶの機會を得た、首都と云へば大層うつくしい町であらうと想像して行つたが、四年餘も紐育に住むだ眼で見れば、餘り驚くべき事もない、

勿論今日は最早キャセドラル見物の時代でないから、予も實にワシントン市の人民とその生活を見るべく行つたのだ、然し人民とその生活は直に市の構成に密接の關係あるものであるから、一概に建築物を度外視し去るわけにはゆかぬ

ワシントンで一番眼につくものは、兎も角も國會議事堂である、一千五百萬弗餘を費して造られた建物はいふまでもなく立派である、而も余が議事堂の大ホールに入つて感じた者は、必ずしも眼を驚かす壯觀なる掛物や裝飾ではなかつた、予は第一番に

感せざるを得なかつた者がある、そは多くの見物人が自由に入り來り、何人の許しも無く、勝手次第に行かんと欲する所に行かれ得るてふ事實であつた

議事堂の門扉は常に何人にも入り得る樣に開かれて、支那人が入る來るも、日本人が入り來るも、歐洲人が來るも、敢て拒みはせぬ、素より一國の議事堂は一個の見世物ではないから、必ずしも見世物然とかまゆるの必要はあるまい、併し若し之れが「人民に依りて人民の爲めに造られて」あるならば、何故人民が見ることの自由を持ち得ぬ乎

キヤピトルの次に眼につくものは、國會圖書館であろう、此圖書館は十九世紀の初に起つた者で、今日は實に米國中殆ど比較する者のない程整頓して居る、建物の風は伊太利ルヂサンス時代のであつて、悉く大理石で敷きつめた床は、汚れた靴で這入るのが恥かしい程である

國會議員の爲めに建てられた書籍館は廣く一般人民の爲めにも開かれて居て、何人自由に入り閲覽し得るのである、如何なる書籍も得られぬ者はないが、わけて雜誌新

聞室の整頓せるには驚かされた、自分は平生職業柄として、新聞雜誌に最も多く興味を持て居るから、ワシントンに滯在せる二週間は殆ど毎日の如く此雜誌新聞室で暮した

伊太利の刊行物でも、佛、獨、英等のでも、又日本の「太陽」までも、コヽに集められてある、一言にして曰へば此室は雜誌新聞に現はれたる世界文明の博覽會であるのだ、殊に驚くべき程便利を感じたのは、一日乎が四五年前の或る地方新聞一枚を參考せんとて、ソレを掛員に要求したら、十分時を出てずして其古新聞の一綴が乎の前に持ち來されたことである

書籍を引出すにも、備付用紙に自分の好める札を擇びて、その番號を書き置けば、要求次第、如何なる書籍もその前に持ち運ばれるのである、書籍の運び入れは無論電氣が利用されて居た、一々人手を以てする如き不便は見ることが出來ぬ、參考書の如きは讀者の便宜に從ひ、二日でも三日でも、其擇んだ机上に殘して置くことすら出來る、新渡戸君が曾て米國は皆な燒けても此圖書館さへ殘ればよいと曰はれたものも無理で

ないと思ふ

ワシントンの首腦たるべき者はホワイト、ハウスで米國大統頭の政治を行ふ所である、予は此等を見殘さねばならぬ好奇心のうすらきはてた予は此等の多くを見舞ふべき望を起さなかつた

總てを惜て、予は此の人間としての單位に於て立つ時は、何人も同じ者であるてふことをホワイト、ハウスと議事堂とがその見物人に絕へず教へつゝあるのを見て、遠くワシントンを見舞ふた償として充分であると信ずる、紐育から態々尋ねて來た予にワシントン市が與へた敎訓はこれだけである、また是れで澤山だと予は思ふ

民の聲こゝにきかれむ民によりて
民のためにて建てし議事堂

社會的罪惡と婦人勞働者

社會問題の唱へらるゝ所、勞働と資本の問題の起らざるはなく、勞働問題の稱へらるる所、婦人勞働問題の叫ばれぬことはない。けれども殘忍なる勞働者對資本家の關係は、まだ依然として存してゐて、わけても婦人勞働者の待遇は一層ひどい樣である。現に吾國の如きは其好適例で、數年前であつた、日本宗敎と云ふ雜誌の記者に依て唱へられてから、少しは世間の注意も惹いたが昨今は如何である何事にも飽き易い社會の輿論は立ち消えの姿となつてしまつた、

亞米利加などでも、今日此問題は盛に研究されてゐるが、これも一部の熱心家の間だけて、曰はば徒々たるものだ、下婢問題の如きも、時々唱へらるゝけれど矢張眼ざましい改良案は出ないのである。近頃吾日本の有樣を見ると、廢娼問題が盛に再燃して、政府も識者も大分壯快な擧に出たらしいが、これは確に社會進步の一兆として見てよいと思ふ。

けれども爰に吾らが考へねばならぬことは、社會の消極的救濟は、社會救濟として極く手弱い方法であると云ふとで、例令へば腐れかゝつた疵をあわてふためいて切りとらうとするよりも、其腐れた原因を探つて、何處に病源の存してゐるかを明かに

して、そして其病氣の如何に依て、あるひは切り去り、あるひは適當な藥をもらねばならぬ如く、社會の疾病も必竟同じ樣な者で、消極的方法に依ると同時に、積極的方面別言すれば根本的方法に依つて治さねばならぬと思ふ。賣娼は決して悪いことではない、勿論人道に原いた大精神である、然し要するにこれも消極的姑息の療法で、悪く曰はば藪醫者なのだ、吾國の社會改良家を見ると隨分此のうわつらの藪醫が多い樣である、風俗改良だとか何とかつまらぬ枝葉の事にばかり熱心して、少しも根本の要點に眼をつけぬのは誠に不思議千萬である寧ろ愚なことではある。

吾らの肉躰ですら、單に醫藥ばかりでは駄目なので食物から衣服から居室から總ての點から注意してかゝらねば、治療することは出來ぬ。であるのに今日の社會改良家の如く、廢娼なり風俗なり唯だうわべばかりに眼を注いで、恰も肝要な根本を忘れてゐる樣では果して何事が出來るであらう。

曰ふまでもなく娼妓の自由廢業運動に依て、立派な正業に歸るものもあるに相違ないこれは慥に同運動の効果として稱賛を價する點である、然しながらまた素の默阿彌となるのも決して少なくはないと思ふ、よし公娼とならぬまでも私娼となるのは必然である、何故かと云ふのに、社會がさうさせる樣になつてゐるのだ。先づ正業と云つて婦人の爲すべき事を數へてみれば、職工とか下女奉公とかまあ大躰はこれであらう、然るに職工の狀態は如何であるか現在の處では實に娼妓の境遇と殆ど差等なしで、賃金は極めて安く、奴隷の如く扱はれて、そして朝から夜迄役々として勢働に從はねばならぬ、常人ですら耐え難き此地位が如何して、一旦不規則な生活を送つた者に忍ば れ得やう、これは委しく曰ふまでのことはない。下女奉公も同じことで、結果は失望となり、自殺となり、德義心の弱い彼等は直に一層これなら娼妓の方が氣樂だと云ふ心を起すので、今後公娼の漸く廢さるゝにつれ愈々私娼の盛なるのは火の手を見るよりも明だと思ふ。

亞米利加紐育市の現狀を見れば實に驚かれる、千八百九十五年ドクトル、サングルが出版した醜業婦史に依ると當時少なくとも三萬の私娼が同市中にあつた、これを當時の人口に對すると丁度市民五十五人に對する娼妓一人となるので、文明國の都會

としては實に腐敗極つてゐる、況や今日はボリスの知り得る限りですら既に四五萬に達してゐて、其他統計に入らぬ半娼の類は甚だ多く、店に働く婦人、女工などは所謂半娼でこの數ばかりも隨分あるであらうと思ふ。爰に最も注意すべきことは何が娼妓となりし主因であるかと云ふことで、社會の疾病を治するには是非とも知らねばならぬ要件である、今紐育市に於ける二千人の娼妓に就て調べた原因を見るに、先づ重なるものは左の如くである

貧　困……五二五人
傾　向……五一三人
誘　惑……二五人

最多數は矢張貧困からしてで、助けなき生活の欠乏は可憐なる幾多の女性をして端なくも暗黒界の人民とならしめたのである、すこしく長いけれども、紹介せねばならぬ話がある、これは實際ドクトル、サングルが娼妓に就て聞き得た實話の一つで而も能く憐れな境遇を描き盡して居る。

「妾のこんなになりましたのは、全く止むを得ぬ事情からでして、とまうしますのも妾の妹と云ふのが妾よりも三つ歳下で、妾と一緒に住むでゐました、少さい時傷を致しまして、片わになりましたので少しばかりの縫事のはかこれと云ふ仕事が出來ないのです、妾は實際妹を養ふべき位地にありました、で二人して他人の縫事をしてゆけばどうやら細くも今日明日は過せますのでした、處が或日のこと大雪が降りまして妾共の仕事は全くなくなつたのですけれども妾共は喰べずには居られませぬ、家主から責めたてられる家賃は拂はねばなりませぬ、唯だ二人して泣き明すより外なかつたのでしたすると隣の者も可哀相と思ふて妾に少しの仕事をくれました一日は暮せましたそれから種々考へて居る時、隣の人がまうしますにはあなたはそんな困難をしないで醜業婦でもしたら可いでせうとすゝめました、妾もまんざらやうな事は全く知らぬでもありませんでしたが、良心がゆるしませんので夢にも此處に住むことは思ひ及びませんでした、しまする中に妹は病氣になり、誰一人妾共を願いて下さるものもなくつてみれば妾もつく〳〵心に思案を致しました、妾一人

なら餓ゑても死にましたらう、然し病氣せる妹、妾の唯だ一人の妹、思へば涙も出なくなります、到頭決心しまして一層身を殺して妹のためにと云ふ心になりまして、それで昨年からかような始末なのでムいます、かうなりました今ではどなたも勿論正しき働を世話して下さる筈はなく厭や厭やながら望ない月日を送つてゐますのです。」

實際かやうな境遇に置かれた婦人を想像してみるならば、何人も同情の涙に袖ぬらさぬ者はなからう。一と口に廢娼と云へば正大の聲には相違ないが能く能く事實の上に精到なる觀察を下してみたならば、眞に熱血ある人士はこれを口にするを躊躇するであらうと思ふ、因でまた前に言つた所謂半娼と云ふことは、頗る意味深い言葉で、疑問は何故工女や店に働いてゐる女性が半娼の狀態に落いるかと云ふことで、これは今日多少識者の間に注意されて來た事實である、試みに日々の新聞紙を開いて、其廣告欄を眺めてみやう

「婦人簿記方雇い入れたし、時間、朝九時より夜十時迄、給料一週五弗。」

數知れぬほど多く、これらの廣告は日々の新聞紙の終りのページを埋めてゐる、心なき讀者は無意義に見過すであらう、然し此二行の文字の意義を深く考へてみると、實に涙の種ではある、朝九時より夜十時迄十三時間の勞働、これ將たゆるすべしとしても、一週五弗とは情ないではないか、如何に安價なる下宿の生活をしても四弗は拂はねばならぬ紐育市にあつて、一週五弗は誠にあはれなものである。數週前紐育「ヘラルド新聞に現はれた極正直な一婦人勞働者の自白した實話がある。

「妾は下宿料としては三弗より多く拂ひしことなし雪にも雨にも車代をはぶかんため妾は徒歩するなり、洗濯は總て自らなしても、衣服料、靴、手袋其他雜費としても二弗は眞に困難なるものなり」。

全躰紐育市中には Working girls, home と云ふものがあつて一般の普通の下宿よりは、幾分か安く下宿が出來るであるが、その數は極めて少ないので到底多數の需要は充しきれぬのであるから、彼等は少しの餘裕なく、貯蓄もなく、不幸にして其職を失つた時、病氣に襲はれた時は他に收入を仰がねばならぬ、少しく衣服らしき

ものを着やうとすれば、別に收入を求めねばならぬ、彼等も人間である時としては滋養ある食物を得たいであらう、時としては觀をはらすべく芝居も見たいであらう、因て多くの女工は皆な夜は賣婬をなして其不足を掩ふてゆくのである、何人も好んですのではなく、マルクスの所謂人は先づ食はねばならぬ、衣ねばならぬ、住はねばならぬので唯だ各々生存の要素を得やうとして、止むを得ず好まぬことをなしてゐるのである、彼等は必要なる生活のある部分すらひかへつゝ、貧困と面目なき不道德と希望なき生涯を續けつゝある間に、獨つて資本家を見れば、彼等は多くの利益を獨占して高大なる邸宅をかまへ、我まゝの肉欲を滿してゐる。元來生存の出來ぬ給料を以て人を動かしむると云ふ不道理はないのである、如何に女子とても生存の出來るだけの報酬を與へて使はねばならぬ、然らざれば雇主の被雇主に對する責任は何處に存してゐるのであらう。

亦、工女の時間規則の如きも、甚だ酷であつて、五分時を遲れると其半日は工場に入ることが出來ぬ、半日の賃金を得ることがならぬと云ふ始末で、實に情ないものである。

ある。遠き道を徒歩して來て漸く工場に達せんとせし時、五分時の遲刻は可憐の工女をして半日を待たしむるのである。かゝる嚴重なる要求を雇人に求めてゐる、資本家の爲す所を見れば、思ひ半ばに過ぐるのである。一例を擧ぐれば、工場内に於ける男女に各異りたる便所のなきがため、女性は其の勞働衣をきかゆるに、男性の見得る所にてせねばならぬ樣な不始末が多いのである。一方に求むる義務は多きに過ぐるほど要求して、他方に對する義務は少しも果してゐぬ。これらは眞に資本家の專横極まる點と云ふて可いと思ふ。亞米利加に於ける女性勞働者に對する資本家の酷遇は斯くの如く甚しいので、吾國に於ける資本家も亦全く變らぬことである。かう云ふ風に觀察してくると、社會的罪惡と、女性勞働者との關係は、最も密接してゐて、婬賣婦の增加するのも、德義の敗頽するのも、兩性間の道德の亂れゆくのも、詮ずる所は社會自ら作りつゝあるのである。否な資本家が自ら手を下して其種を播きつゝあるとだと思ふ。是は無論社會組織の不完全なる點なので、ゾーラが所謂近世の社會組織は勞働を屈辱して、神聖にして幸福なるべき勞働をして、悲痛と不幸の種となしてゐるのである。今

の社會改良家が先づ此根本的疾病を救濟せないで、妄りに廢娼を絶叫し風俗改良を主張するも、所詮駄目ではあるまいか。所謂一の死地より導いてまた他の死地に導かんとするもので、必竟何の効かあらんやである。

ほんたうに社會を改良せんとするならば、先づその根本に改革刀を下せです。而して皮相に移り、枝葉に及ぼしてゆかなければ、徒に腐敗より腐敗に移るに過ぎぬので、百の絶叫も萬の熱誠も空の空である。紐育ジョーナル記者曾て婦人の運命を嘆じて曰く「結婚せる婦人は家庭にありての妻たり、母たり、保母にして亦一家の主管者たり。彼女は寢床を離るると同時に働きはしめて、寢床にいるまでは止むことなけむ。切言すれば寢床にいりても時としては止まじ、若しそれ小兒の病みたらん時、深更泣き叫ぶを聞けば、彼女は起きざるべからず、起きて明日八時間働くべき夫の眠りを妨げぬ樣注意せざるべからざる也」と、言少しく極端とは云ふものゝ、眞理の一片は含まれてある。結婚せる婦人の身の上が、既に然りとしたならば結婚せぬ婦人勞働者の境遇は更に憐むべきである。狹くるしき下宿屋の二階、小暗き不健康な室のうち、幾多可憐の女性は、男子も忍び得ぬ不快な、望なき生涯を送つてゐるのである。婦人勞働者の運命もまた憐むべきではあるまいか、吾輩は今の所謂社會改良家に向つて、今一層切なる婦人勞働問題の解釋を要求したいのである。社會的罪惡と婦人勞働者との大切なる關係を深く考へてもらひたいと思ふ。

Be your theories what they will, here at least the state shall interfere.

吾人は家族を持つの權利ある乎

近世文明の競爭的狀態は吾人をしてかくの如き奇怪なる疑問を發せしむ。吾人は今日に於て一日と雖も、衣食住の不安なしに生活し得る者にあらず。今日所有せる財産、地位、名譽は、必ずしも明日吾人の物と限られざる也。吾人は日々轉々として移りゆく時世と共に、何處ともなく追ひやられつゝあることを自覺せざる能はざる也。

今日の社會にありては、男女の結婚は殆ど一個の悲劇たるに止りて、昔時夢みたりし如き、人間一生の盛典なりとは、思ひ及ぶ限りにだもあらざるなり。假令へば結婚は、

未だ必ずしも滔々たる男女の一生を、救ふべからざる悲劇に追ひやらずとするも、而も結婚より生じ來る家族の增加は、少なくとも世間難蔫の有爲なる男女をかりて、憐むべくも再び起つ能はざる死地に落ちしめずむば止まざらむとす。

結婚前にありては、野心勃々たりし男兒も、結婚後に到れば、意氣忽ち消沈し、野心去り、氣力うせ、一種云ふべからざる社會の厄介物となり了し、汲々乎としてひたすら自己の家族を支ゆることにのみ全力を奪はれつくし、何等理想なく、主張なく、生命なく、活氣なく、唯だ一個の機械となりて、成るべく多くの收入を得、家族の衣食住に補せむとするの止むなきに到る。吾人は眼のあたりかゝる運命に、弄せられつゝある幾多の壯年男女あるを見て、甚だ氣の毒に感ずる者也。彼等は自ら好みてなすにあらず。眼に止むを得ざれば也。現社會の組織が然らしむれば也。彼等豈に好みて自ら器械となりし者ならむや。

唯に彼等を器械となすのみに止まらざる也。彼等はその子女を適當に養育し得るか。彼等は其限りなく生れ來る小兒に向つて、充分の養育修養を與へ得るか。彼等は來るべき社會の善良なる市民として、其子女を社會に送り出しつゝありや。吾人は現時の社會の實狀を觀察し來りて、如何に多くの無教育にして不健全なる青年男女が、かくの如くにして、限り知れざる家庭より社會に出で來るを慨せずむばあらず。

彼等自身よりみれば、彼等は至つて無能なる社會の一員にして、唯だ自己の生活のためにのみ存在し、勞働し而して何等社會進步のため爲す所なき厄介物のみ。社會の側よりみれば、彼等は多くの不健康なる社會員を作り出して、社會をして罪惡多く、誘惑多く、危險多からしむる一種の罪人たるのみ。換言せば、彼等は實に家族を有するの權利なき者也。彼等何の面目ありて予は家族を持てりと高言し得る者ぞ。

然れ共此の「彼等」は、社會の最大多數者なるを知らざるべからず。彼等は社會の大部分也。而して此社會の大部分たる彼等は、自ら此狀態にあることを氣附かざる者の如し。彼等は生活のために忙殺せられて、此現狀を顧みるの暇なき也。自己の地位を自覺するの明を失へる也。而してその甚しきに至りては、自ら器械となり了せしをも知らずして、他の少しく主義を語り、理想を談じ、人生を念ずる者あるを見れば、彼等は迂な

りとて、却つて自らの愚を誇らんとする者すらあり。寧ろ憐むに耐ふべけんや。

思ふてこゝに到れば、極端なる競爭的組織の上に建てられたる近世文明の價値も、甚だ限られたるものにあらずや。吾人が斯かる狀態を感ずる毎に、必ずや想到せざる能はざる所は、如何に著るしく一個人若しくば社會の經濟狀態が、その精神的生活を支配し、變化せしめつゝあるかは事實也。

道學先生が如何に道德を主張するも、所謂個人の完成を通じての社會改良說たる極端なる個人主義も、所詮社會の組織と經濟狀態とが今の如くにしてあらむ限りは、到底理想を語るの愚にして、主義を說くの迂なるが如く見ゆる社會を脫する能はざる也。結婚も、家庭も、一種の重荷にして了らざるを得ず。吾人は一個の器械と化し去り、又何等文明の誇りたる能はざる器械の製造者たる也。知らず吾人は今の世に處して、果して家族を持つの權利ある乎。

學ぶべき米國

露國恐るべしとは、日本の到る所に聞かるゝ聲であるが、米國學ばざる可らずてふ事は、未だ日本人の多數に依りて認められぬ樣である。否、ある點に於ては、輕々しくも歐洲人の口吻を借りて、新聞國、若くば拜金宗の國として、見下す樣な傾向もあるのである。

然し米國は果して日本人の多數が想像する如く、單に實業上の點に於ける外學ぶべき者なき乎。トラストの外吾等に敎ふる所なき乎。唯だ一のシシヂゲートの外取る所あらざる乎。日本が果して斯の如き時代おくれの思想を持てりとすれば、實に悲むべきことではある。

從來政府が海外視察や留學生を送るを見るに、大抵は歐洲にのみ多く、而も獨乙をのみ專らにして、米國の如きは殆ど無しと曰ふも過言ではない。勿論學術の性質に依りては、獨乙の如きは世界中比すべき國のないほど發達してゐるに相違ないけれども何も彼も歐洲でなくてはならぬかの如くに考へるのは大なる誤であると想ふ。

今日歐洲に於ては如何に米國を眺めつゝありや。昨日まで新聞國と罵りつゝありし

米國に對して、今は如何なる態度を取りつゝありや。自國自慢で有名なる佛國は、多くの新聞記者を送りて、米國の現狀を研究しつゝあるではない乎、何事にも煽眼なる獨乙皇帝ウキリアムは、獨乙の恐るべき者は最早英佛に在らずして、米國に在りと明言して、其注意を怠らぬではない乎。

而して英國の如きは、有志家モースリーの如きありて、わざ〳〵自家の貲を投じて委員を派遣し、米國實業上の現狀を視察せしめたのである。これは既に何人も知る所である。廿七名の所謂教育委員を撰び、目下紐育、ワシントン、フイラデルフイヤと、着々當地の教育事情をしらべつゝあるのである。

モースリー一團が過般當市に着するや、コロムビヤ大學長バトラーは、彼等を招待して歡迎の意を表した。その時モースリーは起つて、一場の演説をなして曰く、予は英米兩國の教育を今比較する譯には行かぬ。何故なれば予は之れを學ぶべく來たのである。然し唯一事の言ひ得る事がある。それは米國に於ては何事も合理的になしつゝあるとである。諸君は常に實際的考に富むでゐると思ふ。例へば教育の方面に於ても、諸君は

諸君の子弟が實際の生涯に處して、直に役に立つやうに教育せんと務めてゐる。諸君は吾等英人が費しつゝあるよりは、より多くの金を教育の爲めに費して、普通教育でも、大學教育でも、多數人民の容易く受け得る樣にしてゐる。で商工業や科學や實業上の各方面に多くの大學教育なる者を有し得るのである。

合衆國今日の驚くべき進歩は、言ふまでも無く其天然の、富有なるに依るとは雖も、而も予は其天然を利用し開拓したる所以の多くが、全く米國民の自由にして進歩的なる普通教育の組織に因らねばならぬと思ふ。これは實に米國民の進歩と福運とを持ち來す要素であると思ふ。

予の見る所を以てすればモースリーの觀察は大體に於て當を得たる者と信ずる。一九〇一年度に於てロンドン市は、僅に一千八百七十八萬五千弗を、其教育に費して居るのに、紐育市は一九〇四年度の豫算として、實に三千萬弗の多額を要求してゐる。而して其就學兒童を比ぶれば、ロンドンは八十萬で紐育は五十萬であるのだ。これはやがて紐育とロンドンとの、教育狀態を語つてゐる者ではある乎い乎。

勿論米國が公共敎育のため斯く多大の費用を費す所以は、米國民其ものが多くは移住民より成立つてゐるからで、彼等若くば彼等の子孫をして、米國化せしむるには、公共敎育より他はないのである。

而も予がこゝに力をこめて言はんとする點は、米國敎育の組織と原理とにある。獨乙や佛國や英國が、今日米國の將來に恐れを抱くに至つたのも、實に此の點に原因してゐるのである。今日米國に來つて、實業上の進歩に驚くのは、抑も末であると思ふ。人は米人の發明的能力に驚くであらう、又その應用の才に感するであらう。而もそは尙は末であるのだ。

米人が今日をなしたのは、モースリーの曰ふ如く、實にその公共敎育の最新なる組織にあるのだ。エマルソンが曰ふた通り「機會の邦土」であるからである。何人にも出來得る限りの機會を、自由に與ふる平民主義に因るのである。先頃ワシントン市の敎育狀態を研究せるモースリー委員は、大統領ルースベルトの一兒が小學校にありて、他の市民の子弟と少しも異るなく取扱はれつゝあるを見て、米國民の實際的にして而も何

處までも平民主義の精神を實現せるに驚かされたのである。宜なり、獨人ゴルドバアゲルは「限りなき可能力の國」を著し、佛人ゴイエは「廿世紀の人民」を著して、何れも米國及米國民の驚くべき將來あるを賞贊してゐることや。

四五年前に「アングロ、サキソン、スウペリヲリテイー」（英國の長所）を書いて、自國民を戒めた佛人ヅモランは、今や再び筆を呵して「アメリカン、スウペリヲリテイー」（米國の長所）を書かねばならぬ時代となつた。日本人は……獨乙主義をのみ多く輸入した日本人は、自ら亞細亞の先導者を以て任ずる前に、少なくとも此亞米利加的精神を、充分に自分に實現せねばならぬと思ふ。

予は今後日本人が、從來の如く歐洲にのみ重きを置かずして、此新世界の行動に一層の注意を拂ふて貰ひたいのである。米國今日の盛運を成した所以が、必ずしも米國天然の富にのみ依るのでなくして、米國の公共敎育が何處までも實際的、合理的、科學的で、さうして何處までも平民的であるがためと言ふことに。

社會醫に望む

十二月八日發行の紐育「インデペンデント」紙は「社會主義と社會主義」と題せる社說を掲げて、頻りに世の所謂社會主義を難ずる者の、社會主義の何たるを知らず、而して又社會主義を主張する者の、度量餘りに狹くして、現時既に行はれつゝある社會主義の精神の實狀を認容せざるを慨せり。

社會主義はシモン、フーエン、マルクス、ラサールの貴むべき頭腦より生れ出でし者なるを知らざるか。社會主義の思想は咸一派の主張の如く、然く狹くるしきにはあらず。勞働者が貴族富豪に代りて世界を支配するの謂にてはあらざる也。所謂手と足とにて働く勞働者萬能の天地と世界を化する謂にあらざる也。

社會主義は吾が北米レパブリックに現に行はれつゝあるを知らざるか。見よ彼の新英州の都市が、如何にその交通機關と公立學校を支配しつゝあるか。而して西部諸州の州立大學の行政を知らざるか。それらは皆な社會主義精神の實行にてある也。社會主義を以て單に勞働階級の專有物と見做すが如きは、甚だしくその當を失せる者也。

蓋し、所謂社會主義の說敎者や又かの無學なる新聞記者、著述家等にとりては、此の高且つ大なる社會民衆の幸福や、進步や、發達やの問題は、餘りに廣きに失せり。彼等は色眼鏡を通じて世と人とを見る者、所詮公平にして、正大なる人道の全面を見る能はざる也。

「インデペンデント」紙は、平生公平の論議を以て、紐育新聞雜誌界に卓立せる者、今此の評論に接して、吾人は眞に他山の石を得たるの感なくむばあらず。思ふに北米に於て今の社會主義を曰ふ者は、少しく狹に失せるにあらざるか。彼等はマルクスの信奉者にあらざれば、到底社會主義者にてあらざる如く思へり。

予の見る所を以てすれば、社會主義は所詮ラサール、マルクスの一人二人を以て代表さるべきほど少なる者にはあらざる也。社會主義は假令へば大海の如く廣且深也。マルクスや、エンゲルや、ロドベルタスや、畢竟その海洋に浮べる舟の如きか。マル

クスの舟にのりて海洋を見る者は、マルクスの舟の周圍の海洋を見しに過ぎざる也。エンゲル然り。ロドヘルタス然り。豈にこれを以て社會主義の全面を見し者といふべけんや。

予は常に思ふ。社會主義が宗教的態度を取る時に於て、最も危險なる時也と。何となればそこに進歩は其進みをとゞむれば也。そこに進化の理法は其姿をかくせば也。そこに感情のみの感情は重なる支配者となれば也。

吾人をしてマルクスに吾人の歩足をとゞめしむることなかれ。キリスト教徒が二千年前のキリストにその歩足をとゞめしむることなかれ。

社會は一日も靜かなる能はず。人は常に何物にか向ふて進みつゝある也、換言せば、社會と人と何れも皆活ける者也。されば其疾病も又靜かなる者にてあらざる也。昨、調へし醫藥は、必ずしも今日の疾病に適せざる也。病が種々なる形に於て變りゆく時、醫藥も從ふて變化せざるを得ず。社會改良とは遂に此の變化し行く疾病の改良にてはあらざるか。吾人は「インデペンデント」記者と共に、世の所謂社會醫に向ふて、敢て一考を煩はさんとする者也。活ける社會主義と、死せる社會主義との區別を、認識せられむことを切望する者也。

寄附金十萬圓の倫理

石油王ロックフエラーが、今回十萬弗の寄附金をアメリカンボード外國傳道會社へ申出したことに付て、大分やかましい議論が湧きだした。一週間前から新聞紙や宗教家の間には彼是の説もわつて、今やボストンに於ては宗教家會議を開いて、此寄附金の諾否を議するに至つた。

反對する者の言ふ所は、つまりロックフエラー如き社會道徳をきづつけ、國民生活を無視してまで作り得た所の財を受納することは、一個の傳道會社としての面目にかかはり、延いてはキリスト教道徳の標準を下げる所以である。寄附金は貴いが傳道會社の精神はなほ更ら貴い。吾らはヌスビト同樣の金を貰ふてまでも傳道せねばならぬかと主張してゐるらしい。

賛成する者の側では、寄附者が如何なる方法を以て、その財を集めたかを問ふの必要はあるまい。若しロックフエラーが疑はしいとならば、他の幾多の小ロックフエラーを見出すに敢て苦しくはない。若し寄附者の情實を探ぐる限りに於ては、吾らは今日の世に於て、所謂正直な金を見出すに甚だ困難である。ロックフエラーにして、無條件を以て、その金を寄附したとすれば吾らは喜んでそれを受け入るべきである。悪し き金を善用するのが吾らの天職であると辯じてゐる。

なるほど双方の主張に多少の依る所はあるが、つく〴〵めて曰へば比較的の問題で、ロックフエラーの如き場合は、その最も著しいのであると曰ふに過ぎぬであらう。吾人は昔時ポーロがなしたやうな、所謂自給傳道を貴ぶ者であるとは曰へ、而も寄附された場合に於ては、敢てそれを排するの要はなからふ。それを善用すると悪用するとは、全く傳道會社の精神と無力に有ることで、必ずしも寄附者のか、はる所以でない。

吾人を以てみれば、之は全く馬鹿々々しい爭論であるが、一歩を進めて考てみると、抑も此議論の起りし所以の動機に付て、多少觀察すべきことがないでもない。つらつら

近代文明の傾向を見渡せば、何事も多くは器械的に流れて、宗教でも、教育でも、慈善でも……その最も精神的であらねばならぬ是等の者が、皆な物質的となつて了つた。

教育と曰へば大きな建築物や廣い敷地を意味し、傳道と曰へば立派な教會堂や音樂を意味してゐる。而して肝要な教育家と宗教家に付ては、少しも思慮を要せぬのである。今日米國にありて學校や教會の校長、教授、牧師等は、果してその學校、教會の建築物より立派であるか、吾人は直に然りと答ふることが出來ないのである。

學校教會の校長牧師の人物が、その建物よりも安價であると曰ふは、甚だ今日の教育家宗教家に對して失禮の言であるが、吾人は不幸にして彼の立派なる建築物を見る時、直してその比較が彼等の人物に及ぶ時に於て、吾人は此の眞理を告白せざるを得ぬ。

彼等は教育と傳道との重なる要素は、建物や寄附金でなくて、寧ろその人物の如何に依ると曰ふことを認めて居らぬ。

であるから彼等の教育や宗教は、器械を作るに足り、形式を作るに足りて、而も人を作るに足らぬのである。物知りを作ることは出來やう、人格を作ることは出來ぬのである。

る。學園を作ることは出來やう、品性を作ることは出來ないのである。彼等は器械の製造が目的であるからして、先づ器械からはじめる。建築からはじめる。寄附金募集からはじめる。地面の買いれよりはじめるのである。

かくの如くにして一個の帝國大學は起つた。一個の女子大學は起つた。而も彼等は器械製造以外果して何者を作りつゝあるか。何物を作りつゝあるか。これを世の傳道會社に見よ、教會に見よ、吾人はその等しく器械と形式の製造に他ならぬを認むる者である。而して此形式萬能主義より起り來る結果に付て考ふるならば、吾人は最も明白に此の寄附金の倫理なる者を知ることが出來ると思ふ。

先づ此形式偏重主義の第一產物としては、物が人より貴くなることである。教育家が學校を支配するでなくて、却つて學校の建物と教會堂とが、彼等を支配してゐるのである。否な學校と教會とを建てた金が、彼等を支配してゐるのである。彼等が頭をさげて貰ふた所の寄附金に依りて成れる建物は、彼等をして一生その前に頭をさげしむるのである。近い例は日本に於ける宣教師

學校と教會とを見れば分る。彼等の學校に獨立心なく、彼等の教會に自尊の精神なきは是を以てである。啻に彼等のみでない、見よかの滔々たる世間の教育と宗教と。

吾人はかくの如き觀察點から考ふる時に於て、ロックフエラーの寄附金諾否の爭論は、假令へばそれが一種の偏狹主義とは曰へ……少くとも時代の形式偏重主義に對する反抗的自覺として、寧ろ祝すべき現象であるまいかと思ふ、金が教育を支配し、宗教を支配する時代にありて、妄りに金を受くることから少しく考へはじめたのは、慥に一段の進歩と曰はねばならぬ。

然らば吾人は此時に於て、彼等が今日苦みつゝある形式偏重主義の結果は、彼等自らの求た所で、決して寄附者その人の罪であらぬてふ一事を了解して貰ひたいことである。彼等は寄附者の罪を數ふる前に、先づ自らの宗教教育に對する態度を深く考へて貰いたいのである。寄附金諾否の問題の倫理の如きは從つて明白となると思ふ。

日本人排斥とは何ぞや

近頃太平洋岸に於ては、又々日本人排斥の問題が盛に唱へられてゐて、桑港クロニックル新聞の如きは最も熱心に排斥論をやつてゐる。日本人排斥論は勿論今日に初つたことではない。久しい前からあることで、支那人排斥の如きは、千八百七十年頃既にヘンリー、ジョーヂに依りて論せられたこともあつた。

クロニックルの評論は頗る感情的で、一面から見れば、米國勞働者の意向を迎ふるに汲々たるの形跡もないではない。先づ大要を曰はふなら「日本人が昨今の如く吾國にいりこみ來ては太平洋岸の田舍は殆ど日本人にて專領されて了ふ。西部田舍の文明は日本文明になつて了ふ。日本人勞働者は不正直だ。支那人は土地を買はぬが日本人は買ふ。而して澤々日本村を作つて居る。吾が菓物商業の發達は貴いが、吾が米國のホームと文明は尙更ら貴い。吾等は菓物商業のために吾が文明を放棄してはならぬ。

かゝる論鋒を以て、クロニックルは日本人の排斥を主張してゐる。その應援としてはカリフオルニヤ洲知事パアデイの如きも、隨分極端な實論をふりまわして、實は自己の政治的野心の培養をしてゐるのである。つまり彼等の主張する所は多くは米國勞働者の

の貨銀問題で……日本人や支那人の如く安價な賃銀で續々いりこみ來られては、米國勞働者の生活の標準が降ると曰ふ點であるらしい。然しこれは經濟上果してかゝる結果を持ち來すや否や、吾人は一時に然りと答ふることが出來ない。

日本人の眼から見る場合に於ても、人足的移民（クーリー、イミグラント）は如何がはしいと思はるゝ點もないではないが、而も米國西部の文明が、彼等の勞働を需用する限りに於ては、何も「人足移民」の不必要を唱ふることは出來ないのである。歐洲よりもかの伊太利人の如きは、毎年續々として此の勞働の需用に應ずべくやつてくる。若し米國政府が、無敎育と曰ふ一點を以て、日本の「人足移民」を責むるとすれば、彼等は伊太利人の移民も等しく責めねばならぬ。

で、桑港にありてもクリスチャンアドボケート新聞の如きは、此點を擧げて今の排日本人論を駁してゐる。「米國の文明が從來の歷史に於て示せる如く外國移民の集合に依りて成立してゐるならば、吾人は移民を歡迎することに於ては、決して躊躇してはならぬ。歐洲移民にしろ、亞細亞移民にしろ、移民の排斥は畢たつゝしまねばならぬ。

彼等は既に多くの天才を太平洋岸より迎へ得た如く、將來幾多の天才を太平洋岸に迎ふることを忘れてはなるまい。

然りと雖も吾人日本人は自ら顧りみて、此問題の眞相を極めねばならぬ。吾人は日本人排斥論を米國の問題としてでなく、吾人自身の問題として考へねばならぬ。吾人の現在及將來の移民地としての米國が、何故吾人を排斥するやを深く自省せねばなるまい。從來日本人排斥を口にするの徒は徒らに米國政府の欠點のみを擧げて、却つて吾ら自らの欠點を顧みなかつた。予は此點に於て少しく他の日本人排斥論を排斥するの徒と意見を異にしてゐる。

千八百六十九年七十年の間に渡つて、ヘンリー、ジョージが初めてミルの經濟學を學んで、それを實際問題に應用した時、例の有名なる「排支那人論」が紙上に現はれた。當時彼の議論の根底は種々あつたけれども、その重なる一つは支那人は米國の宗教を理解せぬのは勿論、米國の政治的精神を理解せぬと曰ふのにあつた。ジョージは後年自身の支那人排斥論の誤謬を認めたのであるが、此の一點は今日に於

ても、全く不道理の言ではないと予は思ふ。

一體、何處の國にしても、一寸來て一寸歸つて了ふ樣な移民は歡迎せぬのである。日本人の多數は、何れも此種の移民で、一生米國の土と化して了ふと曰ふやうな考で初めから來るのが至つて少ない。であるから從つて多くは獨身で、而して「旅の恥はかきすて」的の思想を持つた者ばかりで、これらが米國の風敎上に及ぼす結果は決して少小ではない。而もこれは暫らく怨するとして、なほ一歩を進めて日本人は米國の政治的精神を了解し得るやの問題である。

口では立憲の代議のと立派らしいことを曰ふてゐるが、まだ〳〵日本人の最多數はデモクラシーの眞意を味ひ得るだけの資格がない。米國に來ても英國に行つても、矢張「日本日本」でゐるやうでは致方もないではないか。米國に來たら少しは開けて貰はねばならぬのに、桑港などでは、往々日本にあるやうな、不敬事件の、御眞影のと曰ふ小供くさい出來事が現出するのである。こんな馬鹿々々しい事を米國に來てまでやつてゐるやうでは、日本人も米國に對して歐洲人と同等な權利を主張する資格はない

だらふ。

愛國心と曰ふと、何でも良いこゝと心得てゐるのは間違つてゐる。米國に居たら何故自分を米國の政治的精神に適應せしめないか、何故デモクラシーとは何ぞや位を考へて見ぬか。何時までも二千五百年來と曰ふ筆鋒ではいかぬ。歐洲人が米國に來るのは重に「より善き生活」を求めて來るので、從ふて古い政治思想にあきたらぬから、直ぐ自分を米國にあてはめやうとする而して彼等は米國市民たることを誇りとしてゐる。彼等は先づ熱心に英語を學ひはじめ、米國政治の精神を解し、そして米國永住の覺悟をきめて了ふのである。

然るに日本人はこれに反して、終始慕郷の情にかられて、昔し風の「錦衣故郷」の精神そのまゝである。「よりよき生活」などゝは夢にも解せぬのである。況して日本臣民をやめて、米國市民たるを誇るの世界的思想をやである。吾人はかゝる舊思想の漸々取り去られて早く新思想、廣い世界的思想の普及と發生を望むでゐる。

要する所、日本人排斥の裏面に潜める敎訓は、吾等日本人の弱點である。日本人が

自分に米國政治の精神を解し、それに自らをあてはめ、日本を生活せずして米國を生活するやうになれば、米國政府は喜んで吾等を迎ふのである。米國を生活するとは、和服を洋服にかゆるのみの謂でない、下駄を靴にかへたのみの謂ではない。日本人は外形的に於ては支那人と異にしてゐるも、その心的狀態にありては支那人よりも多く自國を生活してゐる點が多い。日本を生活するのは惡いではない。今少しく開けた米國の政治的精神を了解せよと曰ふのだ。せまい愛國心をうちひろげて、今少しく「よりよき生活」と曰ふことを考へよと曰ふのだ。言葉を換ゆれば、日本村の建設をやれと曰ふのだ。

アービングが家のほとりにて

（一）

ちぎりし乙女の胸をいたみ
一人さびしく君住みぬ、

流るゝ小川は今もなほ
瀬のささやき絶えずして、
やさしき人をば忍ぶなり。

（二）

あたりをめぐれる雜木林
秋はやゝふかく葉もをちぬ、
誰ひくらむか糸の音の
昔思ひつたゝすめば
ハドソンの河月ほそし。

予は如何なる社會主義者なる乎

ウイリヤム、ブライヤンが近頃露のトルストイを訪ふた時、翁は卒然問ふて曰ふた。君は社會主義者なる乎。ブライヤンは答ふるにその然らざるを以てした。翁は即ち欣

然として予は君の社會主義家でないことを喜ぶ。予自らも又社會主義者ではないと。

世の所謂多くの主義家は此對話を聞いで少しく驚くであらう。何となればトルストイは從來社會主義者よりは其力強き加擔者として、無政府主義家からは其哲學的側面を代表せる者として、基督教者よりは偉大なる預言者として見られつゝあつたから。

蓋しトルストイほど多くの所謂主義者から尊敬を拂はれた者は、今日生存せる世界の人物中見ることが出來ぬであらふ。然も翁を以て唯だ一つの主義として葬り去るは、トルストイを强ゆるの甚しき者である。社會主義者からその加擔者と見られたからとて、彼は純然たる社會主義者ではない。所謂無政府主義家でも又所謂クリスチヤンでもあらぬ。トルストイの偉大なる所以は實にそのヒユマニタリアンたるにある。彼は社會主義の中にも、無政府主義の間にも、キリスト教にもその輝きてある人道の光を見た。その光のみを見た。そうしてその暗ひ所を見なかつたのである。

であるからしてトルストイほどその所説に於て變化しつゝあるかの如く見ゆる者はなからふ。彼の非戰論や非婚說や、菜食主義や美術論や、素より矛盾せる如く思ふ者

もあらひかなれども、而もその根底を流れてある者は實にヒューマニティの大流である。彼は時として極端にのみ傾いたけれども、彼の歩める道が人道のそれであるからして、彼は世の所謂迷信家の類を超脱したのである。

一轍一つの主義で、此厄い世の中を説ふとするのは、少しく出來がたいことであると思ふ。無政府主義家は無政府主義の世になれば人世は大平無事となると信じ、キリスト信者は、キリストの福音のみを信ずれば、天國は近づくかの如く説き、社會主義家は社會主義を實行すれば人類の幸福は得られる者と云ふ。

人世と曰ふ者をさう氣短に考へれば、成る程眠るほど左樣に考られるかも知れぬ。然し人生はそれほど容易くさまる者ではなく、又理想通りの形にはまる者ではない。人間の進化が相應の階段を經てなされた事實が、科學者の說く如く眞理である限りは、如何に偉人の理想だからとて完全無缺である理はない。キリストの理想は二千年後の今日ですら充分行はれてゐるではない乎。で此間に處する吾人の職分は、現代の大勢を見、その最も多く欠くる點を見て、最善を應用して人類の進化を、正當に導くより他はないであらふ。此の如き立場よりみれば、世の如何なる主義にも、多少の善は含まれてあるので、キヤソリック教徒が、何でも自分の宗旨は、世界で一番よいなどと考へる樣な迷信はなくなると思ふ。

バイブルにも善言はあり。「資本論」にも聞くべきことあり。「進歩と貧困」にも、「純正批判」にも「コラン」にも學ぶべきことは澤山ある。而して又聞くべからざることもあるのである。要は社會と人と時代とをみてとるべきと取らざるべきとを定むるより他ないであらう。

迷信とは信徒の上にのみでない。主義を追ふ場合にも澤山ある。一人の米人であつた嘗て予に問ふて曰く君はマルクスのマニフエストを讀みてやと僕曰ふ讀みしことなしと彼曰くマニフエストを讀まずして能く社會主義者たるを得るやと、予曰ふ嗚呼君も迷信の徒よ一生マルクスの一頁を讀まずとても、社會主義者たるに何の不都合かあらん。僕の社會主義はマルクスのにても、エングルのにもはたシモン、キングスレーのにてもあらず、僕は唯だヒューマニテーの社會主義を信ずる者也、と此の答は彼をして少しく

心地惡からしめたやうであつた。彼は疑ふまでもなくマルクスの「資本論」をバイブルと信奉してゐる一人であつたのだ。

曰ふまでもなく「資本論」が、近世經濟學史に與へた効果は偉大な者で、社會主義者と自稱するを敢てせぬセリイグマン教授の如きも、一昨年出版した一小著「歷史の經濟的解釋」に於て、マルクスが近世經濟學を倫理化した點は、忘るべからざる要點として說いてゐるほどである、而も多くのエコノミストは彼の「資本論」に感服する者ではない。予の如き、いまだ自ら充分に彼を味ひ得たりと曰ふ能はざるも、資本論をバイブルとして信奉する者ではない。

然しながら、予は社會主義者を以て自ら任ずる者である。予は曾て自ら自白した如くヒユマニテイの社會主義家である。社會主義の經濟學は決して完全なものではない。人世何者も曾て完全なりしものあらざる如く、否な人自身が不完全である如く。而も人道の社會主義は吾人が今日の世に見出し得る最も壯高なる又實際的なる理想である。予は又殊にその政治的側面よりして社會主義者たることを自任する者である。假

が米國社會民主黨に加つたのもこれを以てである。

人道の社會主義とは必ずしも資本共有說を意味しない。何事でも凡そ人間社會を導びいて、進歩と幸福とを持ち來す者は吾が黨の士である。個人主義もある點に於て可なり。無政府說もある場合に於て可なり。バクニン可なり。ヘツケル可なり。マルクス可なりである。されば必ずしも一主義に對して妄從するの必要はないのである。

若しマルクス一派の所說に妄從するのみが社會主義者であるならば、予は社會主義者たるの名を辭退せねばならぬ。予は何事にも直に社會主義の世になれば、此憂はないと我田引水的の筆鋒を適用するを、平生心よしとせぬ者である。勿論我社會主義の善所は、何處までも主張するを辭せぬ者であるけれども。

歐洲の社會主義者でも、その領袖とも曰はるべき人物となると何れも今日に於ては、最早マルクスの一言一句を金科玉條として崇拜してゐぬと曰ふことは、ブルックスがその著「粉々たる社會」に明記してゐる所で、唯だ容易く口外せぬのは、その無學なる多くの黨人の始末を考へてゐるからで、これは丁度基督教の牧師が自分は充分に高等批

評を博つてゐながら、それを發表せぬと同一の事狀に依つてゐる。

今日は迷信的信仰の時代でないから、社會主義でも他の諸種の事物と同じく、常に研究の餘地を與へてやらねばいけぬ。完全無缺なりと初めより極めこむ如きは、決して今日の時代に適應した者でない。

予は一言にして曰へば、社會主義者のユニテリアンである。若しマルクスを崇拜する基督を崇拜する如くなる者を指して固執派と曰ふならば、予は自由派を以て任せねばならぬ。予は此世の中に於て何人をも崇拜することは出來ぬ。尊敬することは出來る。信奉することは出來ぬ者である。かく言ひ來れば予は遂に言ふ所の社會主義家にてあらざるか。無政府黨なるべきか。個人主義者なるか。キリストの徒乎、はた佛陀の徒乎、これに對する予が答は簡にして明である。曰く然りそうして否なと。

言論の不自由なる米國

言論の自由ならぬ國は露國のみにてあらざる也。民主國と自稱する米國

「帝王」でよ遺傳的主權者を有せる獨逸國のみにてもあらざる也。民主國と自稱する米國に於ても、言論は不自由なりと知らずや。

世界の各國中新聞雜誌を發行すること最も多きは、この米國也。而してその新聞雜誌を愛讀する讀者の多きも、亦この米國也。今日米國に散在せる幾千の新聞雜誌中、言論の自由を有せる者それ幾干ぞ。

彼等には露國に於ける如き、政府の嚴重なる制裁はあらざる也。日本にある如き綿密なる政府の調査官はあらざる也。偶ま紐育に於けるコムストツカリー事件の如きものなきにあらずと雖も、これ例外也。寧ろ稀れに見る所の事實也。

頃者、マサチユーセツツ洲の一都市に於て、シンクレヤーの名著「ジヤングル」をその市の圖書館にいるゝを禁せしも、セントルイス市に於て、同一事を敢てせしも、皆な紐育のコムストツカリーを猿眞似せし者也。先年初めて紐育に於て同市の風俗審査官たるコムストツク氏がバアナアド、ショウの一戲曲の興行禁止を命せしや、世論紛々、所謂アングロ、サキソン、ヒポクリツトの、道德呼ばはり甚しきものありし、ショ

ウは即ち米國を評して曰く「米國の文明は第二流の文明にして、又地方的文明也」と。

予はボストン市のパブリック圖書館にゆきて、社會主義に關する書籍の極めて尠なきを發見せり。予が目下使用しつゝあるプロビデンス市の圖書館には無政府主義に關する書籍は一冊もあらざる也。一日同圖書館につきて、バアナアド、ショウの著作の外出せるや否やを尋ねしに。館員は曰へり。同氏の書籍は何時も外出してある也。否な、永久に外出せる也と。予はこゝにもコムストックカリーの潛入せるを見たり。

然れども可笑しき事實に予は一日遭遇せり。二三日前のことなりし、予は同圖書館にゆきて、ロヨン、スパアゴウの著「小兒の絶叫」と云へる奴を、新刊書架中よりとり出して、これを借出んことを要求せり。館員の一人たる一女性は書籍を見、予の顏と見合せて開ふせ曰く、「君は社會問題に興味を有し給ふや」と。予は答ふるに「然り」を以てせり。然るに彼女は突然、自身の社會主義者なることを予に告げたり。予は直に持ち合せし「タオーカル」「シカゴ、ソシオリスト」等を示せば、彼女は聊か意外なる態にて「君もや」と驚ろきたりも、予等は即ち親しく握手して、同主義者たるの好意を通じぬ。

予は雜誌室にありし妻を呼び來りて、彼女に紹介せり。予等三人は、立ちどころに朋友と化しぬ。社會主義の勢力感化は遂にコムストックカリーの、左右し得る所にてあらざる也。

米國の前期雜誌は更らに甚しき也。彼等は資本家の奴隸也。少しく進歩的なる思想は彼等の敢て發表し得ざる所也。彼等の中論議の自由を有せるもの果して幾千かあた。殆ど絶無と曰ふも可なり。紐育の雜誌中やゝ氣力あるものは、コスモポリタン雜誌、エブリバデー雜誌、イレデペンデンド雜誌等の數種に過ぎず。

有名なるアーバート、ショウの主宰たる「評論の評論」も、近時は遂にウオール町のトリコとなれり。彼は資本家の氣息をうかゞふに汲々たるもの、又昔日の意氣は見るべからず、センチユリー、ハーパース、スクリブナース、マッククルアー、マンセー等、何れも一種の資本家雜誌にして進歩思想は禁物也。

ゴルギーが米國文明を極評せる一論文を草するや、彼はその出版所のあらざるに閉口せり、彼は彼の論文をば一の雜誌社より他の雜誌社へと轉送せり。而して漸く

プレトン雜誌の採用する所となりて、世に公にせられぬ。予はゴルキーの心事を推するに難からざる也。

彼等は自己の階級の歡迎する者のみをかゝげて、現代文明の批評や、論議は敢てせざる也。宜なり、米國幾千の雜誌や、多くは小說雜誌にして、忘情なる資本家の細君令孃等のヲモチヤ品たるに止まる也。彼等は婦人のための消時品たるに過ぎず。數週前ある統計家の調査せし所に依れば、米國の大雜誌の寄稿者の十中の七八は婦人にして、その題目は小說也。而して男子の寄書家は十中の二、三にして、その題目は詩又は論文なりと。プロビデンス、プレチン記者は憤慨して曰へらく「米國の雜誌が男子に依りて、男子のため書かるゝ時代の來るは何時ぞ」と。予は到底米國雜誌の「文藝倶樂部」「新小說」者流に勝るもの甚だ多からぬを信せんとする者也。

先頃歐洲よりかへれる、前紐育ジョーナルの持主たりしパリッツア……現紐育ウオールドの持主たるジョセフ、パリッツアと同人にはあらず……は米國の現時の新聞が除りに單調にして、同一調に失せるを難せり。彼は多くの異れる名を有せる新聞紙を見れども、その新聞は何れも同樣也。例令へば紐育タイムスと紐育サンとの差はその名の差異なりと公言せり。

予を以てみれば、これ決して怪むに足らぬ現象なりと信ず。何となれば、一線での新聞紙は一種の資本家にて專有せられ居れば也。資本家階級のインテレストは同一の者也。同一のインテレストを有せる人の發行せる新聞紙が、同一色を帶びしとて奇怪にはあらざる也。寧ろその當然なるを思ふ。

日本にても、資本家に讀者を有せる、「朝日」「時事」の如きは如何。資本家に依りて、所有せらるゝ「日々」の如きもの、先頃伊藤欽亮の所有となりし「日本」は如何に變せんとはするや。日本の諸雜誌がまだしも少しく米國のそれらに勝れるものあるは珍とすべし。勝れりと曰ふは質に於てにあらず。色に於てなり。即ち小說のみの雜誌と曰ふよりは、論議の雜誌と曰ふを得べければ也。

小說のみを讀む讀者の腦は虛弱也。病的也。考ふること能はざる腦也。批評をいるること能はざる狹隘なる腦なり。見よ、米國の雜誌、新聞が如何に批評ぎらいなる

よ。如何に論議やまざるよ。ある人は此現象をみて、米國の文壇には猜忌心なき證なりと曰へり。誤れるも甚しき觀察也。批評なき文壇は腦のなき文壇也。智力の欠けたる文壇也。感情、情性のみの文壇にてある也。

吾人は言論不自由の米國は、ゴルギーの所謂「黄色見」の横行とともに益々不自由の勢力の發達すべきを信ず。資本家制度の放縱たる米國の文壇は、畢竟根本的革命を要するの文壇也。所謂「囚はれたる文藝」とは米國のそれ也。而して米國の新聞雑誌は「囚はれたる新聞雑誌」にあらずして何ぞ。

富豪社會主義者

近時米國の富豪にして、社會主義に帰し來る者甚だ多し。先きにはシカゴトがヒューズの持主にして、所謂富豪の「人たるパダアソーンの一子は、市長ダン派の所謂市有主義なるものに飽足らずして社會主義に入り來り、今は紐育の富豪スロークスも亦ルーズヴェルト一派の主張に飽き足らずして終に断然告白せる社會主義者となれり。

吾人は富豪が社會主義者となりしことを以て、物珍らしく喋々せんとするものに非ず。吾人にとりては一車夫の社會主義者となるも、一帝王の同志たらんことを申出づるも、敢て異なることあるを知らず。何となれば社會主義は爵位を以て人を遇することをせざれば也。

地位を以て人を遇せず、黄金を以て人を遇するを以てなり。

一昨年なりしと覺ゆ。英國に於てウヲルウヲイキ伯爵夫人が社會主義者となりし時、世間は頻りに喋々する所ありしも、英國の社會主義者は冷頭を以て其のシグニフアイカンスを打算することを忘れざりし也。元來爵位や黄金が頭を下げ來りしを見て初めて社會主義に近づかんとするが如き輩は、到底社會主義の柱石たる能はざる也。吾人は曾て一度公使たりしことある矢野文雄君が社會主義者となりしとて左程有難く思ふ者に非ず。吾人は早稲田大學の一教師たる安部磯雄君が、所謂革命的社會主義に遠ざかり來りしとて、甚だ多くを失ふたるを感ずる者に非ず。

吾人の運動には高き地位の人を要せざる也。黄金のみ有てる人を要せざる也。學問

のうすき衣を着けたる人を要せざる也。社會主義運動の要する所の者は石の如き固き意志を有てる人也。萬古不抜の精神也。片々たる小才子の器に要せず、事をなし終るまで貫し通す時の人格也。虚弱なる意志、病的なる熱性は社會主義運動に用ゐる所ある見ゆる。

ベルブストークが、半途的社會主義たるハースト一派を去りて社會主義に來りしは……色々なる世評あるにもせよ、……予はストークスの誠實を信せんとする者也、然れどもストークスは世人の思ふ如く才幹ある人物にあらず。多年社會事業に從事せること、猶太人の一貧女と婚せるの二事を除きては彼は何者の註すべき點だも有せざる也。彼は辯舌なく、文章の能なく學問の才なく、彼はたゞ善良なる心を有せる人也。而もハースト一派はストークスを遇すること至つて厚く、昨冬ハーストが紐育市長候補者たりし時は、ストークスは擧げられて區長の候補者たりし。而して今彼が社會主義者たるを告白すれば、輕薄なる社會主義者連は直に非常なる助力を得たりし如く思ふ者あり。之れ何れも黄金の衣に其視力を奪はれたる輩に非ずして何ぞ。

命の時代に於て富者の社會主義者たる其より容易の事に非ず。彼は所謂行囊を投げ捨てざるべからざる面も遙かに多者の社會主義者たらんとする者に比して何ぞや。貧者が社會主義者たらんとするには多大の決斷と勇氣と獻身とを要する也。只この一事を以てしても一貧者の社會主義者となりしことは、一富者の社會主義者となりしことよりは、如何に多くの意味を含めるかは、明かなるに非ずや。

而して吾人は……唯世人のみに非ず。所謂眞個民主々義を口にするものにして一ストークスの社會主義者となりしことを嘆々する間に、一車夫の同志となりしことを重要視せざるものあり。之れ豈民主々義を笠に着たるヒポクリットに非ずして何ぞ。吾人はストークスの同志者となりしことを喜んで歓迎する者なりと雖も、ストークスの更に、献身的事實を見ざる限りは、殊更その行動を稱賛する理由を知らざる也。

パターソンに至つては少しくストークスに勝れる者あり。彼や未だ年少、昨年シカゴ市長ダンと共に、擧げられて市政にたづさわり、國する所ありて斷然ダンと其の縁を

絶ち、直に社會主義者となりし也。而して今や告白して曰く「余は余の父より受けつげる財産に衣食する間は未だ眞に社會主義者となりしといふを得ず、予は自らの勞働に依りて衣食せざるべからず、然らざれば余は多くの社會主義者を欺くもの也。余は遠からず生產的勞働に從事する覺悟也」と。

吾人の尊重すべき點は之れ也。口に社會主義を曰ふて、行に資本家に出入し、爵位に叩頭し、地位に戀々たるの徒は到底吾人の朋友に非る也。七八年前社會主義協會なるものが、初めて東京ユニテリアン教會に設立せられてより以來、之に出入せしもの又少しとせず。而してその設立者たりしものにして今日社會主義者として、其の何處にあるやも、知る能はざるものすらあり。吾人は日本人の耐久心なく、節操なく、熱誠なきを恥ぢざるを得ず。

見よ昨日組合教會員たりし者が今日ユニテリアン協會員となり、而して文明日は知らぬ顏をして組合教會に轉じ來れる者……その主義主張や精神を見ることの、如何に輕薄なるや。彼等の主義を變ずるは破れたる下駄を捨つるよりも容易なるが如し。吾人

の敎師にして獨乙一宣敎師たるムンサンゲル君の曰へりし如く、日本人に獨創力なく、適用力はこの欠點より來れる者也。パタもソンに少くとも自ら社會主義の精神を考へし如く思はるゝ也。ストークス或は亦然らん、只だ吾人は未だ彼の異の呼吸を見ざるまで也。翻譯社會主義、猿眞似社會主義は終に其の實を結ばざるを奈何。自ら考へたる感ぜられたる社會主義でなくば一ミリオネーの社會主義も、一敎授の社會主義も悉く駄目也。

世にマルクスを眞似たる社會主義者あり。バクニンを眞似たる無政府主義者あり。ヅヨーヂを眞似たる單稅主義者あり。翻譯せる市政專門家あり。而して自ら考へたる社會主義、無政府主義、單稅主義の極めて少きは何故ぞや。吾人は翻譯新智識の余りに多きに倦き果てたり、彼等は田舍中學の語學敎師にて滿足して貰いたきもの也。彼等の口にする主義とか主張とか新智識とかは余りに小供だまし然たる觀あり。

吾人は告白せるストークスが自ら考へたる社會主義者であることを希望する者也。吾